

# 石川県埋蔵文化財情報

## 第 7 号

巻頭カラー写真（畝田ナベタ遺跡・だいじょう寺畑遺跡）

平成13(2001)年度上半期の発掘調査から ……調査部長 小嶋芳孝…(1)

発掘調査略報

だいじょう寺畑遺跡…(4)

柏原 A 遺跡 ……(6)

南方遺跡…(8)

四柳ミッコ遺跡…(10)

荻島遺跡…(12)

兵庫遺跡・粟生 B 遺跡 ……(14)

中屋遺跡…(16)

金沢城跡…(18)

千代・能美遺跡…(20)

幸町遺跡…(22)

猫橋遺跡…(24)

平成13(2001)年度上半期の遺物整理作業 ……企画部整理課…(28)

調査・研究報告

畝田ナベタ遺跡の帯金具について ……熊谷葉月・小嶋芳孝…(30)

ガラスコフカ 1 遺跡出土の錫製品について ……(41)

ユーリ G. ニキーチン・中山由美・小嶋芳孝

志賀町末吉館畑遺跡の発掘調査 ……加藤克郎…(51)

2002年 3 月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター



写真1 C2区 大型掘立柱建物群（北から）



写真2 B7区 帯金具出土地点（矢印、南西から）



写真3 出土帯金具（2倍）

畝田ナベタ遺跡（金沢市）

写真1 C2区 大型掘立柱建物群（北から）

9世紀前半を中心とする当遺跡の中心部と考えられる区域である。東西棟と南北棟の組み合わせは、この調査区以外では見られない。建替えも規模や位置を若干変えながら行われている。

写真2 B7区 帯金具出土地点（矢印、南西から）

掘立柱建物に伴うものと思われる幅約50cmの浅い溝から出土した。

遺跡の中心となる時期（9世紀前半）と重なる。

南北方向に数棟の大型建物群が連なるエリアの南端部に当たる。

写真3 出土帯金具（2倍）

中央に花文を置き、周囲に唐草文を巡らせる宝相華唐草文とよばれる意匠が浮き彫りにされている。青銅製の地金に金箔を貼り、その上から文様の窪み部分を黒漆で装飾している。

縦18mm、横19mm、厚さ2mm、重さ2.3g。



写真1 石垣で区画された墓地跡周辺の完掘状況（西から）



写真2 珠洲焼蔵骨器の検出状況（西から）



写真3 石造物の検出状況（東から）

だいじょう寺畑遺跡（珠洲市）

写真 1 石垣で区画された墓地跡周辺の完掘状況（西から）

中・近世の墓地跡は、北側斜面と東側の中世墓地跡とを石垣で区画して平坦に造成した場所に位置している。石垣前には木桶に入れられて土葬されたと考えられる墓坑が数基並んでおり、墓坑周辺の火葬骨を埋納した小ピットからは、ガラス製の数珠玉 1 組も出土している。

写真 2 珠洲焼蔵骨器の検出状況（西から）

本文図中墓 1 の墓坑からは、口縁を打ち欠いた珠洲焼の壺に、すり鉢を蓋として被せた蔵骨器 1 組が、割れた状態で出土している。壺の中からは 1 体分の火葬された人骨が検出されているが、副葬品は出土していない。すり鉢は壺の時期より若干新しいもので、中世後半以降に埋納されたものと考えられる。

写真 3 石造物の検出状況（東から）

本文図中墓 2 の土坑底からは、凝灰岩製の五輪塔火輪 2 点と地輪 1 点、五輪塔を線刻して表現した板碑 1 基、自然礫 1 個が検出されている。また、土坑上部には自然礫をいくつか集めた集石や五輪塔水輪 1 点、集石直下からは火葬された人骨片も検出されている。

# 平成13(2001)年度上半期の発掘調査から

調査部長 小嶋芳孝

平成13(2001)年度は、県教委から25遺跡の調査を受託した。当初の調査面積総計は、62,740㎡である。内訳は国土交通省事業に伴う調査が3件、県農林水産部関係が14件、県土木部他が8件である。

本書では4～8月の調査を主に紹介する。珠洲市だいじょう寺畑遺跡では、中世から近世の墓地を調査している。また、同市内の柏原A遺跡では、炉跡や護岸施設のある溝などの中世の遺構群を検出し、南方遺跡では古代から中世の遺物を検出している。鹿島町四柳ミッコ遺跡では、昨年度に調査した箇所に隣接して400㎡の調査を行った。近世～中世の水田遺構の下層から、奈良時代と古墳時代中期の建物を検出している。志雄町荻島遺跡では縄文から中世の遺構・遺物を検出し、羽咋市兵庫遺跡・粟生B遺跡では弥生中期～後期を主とする遺構・遺物を検出している。金沢市中屋遺跡は縄文時代晩期中葉の標識遺跡であり、ほ場整備事業に伴う水路工事部分140㎡を調査した。検出した遺構は川跡が主で、川底から晩期の土器が出土している。金沢城跡は、緑化フェア準備工事に伴う調査を7月までおこなった。風呂屋口門の調査では、現存する石段が近代以降の工作物であることを確認した。このほか、数寄屋門周辺・尾坂門・橋爪門枡形で小規模な調査をおこない、いずれも近代以降の遺構を検出した。小松バイパス建設に伴って昨年度から実施している小松市の千代能美遺跡では、今年度2,000㎡を調査した。千代能美遺跡は古墳時代初頭の首長居館であることが昨年度の調査で判明しており、今年度の調査でも川跡から黒漆塗りの盾が出土している。小松市幸町遺跡では、中世の土坑や井戸を検出している。土坑には多量の鉄滓が埋められており、調査区の付近に鍛冶工房があったものと思われる。加賀市猫橋遺跡は弥生時代後期初頭の標識遺跡であるが、農道建設事業に伴い2,000㎡を調査した。弥生時代中期の竪穴建物と方形周溝墓を検出している。

発掘調査の件数・面積は減少傾向にある。これまでは、開発事業の要請に応じて発掘を優先してきたため、出土品整理や報告書刊行事業が山積している。今後は、調査員を内業に配置して報告書刊行を促進し、調査成果の公開に努力したい。



柏原A遺跡  
珠洲市文化財保護審議会見学風景



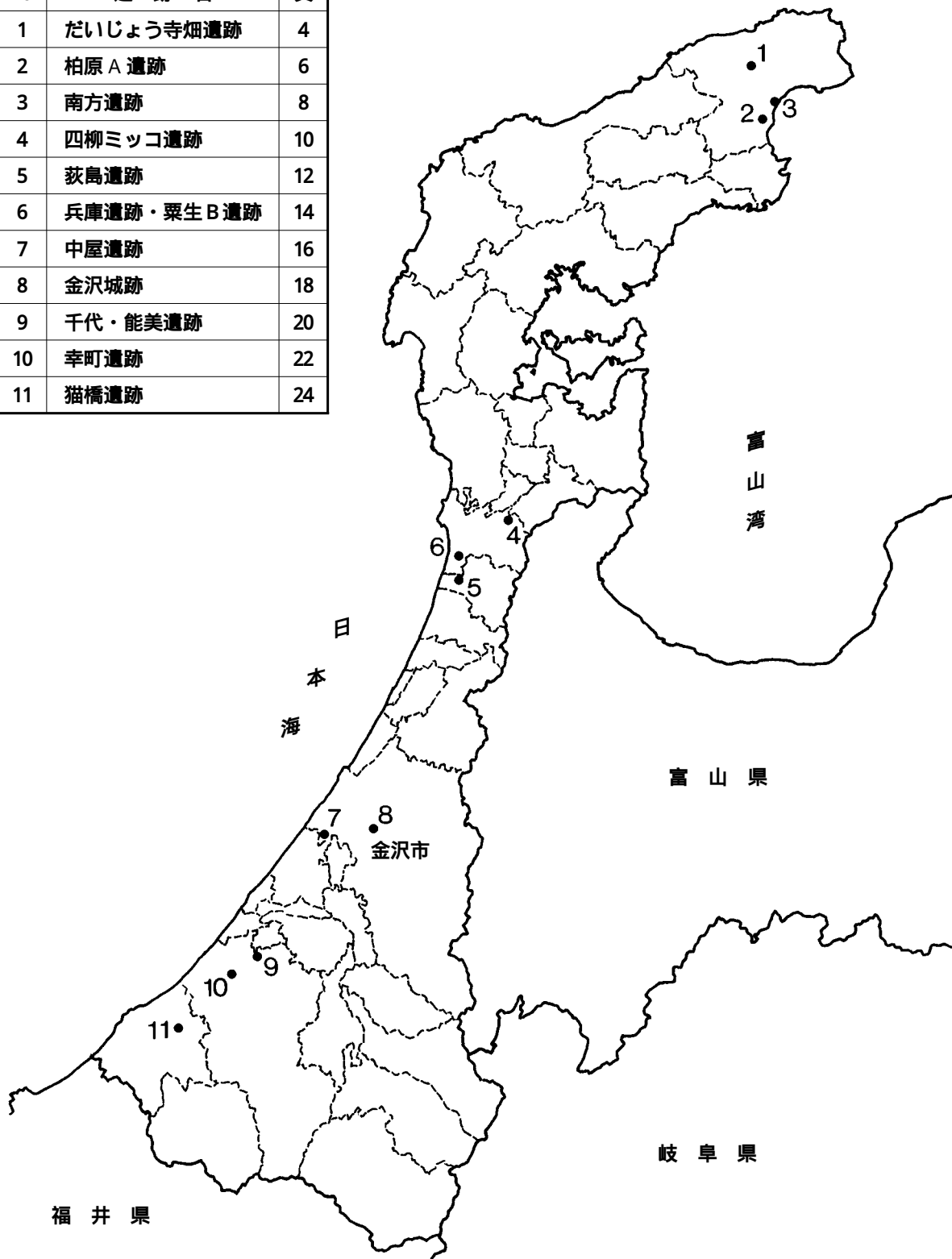
四柳ミッコ遺跡  
土器溜まり発掘風景

調査課	事業者	事業名	場所	遺跡名	面積(㎡)
調査第1課	国土交通省	一般国道8号小松バイパス	小松市能美町	千代・能美遺跡	2,000
		一般国道8号津幡北バイパス	津幡町加茂	加茂遺跡	8,000
		一般国道159号鹿島バイパス	羽咋市四柳町	四柳ミッコ遺跡	400
	小計				10,400
調査第2課	土木部	金沢城址公園整備	金沢市丸の内	金沢城跡	2,500
	農林水産部	県営ほ場整備 福増・中屋	金沢市中屋町ほか	中屋遺跡他1件	440
		県営ほ場整備 樋川	志雄町荻島	荻島遺跡	160
		県営ほ場整備 矢田野台地	小松市矢田野町	矢田野遺跡	1,200
		県営ほ場整備 土田	志賀町館開	館開野開遺跡	400
		県営ほ場整備 於古川	志賀町穴口	穴口遺跡他1件	780
		県営ほ場整備 末吉	志賀町末吉	末吉館畑遺跡	120
		県営ほ場整備 上戸	珠洲市上戸町南方	南方遺跡	300
		県営ほ場整備 宝立	珠洲市宝立町柏原	柏原A遺跡	300
		県営ほ場整備 鳥屋北部	鳥屋町新庄	新庄遺跡他1件	240
		農免農道整備 北潟3期	羽咋市東の場町	東の場タケノハナ遺跡	2,000
		一般農道整備 加賀中央	加賀市片山津町	猫橋遺跡	2,000
		県営ほ場整備 粟ノ保	羽咋市兵庫町	兵庫遺跡他1件	610
		県営ほ場整備 相馬	田鶴浜町吉田	吉田南側B遺跡	550
		県営ほ場整備 北大海	押水町冬野	冬野遺跡他1件	310
農水部小計				9,410	
小計				11,910	
調査第3課	土木部	一般国道415号 道路改良	志雄町杉野屋	杉野屋専光寺遺跡	4,000
		一般国道249号 道路改良	珠洲市若山町大坊	だいじょう寺畑遺跡	1,200
		小松駅付近連続立体交差	小松市八幡町	幸町遺跡他1遺跡	700
		大聖寺川総合開発 九谷ダム	山中町九谷町・小杉町	九谷A遺跡他1遺跡	1,650
		ふるさと支援道路 小松山中線	小松市那谷町	那谷B遺跡	500
	県教委	小松高等学校改築	小松市丸内町	小松城跡	1,430
小計				9,480	
調査第4課	土木部	金沢西部第二土地区画整理	金沢市畝田西ほか	畝田・寺中遺跡他	10,700
			金沢市畝田中	畝田C遺跡	2,800
			金沢市無量寺	無量寺C遺跡	700
			金沢市畝田東	畝田ナベタ北区	2,000
				畝田ナベタ南区	14,350
	畝田ナベタ南区	400			
小計				30,950	
総合計				62,740	

(財)石川県埋蔵文化財センター発掘調査計画 (平成13年度当初)

[ 発掘調査略報 ]

No.	遺跡名	頁
1	だいじょう寺畑遺跡	4
2	柏原 A 遺跡	6
3	南方遺跡	8
4	四柳ミッコ遺跡	10
5	荻島遺跡	12
6	兵庫遺跡・粟生 B 遺跡	14
7	中屋遺跡	16
8	金沢城跡	18
9	千代・能美遺跡	20
10	幸町遺跡	22
11	猫橋遺跡	24



掲載遺跡位置図 ( S = 1 / 800 000 )



## だいしょう寺畑遺跡

所在地 珠洲市若山町大坊地内  
調査面積 1,900㎡

調査期間 平成13年5月8～平成13年8月31日  
調査担当 安中哲徳 西田昌弘



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

だいしょう寺畑遺跡の所在する珠洲市若山町大坊は、飯田町の市街地から北西方向に直線距離で約5km離れた、若山川とその支流の結節点に位置している。今回珠洲市飯田町から大谷峠を通り大谷町へと抜ける一般国道249号線の改良工事により発掘調査が行われることになった。国道249号線は生活道としてだけでなく、外浦と内浦をつなぐ重要な観光ルートとなっているが、急カーブや単線部分が続き、冬季は冰雪などにより通行不能になることが多い山越道として知られている。調査地は西から東へと流れる若山川と北西側から流れる支流とにはさまれた丘陵先端部の南斜面にあたる。調査前には山林と畑地が広がっていたようであるが、現在では周辺の開削がかなり進んでおり、当時の景観は完全に失われている。

ている。

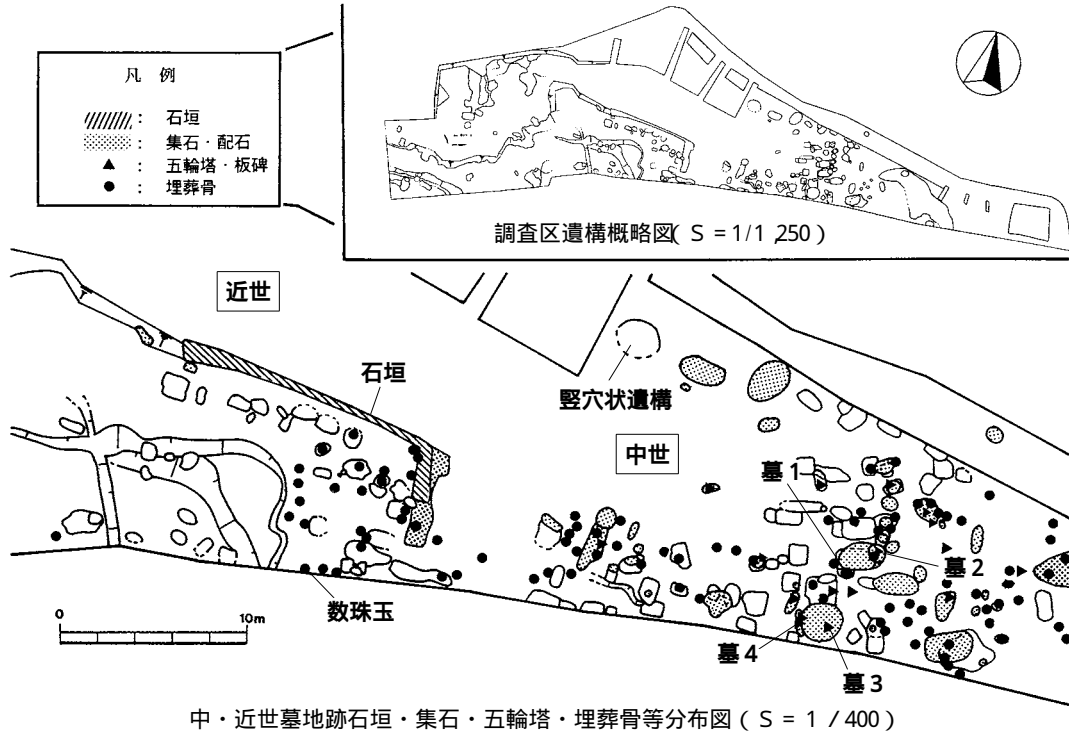
調査地南東側に隣接した浄土真宗大谷派である般若山正福寺境内北西側の畑地と墓地は、通称を「だいしょうじばたけ」と言われている。かつて珠洲焼片や五輪塔、宝篋印塔の残欠が点在し、鏡板を欠失しているが金銅製薬師如来坐像の懸仏が明和年間に出土しており、この地に天台宗もしくは真言宗寺院の「だいしょう寺」があったと伝えられている。また昭和11年に飯田高校により試掘が行われ、石鏃や石斧などの石器が出土しており、縄文時代の遺物の散布地としても知られている。

今回の発掘調査により、石垣で区画された正福寺歴代住職の墓も含め、丘陵斜面を利用して造られた中世後半から近世にかけての墓地跡を多数確認することができた。墓坑と思われる方形や円形の土坑約80基や、その周りの小ピットなど約90ヶ所から埋葬された人骨を検出している。墓坑の上部には、拳大から人頭大の自然石を集めた集石や円形に配石したものが約30基あり、墓坑周辺や内部からも五輪塔空風輪7点、火輪6点、水輪7点、地輪5点、五輪塔線刻板碑1基などの凝灰岩製の石造物がみついている。原位置をとどめているものは少ないと思われるが、斜面であるため自然に流れたのが、人為的に動かされたのかは不明である。墓坑からは人骨を検出したもの約30基と、していないもの約50基があり、これは埋葬時に土葬であったか、火葬であったかの違いによるものと考えられる。土葬と思われる墓坑からは鉄釘が多く出土しているが、棺材は遺存しておらず、堀方や堆積状況から木桶に入れて埋葬されていたと推定している。火葬と考えられる墓坑からは、中世後半の珠洲焼壺とすり鉢を組み合わせた蔵骨器が1組みついている。火葬により骨片の大きさは細かくなっているが、土葬のものに比べて人骨の遺存状況は良い。その他多くの墓は土器や陶磁器を蔵骨器に用いておらず、人骨を何に入れて埋葬していたかは不明である。副葬品は3基の墓坑底から天禧通寶や元符通寶などの北宋銭が数枚づつ合計15枚出土している。他にも火葬骨埋納ピットからガラス製の数珠玉1組や大型の墓坑から16世紀後半の土師器皿が1枚出土しているものの、全体的に乏しい。また、近世以降と思われる火葬場跡の灰原からは、人骨片や寛永通寶2枚がみついている。

今回確認した墓地跡が展開する「だいしょうじばたけ」北西側の斜面も「だいしょう寺跡」の一部に含まれると考えられる。墓坑の切り合いや土層の堆積状況からは時期幅があると思われるが、墓坑

の数に比べて五輪塔や蔵骨器、副葬品等が少ないため、詳細な検討については今後の課題としたい。

また、墓地造成のために他から運び込まれたと考えられる土中から、縄文土器や両面に加工を施した打製石器・石鏃・磨製石斧、古代の土師器や須恵器が出土し、時期不明ではあるが竪穴住居状の遺構も検出しており、周辺に縄文時代と古代の集落跡が展開している可能性も確認している。（安中）



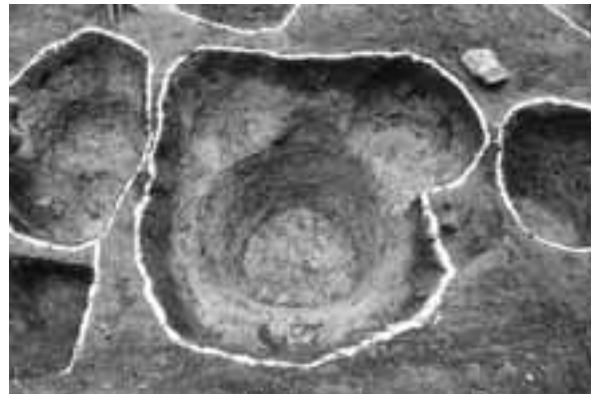
中世墓地跡完掘状況(西から)



墓4 五輪塔検出状況(西から)



墓3 配石検出作業風景(北東から)

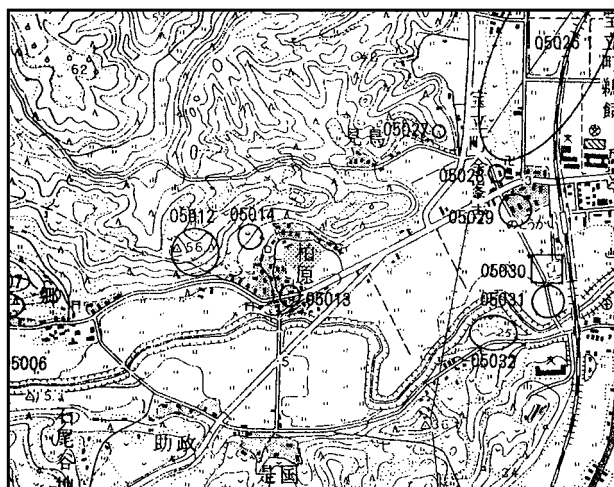


墓3 墓坑完掘状況(南から)

## 柏原 A 遺跡

所在地 珠洲市宝立町柏原地内  
調査面積 300m<sup>2</sup>

調査期間 平成13年6月4日～平成13年8月2日  
調査担当 宮川勝次 加藤克郎



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

柏原 A 遺跡は市の南部に位置する。南方は鶴飼川が東流し、北方は宝立山地をとりまく丘陵が広がっている。当遺跡はその丘陵の裾部に所在する。

発掘調査は県営ほ場整備事業に伴い実施し、中世の土坑、溝、ピット等が確認でき、遺物は珠洲焼を中心に、土師器、青磁等が出土した。また、珪藻土塊も多量にみられた。以下、各グリッド順に概要を説明する。

1～2区は調査区の最北に位置する。北西から南東に流路をとる溝、土坑、ピットを検出した。遺物は包含層から多量の珠洲焼や土師器の

他、石錘も出土している。

3区～7区にかけては鞍部を検出した。北西から南東にかけて低くなっており、現在の谷筋と同方向である。遺構は、溝2条とピット1基を検出した他、礫集中域を3ヶ所確認できた。そのうち1ヶ所(5区)は深さ約20cmの土坑上に、自然石が環状に組み立てられており、石に被熱の痕跡等が確認できることから炉跡の可能性がある。その他2ヶ所(4区)の礫群は、環状石組みに浅い窪みを伴うが石に被熱が見られないもの等である。8区杭近くで鞍部の東肩を確認している。遺物はほとんど出土していない。

9区～16区にかけては全体的に遺構密度が高い。9区～12区にかけては、ほぼ南北に流路をとる溝、ピット、土坑等を検出した。これら遺構からは珠洲焼、土師皿の他、流れ込みと思われる須恵器も少量出土している。

9区では土坑群が確認でき、落ち込み際の土坑周辺から、甕一個体を含め、多量の珠洲焼が出土している。また、9区の土層断面等から整地土層がみてとれ、谷部への集落域の拡張を意図したものであろうか。13区と14区北側半分においても落ち込みを盛土したと思われる跡が確認できた。この落ち込みは調査区外の東方に延びている。

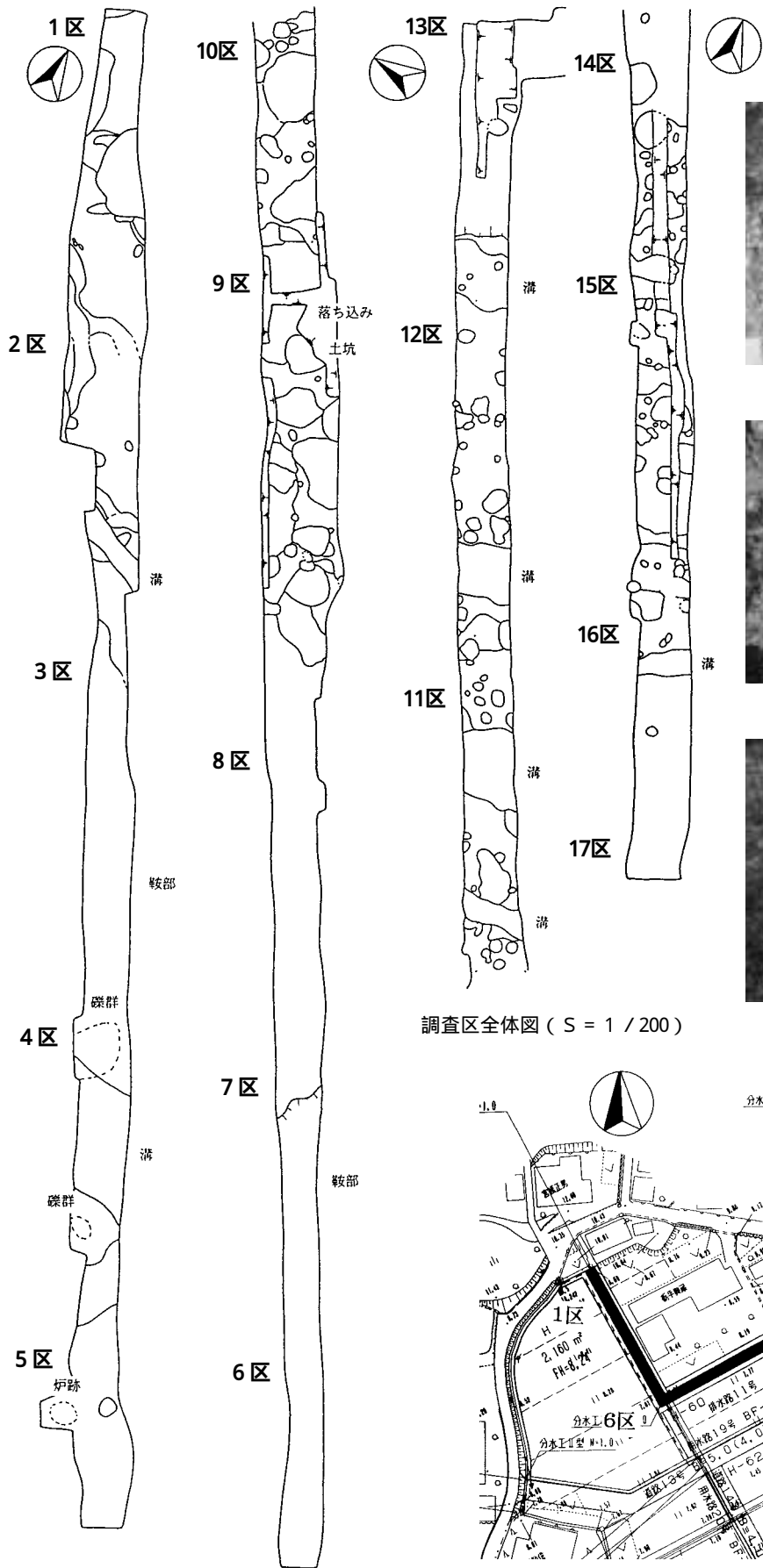
12区検出の溝からはコースター形の土師皿が何枚か重なった状態で一括して出土しており、その他の遺構からも確認できた。13区検出の溝は、幅約2mで北から南に流路をとる。東西両側に板を南北方向に立て(板と板の間は約60cmを測る)その内側を杭止めし、外側は石や珪藻土、珠洲焼片で補強している。溝底には礫や珠洲焼片が散在しているが、板の補強もしくは溝底に敷き詰めてあったのであろう。洗い場等の施設として機能していたと推定される。

14区～15区にかけては、遺構数が増え、柱根の残存するピットも確認できた。また、鎌倉時代後半と思われる片口鉢と共伴する珠洲焼の無頸壺が確認されている。

16区以南は、遺構が減少し、東西流路の溝とピットが数基検出されたにとどまる。

以上概観すると、9区以東に遺構が増えることから、集落域は谷部より丘陵側の北東域に展開すると推定できる。

(宮川)



調査区全体図 ( S = 1 / 200 )



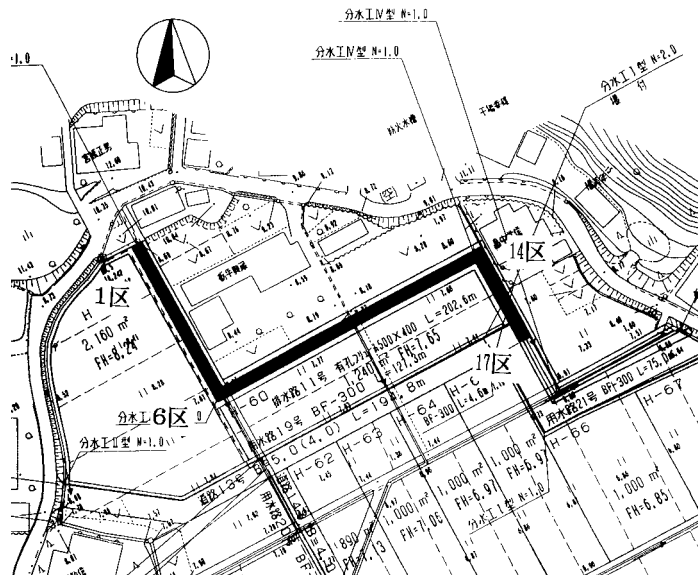
9区 珠洲焼出土状況



12区 土師皿出土状況



11~13区 完掘状況

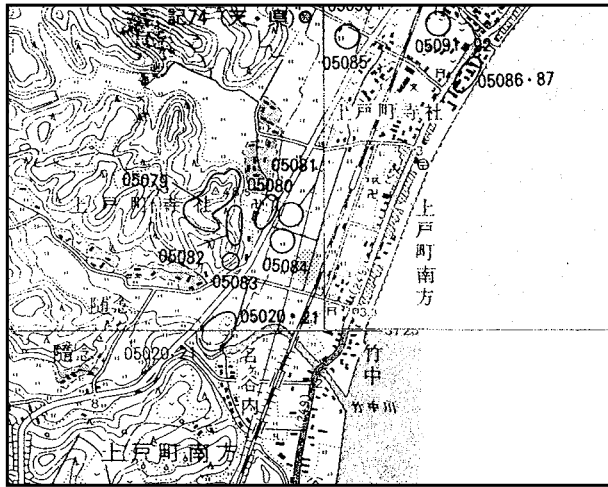


調査区位置図 ( S = 1 / 2 , 000 )

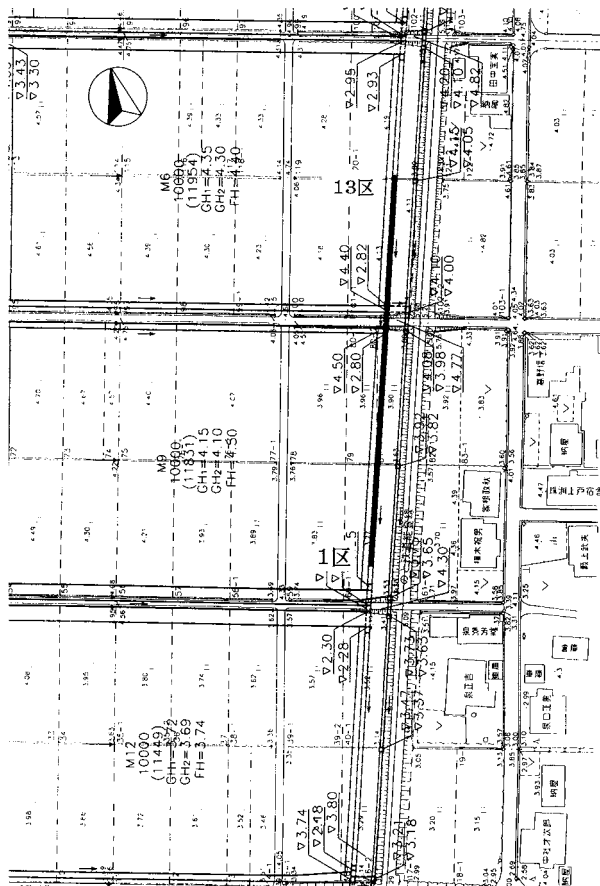
## 南方遺跡

所在地 珠洲市上戸町南方地内  
調査面積 260m<sup>2</sup>

調査期間 平成13年8月3日～平成13年9月5日  
調査担当 宮川勝次 加藤克郎



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 2,500)

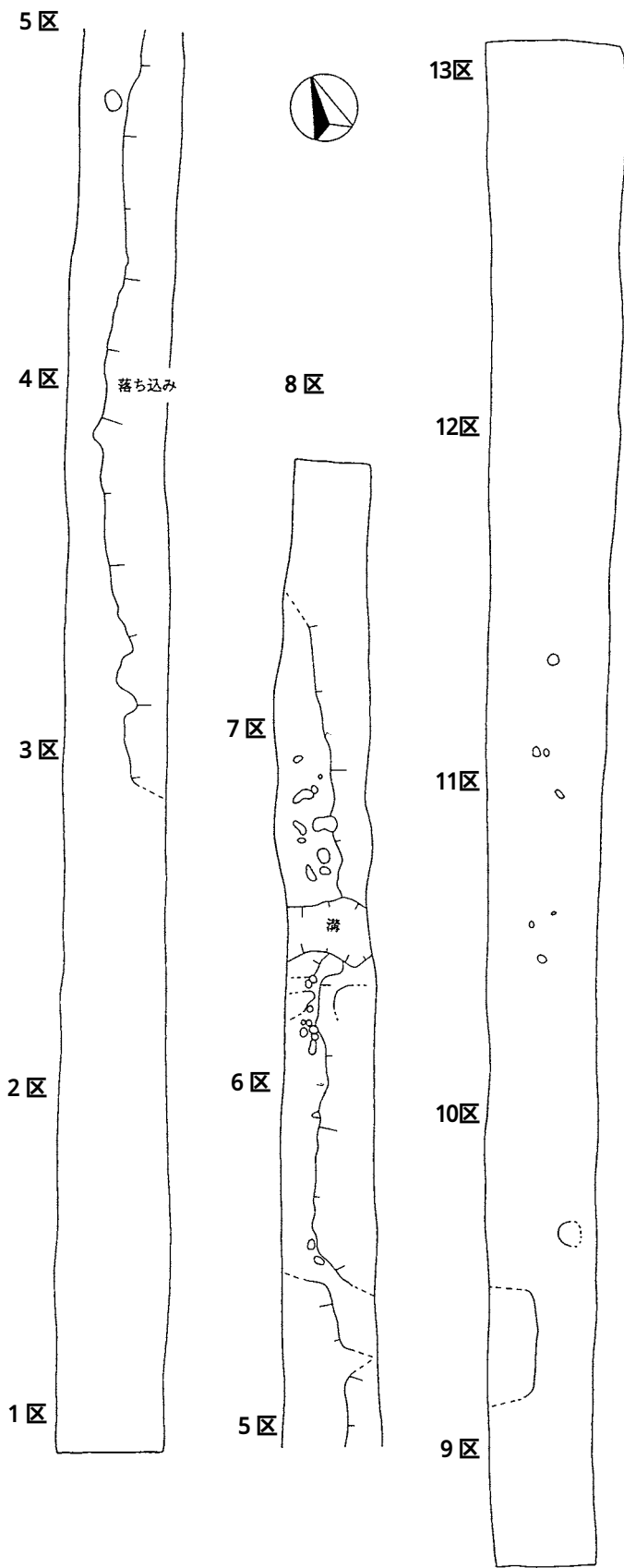
南方遺跡が所在する珠洲市は能登半島の先端部に位置し、三方を海に囲まれている。古代以来、日本海側有数の製塩地帯であり、中世では珠洲焼の生産地として特色ある文化を形成してきた。

本遺跡は市中心部から少し南寄りの水田地帯に位置し、北西は宝立山地をとりまく丘陵が広がり、東は飯田湾に面する。南は竹中川が東流し飯田湾に注いでいる。また、近くには南方の産土神を祀る柳田神社が鎮座する。発掘調査は、県営ほ場整備事業(上戸地区南方工区)に伴い実施した。全体的に遺構密度は薄く、古代～中世の遺物を確認した。調査区を含めた周囲は、湧水地帯である。

遺構の中心は6区であり、溝とピットを確認したが、時期を特定できる遺物は出土していない。1～5区と9～12区は、ピットが数基確認できたにとどまる。特に、3～7区にかけての東側半分は、自然地形によるものなのかわからないが、西から東にかけて落ち込んでいる。

遺物はその大半を、3～7区の落ち込みと遺物包含層から出土のものが占め、須恵器や土師器が中心である。内黒の土師器も数点出土している。その他には珠洲焼等の陶磁器も少量確認できた。また、漆器椀、曲物の底板、下駄、剣形等の木製品その他、用途不明の部材も出土している。なかでも調査区のほぼ全範囲から出土した部材は、自然木が混じる包含層からも多量に出土している。上述の木製品を含め、この多量の部材の意味する所、また、遺跡自体の性格付けは遺構が希薄なため判断するのは難しい。

(宮川)



調査区全体図 (S = 1 / 200)



4区 遺物出土状況



11区 土器出土状況



5 ~ 7区 完掘状況 (北から)

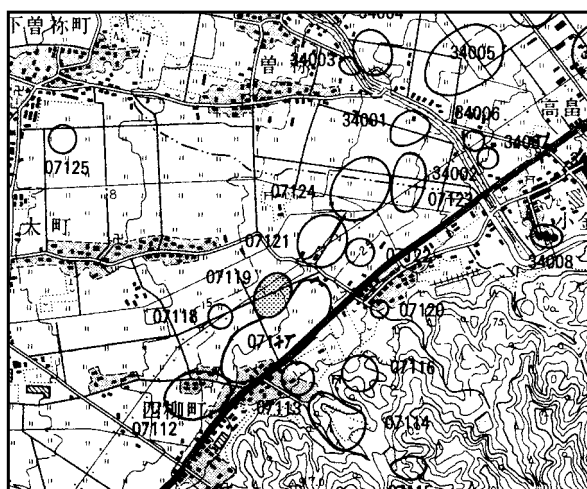
## 四柳ミッコ遺跡(第4次調査)

所在地 羽咋市四柳町地内

調査期間 平成13年5月8日～7月4日

調査面積 400m<sup>2</sup>

調査担当 安 英樹 岡田有紀子



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

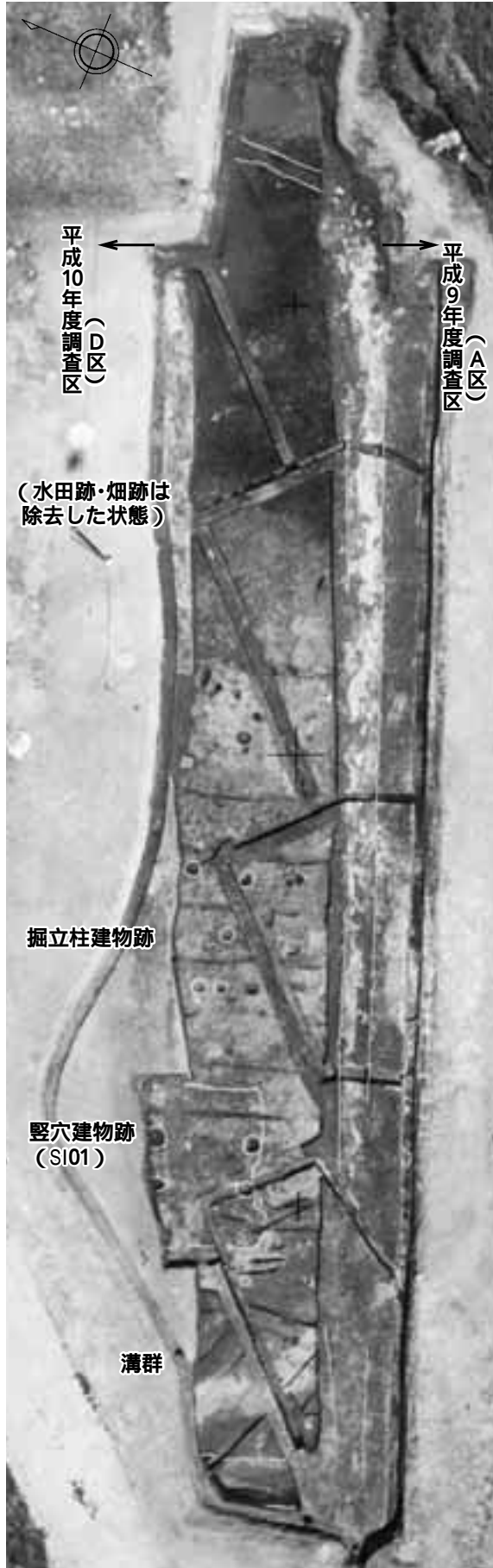
四柳ミッコ遺跡は羽咋市の北東端に位置し、邑知地溝帯の南東側山麓に展開する小扇状地に立地する。発掘調査は一般国道159号(鹿島バイパス)改築工事に伴って平成9年度から継続して実施されており、平成11年度までの調査によって、縄文時代から近世にかけて複数の遺構面が累積する遺跡であることが確認されている。

今回の発掘調査は通算で第4次を数えるものであり、平成9年度調査区(A区)と平成10年度調査区(D区)の間に存在する農道部分とその対象となった。調査では安定した遺構面が2面認められ、上層・下層に区分して紹介したい。

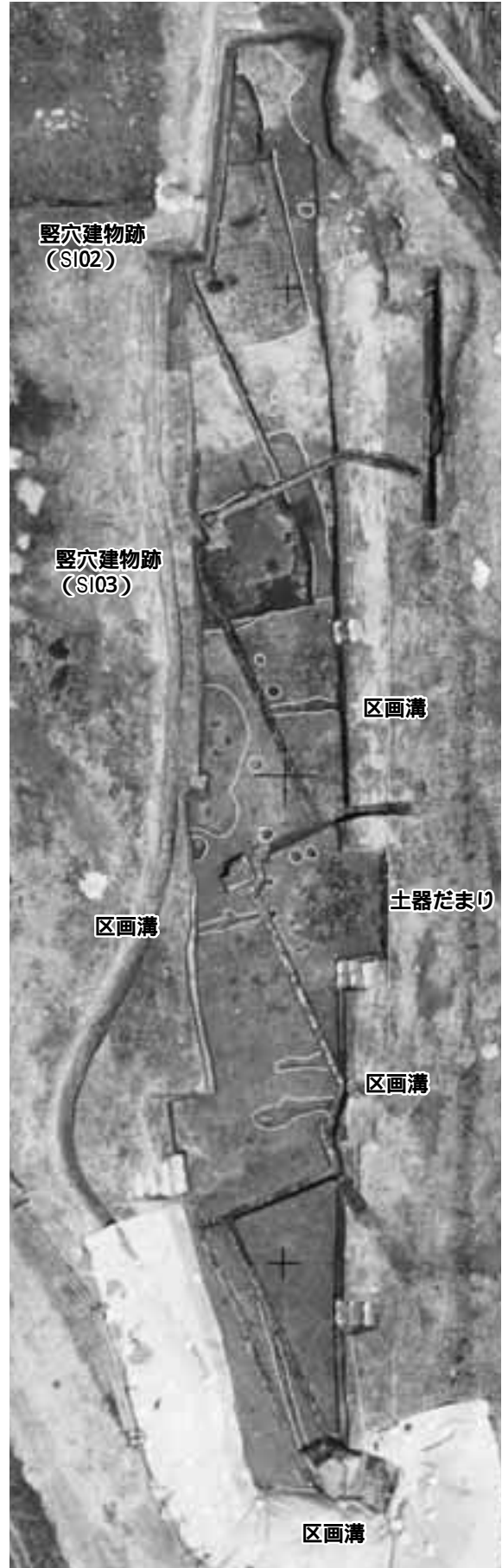
上層では竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡1軒の他、水田跡、畑跡、多数の溝などが検出された。中心となる時期は奈良時代(8世紀代)であり、建物跡はこの時期に属する。竪穴建物跡(SI01)は平面形が1辺4m前後の四角形で、壁に接して4基の柱穴が配され、南隅に竈を有する。掘立柱建物跡は1×2間以上の規模を確認した。水田跡は、上層の遺物包含層である黒色土を検出した面に足跡と根株跡を確認したものである。畑跡はその水田跡を被覆する砂層に掘り込まれた格子状の溝群である。水田跡と畑跡の分布範囲はごく部分的で途切れているが、後世に削平された可能性が高い。溝は多数検出されたが、覆土から判断して建物跡、水田跡、畑跡の各段階のものが認められる。以上から、上層は奈良時代を中心時期とし、部分的にはさらに新しい時期の遺構面の存在を確認できた。建物跡は平成9～11年度の調査で確認されている奈良時代の集落の一部である。水田跡と畑跡については中世以降の時期が予想され、平成9年度調査区のB区・面に対応する可能性がある。

下層では竪穴建物跡2軒の他、溝や落ち込みなどが検出された。時期は古墳時代中期(5世紀代)である。竪穴建物跡(SI02・03)は調査区の東半部に分布しており、SI02は平面形が1辺8m前後の四角形で、壁の辺中央に寄って貯蔵穴がある。壁周溝と柱穴が2対認められることから、建て替えられている。SI03は平面形が四角形の竪穴で、1辺4m前後のものと1辺6m前後のものが重なっており、前者から後者へ建て替えられている。溝は全般に幅が狭く浅いが、直交する方位を示す2群があり、調査区の西半部で規則的に配置されており、遺構が希薄な区域を四角形に区画するものと推定できる。遺物は土師器が中心で全域から多く出土しているが、夥しい量が著しく密集して出土した土器だまりが前述した区画の一角に存在する。この土器だまりからは滑石製の白玉も40点以上発見されており、何らかの祭祀に関わる廃棄行為と言えよう。以上から、下層は平成9～11年度の調査で確認されている古墳時代中期の集落の一部であり、調査区東半が居住域、西半が区画地・祭祀域として明瞭に性格付けができる。これはそれぞれのエリアが隣接する平成9・10年度調査区の状況と一致しており、集落の内部に多様な機能空間が存在する構造が明らかになったものである。

今回の調査では、既往の発掘調査区の間が対象となったことにより、遺構・遺物の様相が地点を追って変化する状況がより具体的に把握された点で、成果が大きかったものと言えよう。(安)



上層遺構面全景



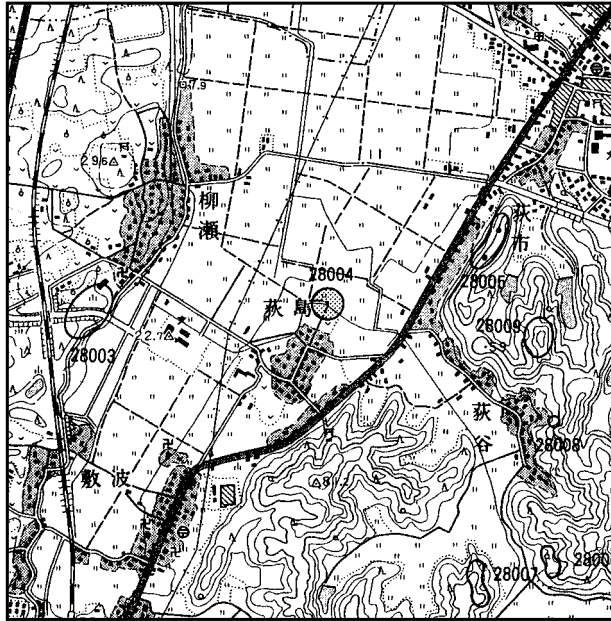
下層遺構面全景



## 荻島遺跡

所在地 羽咋郡志雄町荻島地内  
調査面積 240m<sup>2</sup>

調査期間 平成13年6月6日～平成13年7月10日  
調査担当 澤辺利明 荒木麻理子



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

荻島遺跡は邑知地溝帯の南西端に位置し、海岸砂丘の後背地にあたる平野部に立地する。県営ほ場整備事業に関わる調査として、平成11(1999)年度と12(2000)年度にも調査が行われており、今年度は第3次調査にあたる。

過去の調査では、縄文時代前期から中世にかけての遺構・遺物を確認している。今年度の調査区は、昨年度調査区のG区と近接しており、遺跡の東側縁辺部から集落外に至る範囲にあたる。

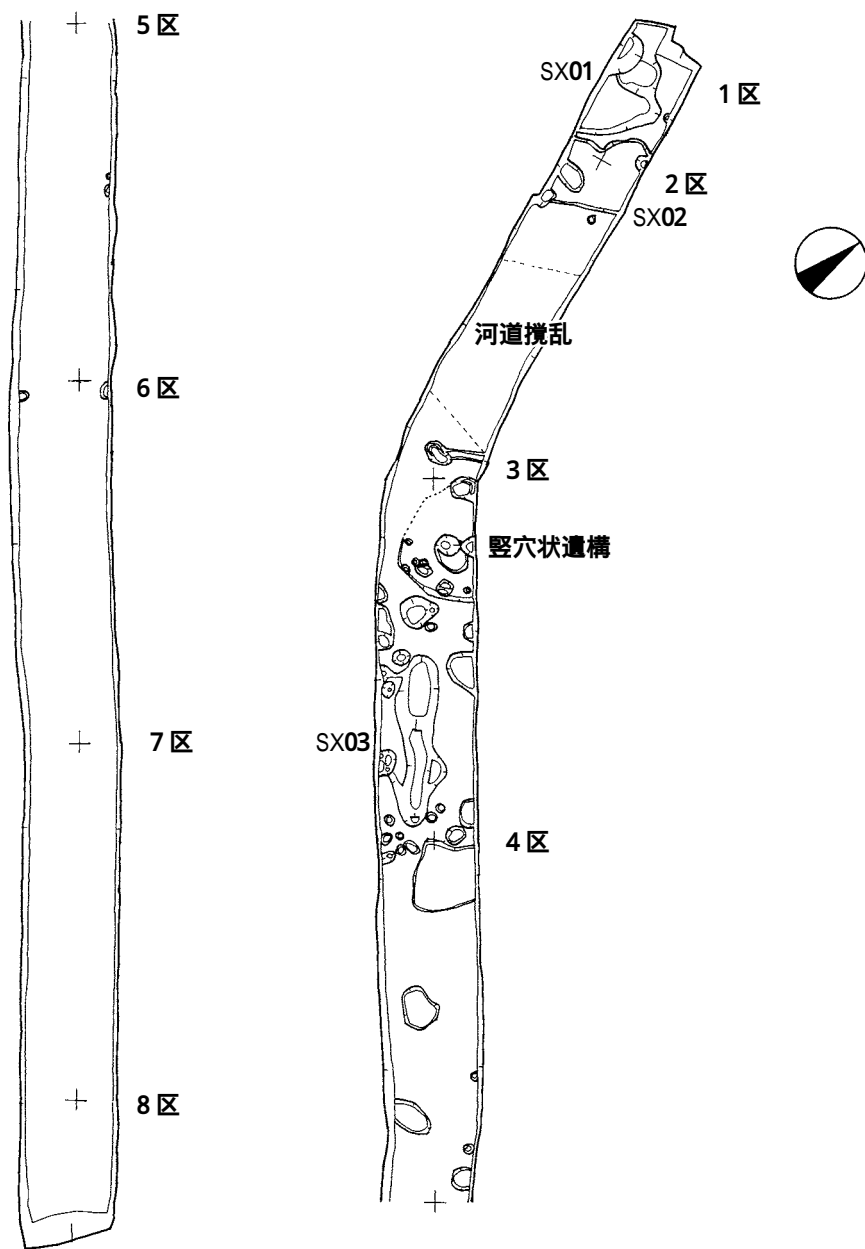
1～4区にかけてピット、土坑、不定形の落ち込みなどを検出したが、その密度は希薄であった。また、5区の半ばから調査区東端までの約30mにわたって、地山が緩やかに落ち込んでいく湿地となっており、ここからは遺構も

遺物もほとんど確認されなかった。遺物は1～5区の遺構・包含層から縄文時代前期、古墳時代後期から平安時代に属するものが出土した。

1区から2区にかけて攪乱状の落ち込みSX01・SX02があり、古墳時代後期～古代にかけての遺物が出土した。また、2区のほぼ全域が、後世の河道と見られる攪乱層となっており、縄文時代前期に属する深鉢1個体が良好な状態で出土している。3区からは、ピットや土坑など遺構がまとまって検出された。その他、縄文時代前期に属する深鉢が竪穴状の遺構から埋設されたと思われる状態で出土している。なお、この遺構は調査区外に延びていたため、全体の規模は明らかにすることはできなかった。また、不定形の落ち込み状の遺構SX03からは古代の遺物が出土した。その上面からは焼土面が検出されているが、直接遺構と関連するものかどうかについては検討が必要である。(荒木)



調査区全景



調査区全体図 ( S = 1 / 200 )



3区 深鉢出土状況



3区 竪穴状遺構

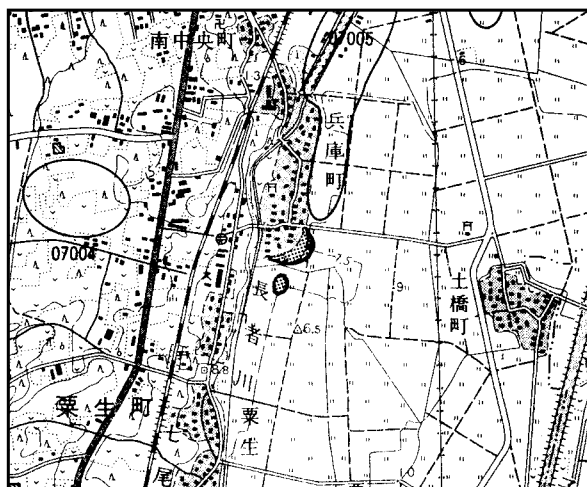
## 兵庫遺跡・粟生 B 遺跡

所在地 羽咋市兵庫町・粟生町地内

調査期間 平成13年7月9日～平成13年8月14日

調査面積 兵庫遺跡330㎡、粟生 B 遺跡150㎡

調査担当 澤辺利明 荒木麻理子



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

### 兵庫遺跡

能登半島中央部、羽咋市の日本海側には、縄文時代前期から古墳時代初頭にかけて順次形成された海岸砂丘（羽咋砂丘）が南北に伸びる。砂丘内縁は兵庫町付近で沖積低地側に若干張り出すが、遺跡はその張り出し南端に位置する。遺跡の大方は砂丘斜面から裾にかけて形成された兵庫集落に重複すると思われるが、県営ほ場整備事業に伴う今回の調査区域は、集落の南東端外縁、低地部に面した場所にあたる。

現地表は標高約4.7m、大部分で遺物包含層まで削平が及んでおり、遺構検出面は4.3m前後と

浅い。また、検出面までの掘り下げ中途では所々で粗砂層が確認され、たびたび土砂に被覆された当地の状況がうかがわれた。

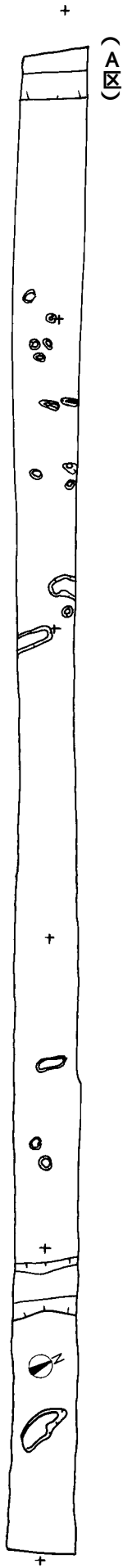
調査の結果、砂丘斜面からの流出土砂あるいは旧河川等により開析された鞍部（もしくは河道跡）3カ所、その間の平坦地ではピット、溝等が確認された。直接、集落域に関わる遺構は認められなかったものの、鞍部肩からは、集落域からもたらされたと思われる弥生時代後期の土器が多数出土した。特に鞍部1北肩では黄色粘土層を挟み、下層（弥生時代中期）と上層（弥生時代中期～後期）が識別される場所もあり、詳細に分析することで当該期の土器研究に寄与するものと思われる。

### 粟生 B 遺跡

調査地は兵庫遺跡の南約160mに位置する。地表の標高は5.7m前後、遺構検出面は、約4.9mを測る。周辺は昭和30年代のほ場整備時に盛土し水田としており、旧田面高は約5.2mを測る。

西半部では溝及びピットが、中程では深さ約30cmの浅い窪みが検出された。窪み部で弥生時代後期の土器4個体ほどが一括して出土したほか、細片が多数出土しており、全般に、遺跡東側に広がる低地部に面した遺跡端の様相が看取された。また、調査区の東端は深さ2m以上、幅17m以上を測る河道跡に切られていた。その形成時期については、肩部で弥生時代後期の土器少量、飛鳥時代初めの須恵器1点が出土したのみで、内側の粗砂層や腐植物層には遺物は含まれず決定には至らなかった。

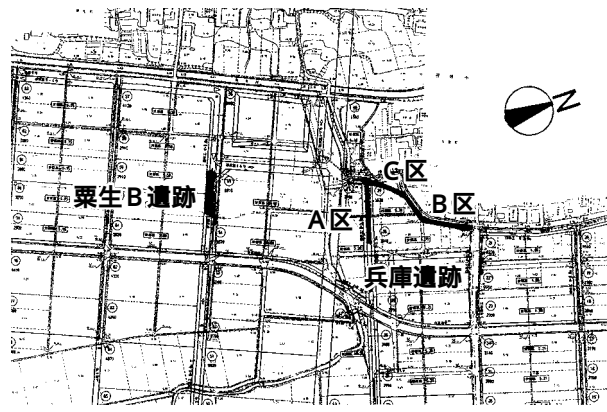
なお、遺跡と砂丘裾間を流れる長者川は、往時、氾濫を繰り返しそのたびに沿岸は4～5日間湛水状態にあったという。本来は西方の砂丘裾部にかけて広がっていたことも推測されるが、河川により削平されたためかこの間に遺跡は確認されていない。（澤辺）



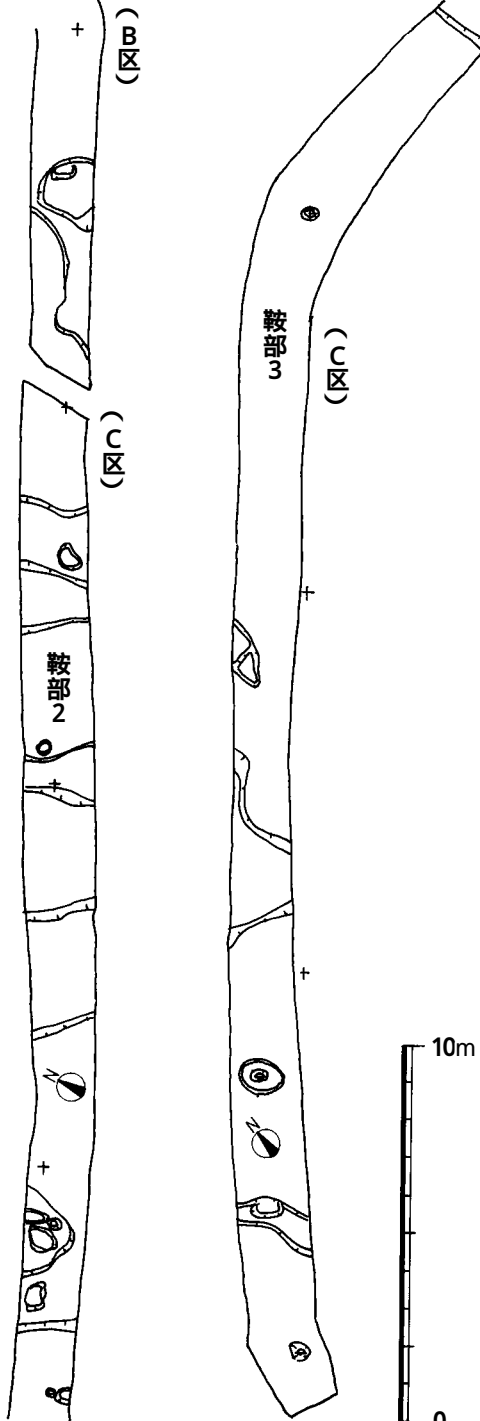
(A区)



(B区)



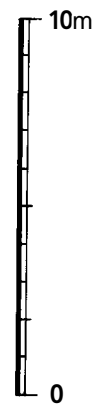
調査区位置図 (S = 1 / 4,000)



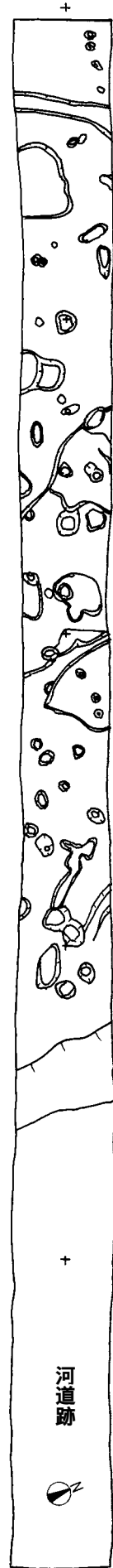
(B区)

(C区)

(C区)



兵庫遺跡調査区全体図 (S = 1 / 200)



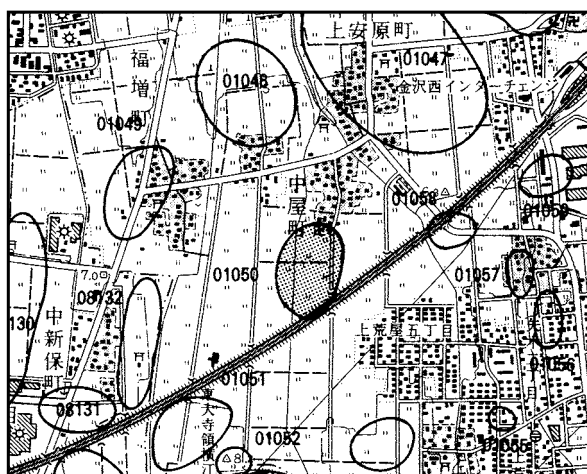
河道跡

栗生B遺跡調査区全体図

## 中屋遺跡

所在地 金沢市中屋町地内  
調査面積 140m<sup>2</sup>

調査期間 平成13年4月25日～平成13年6月14日  
調査担当 澤辺利明 荒木麻理子



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

本遺跡は手取扇状地北部を流れる犀川の一支流、安原川を北東に望むなだらかな台地上に立地する。昭和27年以降、4次の調査が行われ、東西約80m、南北約100mの範囲にわたる遺跡の広がり確認されており、その出土土器は中屋式土器として北陸の縄文時代晩期中葉の標準資料となっている。以前は河川に挟まれ起伏に富んだ場所であったと推測されるが、広く平坦化し耕地化された一帯の現標高は5.5m前後。晩期の生活面は地表下20～30cmで確認される。

今後の発掘調査は県営ほ場整備事業を契機とするもので、調査区域は、北側のA区と、西側、

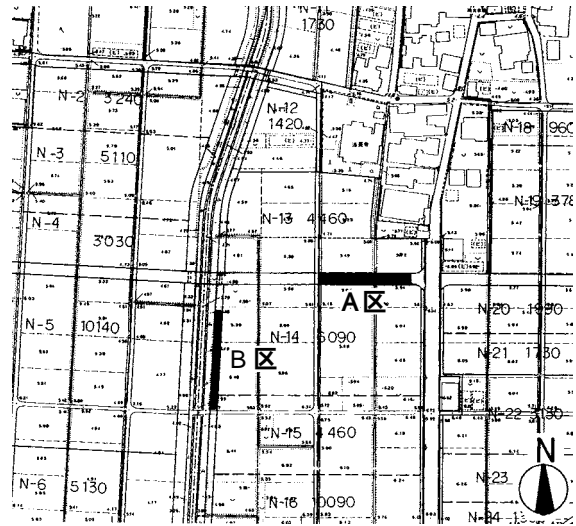
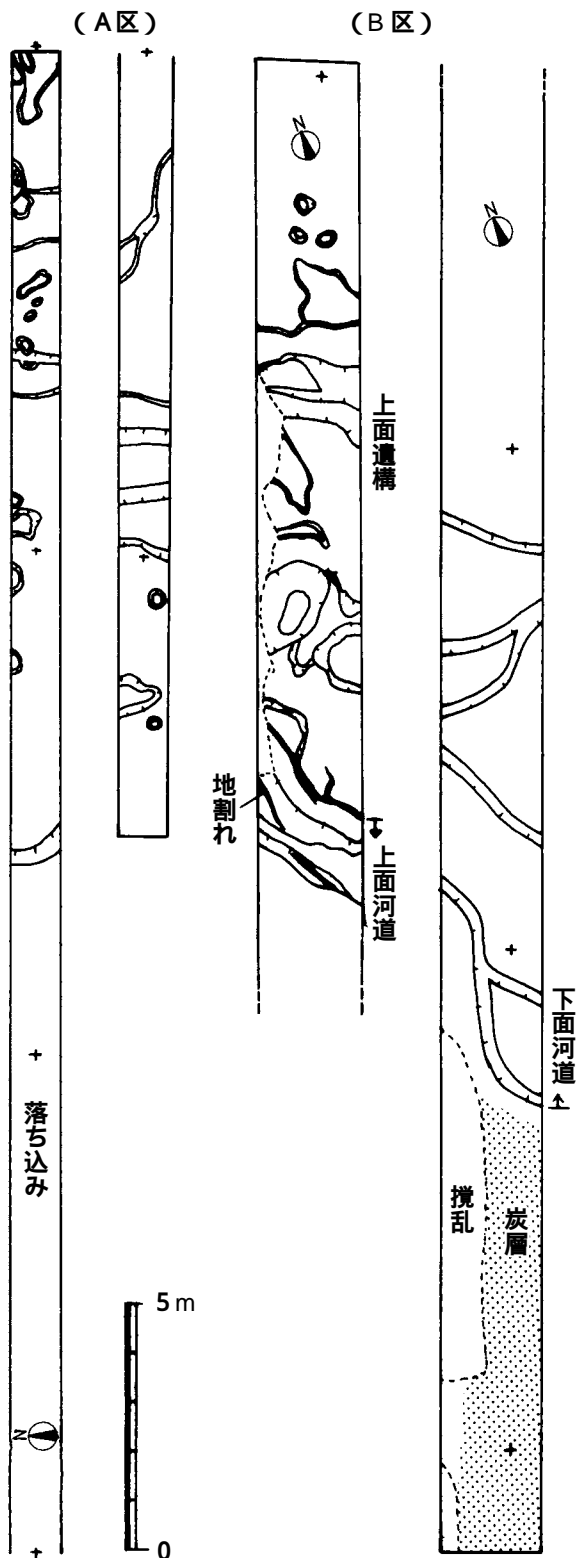
中屋川の堤防に接したB区に分けられる。

A区では、西端で縄文土器、打製石斧3点を含むピットが、東半で浅い窪み多数が、また中程では、幅約18m、深さ約1.5mの落ち込みが検出された。落ち込みからは中位より天目茶碗が出土したほかは、縄文土器細片が数点出土したのみである。狭小な調査区ではその性格は決定し難いが、底部辺には粗砂が堆積し、この粗砂上には、厚さ数ミリの緑色植物質層の堆積が確認されている。この上位の覆土は褐色粘質土と灰緑色粘質土が混在するものであり、さらに、現地表下70cm～80cmで湧水が始まる現況からみて、水の滞留した窪地的な状況を示すものと考えたい。

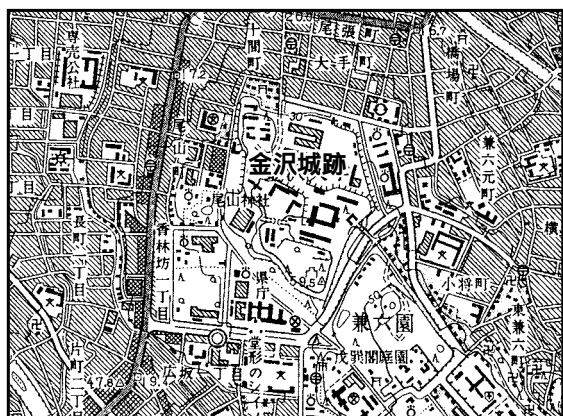
B区では、南端から約9mの範囲で一面にわたって薄い炭層が検出された。炭層上下で中屋式期の土器を伴い当期に形成されたとみられるが、木質や被熱部は認められず、草葉のみが炭化した状況がうかがわれたことから、草原が埋没していく課程で形成されたものではないかと考えている。中程では調査区を横断もしくは斜行する河道跡が検出された。深さ約1.3m、幅は20m以上。数点の弥生式土器、須恵器片も含むが、中屋式期の土器、石器が、河道底部の褐色粘質土層やその下位の砂層から多量に出土している。ただ、河道内の遺物包含層は南端から30mほどで急に密度を減じ、これより北では腐植物層となっていた。

B区北端から南へ約18mの範囲では、この河道上に約80cmの厚さで堆積した黄白色シルトをベースとする生活面(上面)が認められた。ピット数個と先の河道より幅を狭めた河道跡を主とし、下位の河道と同時期の遺物が、河道肩部～斜面を中心に多量に出土した。炭粒や微細な骨片も混じり、当初埋葬施設の存在を予想したが、調査区内では特に遺構は認められず、河道に向け土器等を投棄した状況が推測されようか。なお、この面では、第2次調査で指摘された断層面(『金沢市中屋遺跡』金沢市文化財紀要28金沢市教育委員会1981)と同様の、幅1～3cmの地割れ跡様のものを確認しており、興味深い点である。

数えて第5次目にあたる今次調査では、集落に直接関わる施設等は確認されなかったものの、集落様相の一端が知られたこと及び上下に識別して当該期の資料が得られたことは大きな成果といえよう。(澤辺)



## 金沢城跡



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

所在地 金沢市丸の内地内  
調査期間 平成13年4月23日～7月19日  
調査面積 2,500㎡  
調査担当 冨田和気夫 湊屋玲美 土田友信

平成13年度は、二ノ丸数寄屋屋敷等数力所で小規模な発掘調査や確認調査を実施した。いずれも金沢城址公園整備事業に伴う事前調査である。以下、代表的な3地点について調査概要を紹介する。

### 二ノ丸数寄屋屋敷 (地図 1)

数寄屋屋敷は二ノ丸西部の一画で、二ノ丸主要部の御殿空間とは石垣で画された一段低い平坦面である。絵図によると、18世紀以降は御殿拡張に伴って部屋方のエリアとして利用されているが、それ以前は「数寄屋屋敷」の名の如く、御殿併設の数寄空間であったと考えられる。

調査は数寄屋屋敷南東の風呂屋口門・南端の数寄屋門・北端の旅団司令部入口門周辺で実施した。

風呂屋口門は数寄屋敷と二ノ丸主要部を直結するルートにあたり、両者を画する切石積石垣の上半部を分断して幅3.03mの石段通路が現存している。石段は、石垣面に取り付く下部8段、石垣天端から2.3m下に設けられた長さ1.8mの踊り場、そこから二ノ丸面に登る上部11段の計19段で構成されている。石材は赤戸室石で、各段は枕木状の切石2～4石からなり、蹴上や踏面の寸法は各段ごとにばらついていた。調査では、石段上に残存していたモルタル舗装を除去して現況図を作成すると共に、一部を発掘して石段の構築時期と構造を検討した。

その結果、最上段の石段に伴う整地土中には黒釉薬瓦が混入すること、最下段に伴う整地土からも近代以降の遺物が出土することが判明し、さらに下部石段の内部には、石垣に沿って貫通する石組溝が併設されていることが明らかとなった。この石組溝は、石垣沿いに4本の石製支柱をかませて石段の部材を支え、トンネル状の石組を構成していることから、石段と一体施工であることが確実である。用材には緑灰色凝灰岩が含まれ、覆土には煉瓦やガラス板の破片を混入していた。加えて、下部石段の石材小口面には城内の切石石垣とは異なる加工痕が見られること、近世後期の絵図と石段の段数や踊り場の規模等が一致しないこと等も判明した。

これらにより、現存する風呂屋口門石段は、近代以降に修築された可能性が高いと考えられる。既存の石段を一旦取り外し、段数を加増し傾斜を緩やかにして再構築したものであろう。その時期は、明治14年の部屋方建物焼失後、または旅団司令部建物の建設時と想定され、敷地内の整地と石組側溝の敷設、石段の改修等が一連の工事として施工されたと考えている。

なお、関連史料調査の結果、寛文期の絵図には二ノ丸境の石垣に沿って堀が描かれていること、堀は元禄以降の部屋方拡張に伴い次第に埋め立てられ、宝暦頃までに完全に埋没すること、当初の風呂屋口門は現在地より約5.7m北方に位置し、石段下部も木橋であったと見られること、文化5年大火後の「居間先土蔵」改修時に現在地へ移設されたこと等が判明したので付記しておく。

この他、数寄屋門周辺でも小規模な調査を実施し、近現代を含む4面の路面と、それらに伴う足がかり石や根固石等の構造物が、部分的に攪乱を受けながらも残存していることを確認した。このうち、

「居間先土蔵」下石垣北西隅付近では、延長約2.7mに渡って通路を横断する石組溝を検出した。内幅約36cm、深さ約25cmを測る比較的小形の石組溝で、側壁には柱状戸室石を使用する。部分的な断割の結果、溝の深さは約25cm程度で底石を伴わないこと、溝の下層にそれ以前の遺構が存在すること等を確認している。石組溝の時期を確定する事は難しいが、江戸期の絵図に該当する表現が認められないことから、近代に下る可能性を含めて検討する必要がある。

また、司令部入口門の南側では、園地整備に伴う表土すき取り工事で一部が露出した石組遺構について詳細調査を行い、T字形に交差した2本の石組溝を確認した。いずれも小形の河原石を立て並べた幅15cm、深さ10cm前後の小規模な溝で、東西溝は延長約3.6mが残存し、南北溝は約1mまで延長を確認した。両者は底石の有無や石材の大きさに多少の差はあるが、同時に機能していた一連の遺構であり、その規模形状から、建物に伴う雨落ち溝の可能性が考えられる。所属時期は、東西溝の掘方内から黒釉薬瓦片とレンガ片が出土したことから、近代以降であろう。一方、石組溝に伴う整地土を部分的に掘り下げたところ、約30cm下層から敷石状に配置した約20×30cmの河原石2点を検出した。これらは江戸後期の整地面に伴う遺構の一部となる可能性が高い。 (冨田)

#### 尾坂門(地図 2)

尾坂の坂道南東部と尾坂門南側付近で小規模な確認調査を実施した。坂道南東調査区では、南北にのびる側溝跡を検出した。側溝は後世の路面改修等によって破損し溝底付近を残すのみであったが、黄褐色凝灰岩切石の平積み側壁と戸室切石の底石で構成された、幅約60cm程度の石組側溝であった。近世後期の絵図に見られる尾坂東縁の側溝に対応すると見られ、当該期における尾坂路面の範囲と高さを復元する上で基礎的な情報を得ることができた。尾坂門南側では、軍隊後期の所産と考えられる戸室切石列を確認した。門ないし塀の基礎に関わる遺構となる可能性がある。これまでの調査により、尾坂門周辺は、江戸期の地盤が軍隊前期の路面改修により一旦削平された後、軍隊後期に石積暗渠の埋設を伴う再整備で嵩上げされ、現在に近い姿に整地されたものと考えられる。

#### 橋爪門枳形(地図 3)

当調査区は橋爪門続櫓東側に位置する。寛永8(1631)年の大火後に、橋爪門枳形の一角に取り込まれた地点である。近代以降の改変により、橋爪門枳形に関連する遺構は削平されていたが、枳形形成以前に遡る遺構・整地土を確認した。これらは、平成9年度の内堀調査や平成12年度の鶴ノ丸第2次調査で確認されている16世紀～近世前期の遺構・整地土と時期的に対応するものと考えられる。今回確認した金沢御堂期の遺構は、掘立柱建物柱穴1基とピット2基、近世の遺構はピット1基と整地土に限られ、出土遺物もごく僅かではあったが、橋爪門周辺の下層遺構群の一部として、過年度の調査成果とも比較検討できる資料を得ることができた。 (湊屋)



風呂屋口門全景



尾坂東縁の石組側溝



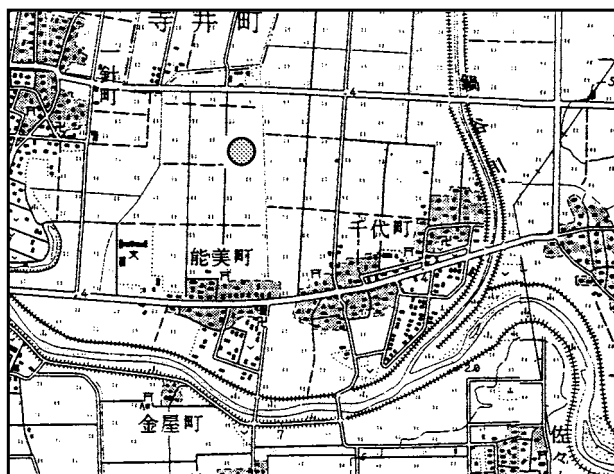
## 千代・能美遺跡

所在地 小松市能美町地内

調査面積 2,000m<sup>2</sup>

調査期間 平成13年6月8日～平成13年10月15日

調査担当 岩瀬由美 林 大智 岡田有紀子



遺跡位置図 ( S = 1 / 25,000 )

千代・能美遺跡は、小松市街地の東側に広がる沖積平野に位置し、遺跡の南側を流れる梯川と、その支流である鍋谷川によって形成された自然堤防状の微高地に立地している。

発掘調査は一般国道8号(小松バイパス)改築工事に伴うもので、平成12(2000)年度には古墳時代前期(4世紀前半頃)の首長居館と考えられる遺構群を確認した。

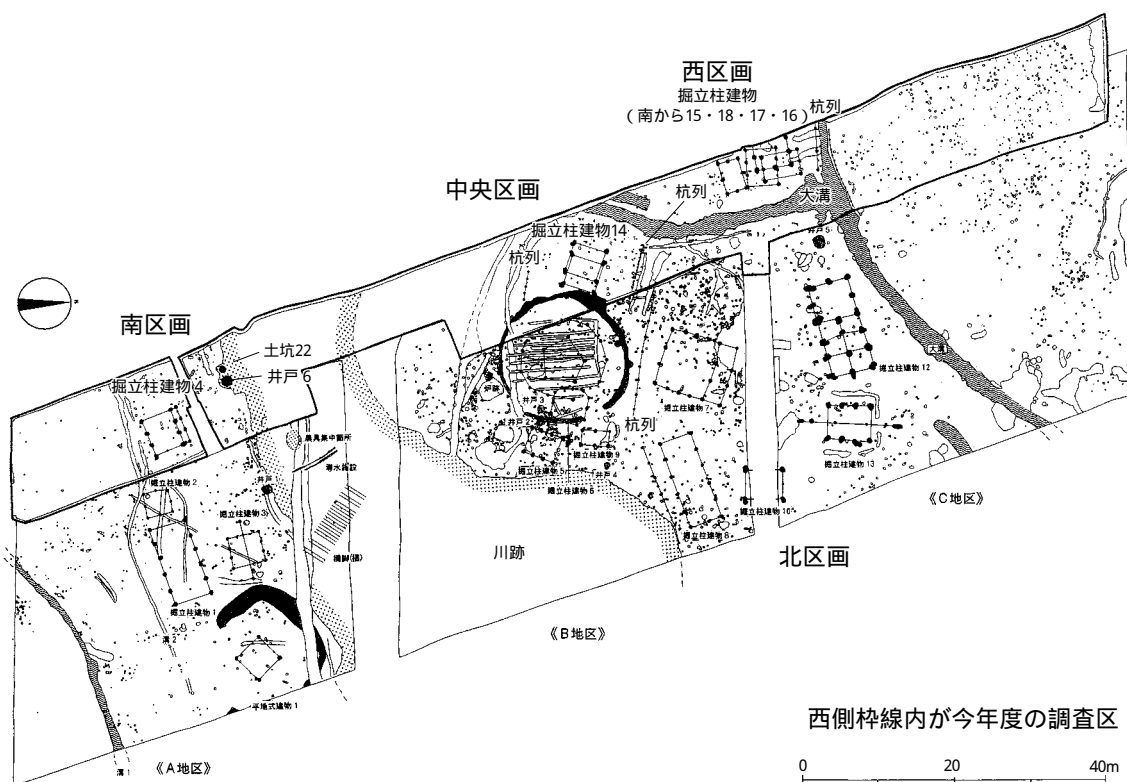
平成13(2001)年度は平成12年度調査区の西側部分(2,000m<sup>2</sup>)の調査を実施し、その結果、大溝、掘立柱建物跡7棟以上、井戸1基、土坑2基、杭列などの遺構を検出した。

以下で各遺構の概要を述べる。なお、居館内は川跡や杭列などによって4つの区画(南区画・中央区画・北区画・西区画)区分されており、説明はこの区画に従って行うこととする。

南区画からは、掘立柱建物跡1棟以上、井戸1基、土坑2基などを検出した。

掘立柱建物4は、梁行1間(4m)×桁行3間(4.9m)を測り、北側に庇をもつ。建物の南側には、建物域を区画する機能をもつと考えられる溝が2条認められる。

井戸6は川跡の南側肩部に設置され、径1.4m、深さ1.4mを測る。この井戸は隣接する土坑22と溝



遺構概略図 ( S = 1 / 1,000 )

西側枠線内が今年度の調査区

0 20 40m

で連結していることから、両者は同時期に機能し、互いに密接な関わりをもっていたことを伺える。両遺構の覆土及び上面には、井戸廃棄の祭祀で用いられたと思われる多量の土器が認められ、特に土坑22では完形の壺などが出土した。これらの土器は、昨年度調査で出土した土器と比較して、新しい時期のものが主体を占めており、南区画で行われた祭祀が継続的であったことを推測できる。

中央区画からは、掘立柱建物跡2棟、杭列、大溝、溝などを検出した。

掘立柱建物14は、梁行1間×桁行1間の建物2棟が重複しており、各々が建て替えを行っている。この建物の南北両側には杭列が認められ、北側の杭列は北区画との境界、南側の杭列は中央区画内の建物域南端を示すものと考えられる。

昨年度の調査で、居館域をとり囲むと考えられた大溝は、今年度の調査によって屈曲部を確認し、大溝掘削当時の居館域西端がおおよそ明らかになった。しかしその後、大溝を西側に向かって更に掘削することにより、新たな区画を設けている。新たに掘削された大溝の内外には、柵列と考えられる杭列が確認され、周囲との隔絶性がより強固になったことを伺える。

大溝の西側で新たに確認できた区画（西区画）からは、掘立柱建物跡4棟などを検出した。

掘立柱建物跡はいずれも比較的小規模で、位置を若干ずらしながら重複して設営されている。

居館内を流れる川跡内からは、昨年度と同様に多数の木製品が出土した。特筆すべものとしては、盾があげられる。盾は紐列によって矩形文様が施されており、表面には黒漆が塗布されている。

2年次にわたる調査により、北陸地域で類例の乏しかった古墳時代前期の首長居館について、多くの情報を得ることが出来た。今後の遺物整理を通して、より詳細な検討を行っていきたい。（林）



土坑22土器出土状況



西区画の掘立柱建物（南西から）



大溝土器出土状況（南西から）



大溝外側の杭列（北東から）

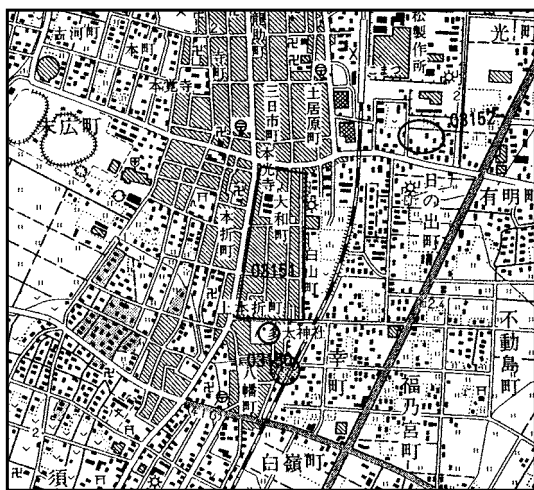
## 幸町遺跡

所在地 小松市八幡町地内

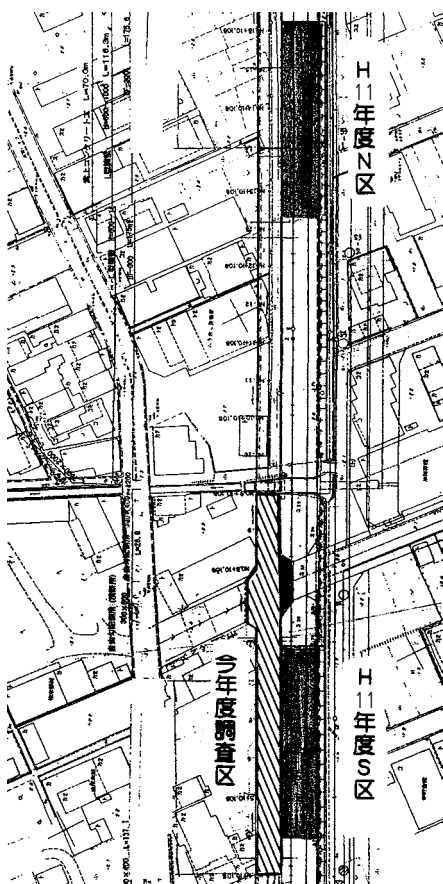
調査面積 700m<sup>2</sup>

調査期間 平成13年月日～同年8月7日

調査担当 松浦郁乃 宮川彩子



遺跡位置図 ( S = 1 / 25,000 )



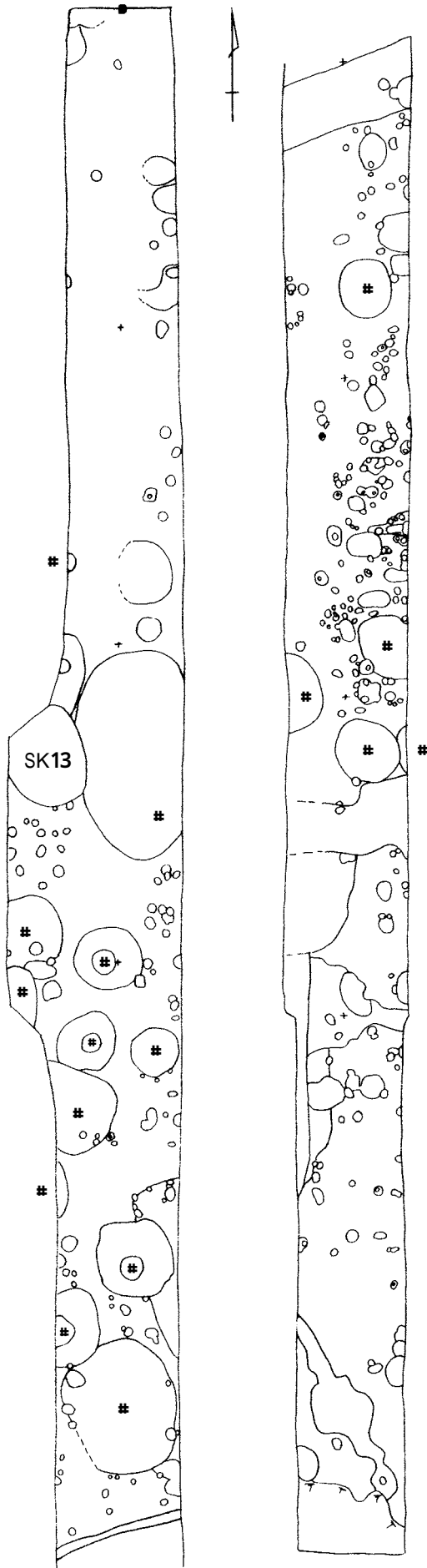
調査区位置図 ( S = 1 / 2,000 )

幸町遺跡は、小松駅から約1km南の地点に所在し、上本折町、八幡町、幸町の3町にかけて遺跡は広がりを持つと予想されている。本年度は、北陸本線小松駅付近連続立体交差事業に伴うもので、八幡町地内のみでの調査を行った。平成11年度にも同遺跡の調査が当センターによって行われている。平成11年度のS区とされた調査区からは、大量の鉄滓や鞆羽口片が出土したことから、周辺での鍛冶関連施設の存在が確認された。本調査区はS区と並行するように設定されており、同様の性格の遺構、遺物が検出されることが調査当初から予想されていた。結果、調査区を縦貫するように旧鉄道線路の側溝が走っていたために、一部攪乱

はうけるものの、廃滓土坑、井戸跡などが検出された。鍛冶に関するものとして、廃滓土坑1基(SK13)があげられ、その規模は、直径約3m、深さ約0.7mのもので、すり鉢状の底面には鉄分が厚く沈着していた。土坑内からは大量の鉄滓と、大型の鞆羽口や砥石などの石製品、陶磁器類が出土した。鉄滓は椀形滓がほとんどで、総重量にして約400kgであった。また、鋳型などの遺物は確認できず、鋳造は行われていなかったものと見られる。他の遺構で同様の性格を持つと思われるものは確認されなかったが、井戸やピットの埋土からも鉄滓の出土が多くみられ、周辺に広く分布した状況が窺える。

次に、最も多く検出されたのは井戸跡であった。地山が砂質であるために崩れやすく、また、湧水のために全掘出来たものは少なかったが、井戸側が確認できたもので7基、井戸側は存在していなかったが、検出状況からそれと想定されるものを含めると17基が確認された。井戸側の遺存していたものは、1基が縦板組横棧どめで、横棧が1段遺存しており、水溜として曲物が使用されているものであった。時期は出土遺物から15世紀後半頃には埋戻されていたと見られる。その他の井戸は全て結桶を使用したもので、16～17世紀前半代のものであった。その他に、柱穴とみられるピットは多数検出したものの、建物として柱列を把握することは出来なかった。しかし周辺で検出した遺構との関係からも、鍛冶に関連する作業場などの建物が存在していたと考えられる。出土遺物には陶磁器類や、行火・石臼といった石製品などの日常生活用品も多く見られた。このことから、居住域としても本遺跡の性格を捉えていく必要がある。

(松浦)



調査区全体図 ( S = 1 / 400 )



調査区風景



廃滓土坑 ( SK13 ) 出土状況

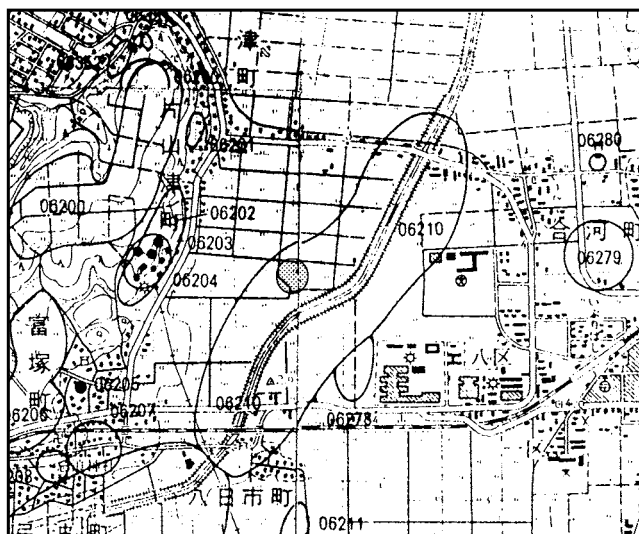


縦板組横棧どめ井戸

## 猫橋遺跡

所在地 加賀市片山津町地内  
調査面積 2,000m<sup>2</sup>

調査期間 平成13年5月28日～8月31日  
調査担当 久田正弘 大西 顕 谷内明央



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

猫橋遺跡は八日市川沿いの微高地上に立地する弥生時代を中心とした集落遺跡であり、弥生後期前半猫橋式の標識遺跡である。昭和38年の河川改修工事以降調査が5回行われており、今回は一般農道整備事業(加賀中央区)に係る発掘調査である。以下に各調査区の概要を述べていく。

北調査区 建物の周溝と思われるSD25を検出した。後期前半の土器がまとまって出土している。区画溝と思われるSD29を検出した。時期は後期前半である。上部は緩やかに立ち上がり、下部は垂直に掘り込まれる。中世の河跡を検出した。大量の木製品が出土し

ている。大半は加工部材であるが、胡桃などの種子も数点確認できた。

南調査区 竪穴住居を検出した。径約7mで円形を呈し、竪穴内部から中期中葉の土器、竪穴上面から後期前半の土器が出土している。深さは検出面より約30cm下であった。竪穴内部で検出した遺構は土坑2基、ピット8基である。支柱穴は多角形配置と考えられ、建替えが想定される。P67から2段の礎板が出土している。建物の周溝と思われるSD06を検出した。時期は後期前半であり、遺物は少ない。竪穴住居の東部で検出した溝群も建物の周溝と考えられる。遺構や包含層から管玉作りに伴う緑色凝灰岩の剥片が多く出土し、管玉生産が活発に行われていたことが窺える。

道路状遺構を検出した。SD23の上にはほぼ重なるようにして最大径約80cmのピットが東西に並ぶ。ピット列は西端がSD03に接し、長さは約12mを測る。ピット列の時期を特定できる遺物は出土していないが、覆土の色調が他の遺構と異なることから弥生時代より新しい遺構と考えられる。道路状遺構と思われる溝を2条検出した。SD03は方形周溝墓の北を南東方向に走り、竪穴住居の西端を沿うようにして南下する。SD23は方形周溝墓の北を東方向に走り、竪穴住居の東端を北から切り込む。

調査区南端の約300m<sup>2</sup>は検出面での遺構確認が困難であった。そのため掘り上げ後全面的に約20cm掘り下げ、遺構検出を再度行った結果、中期の方形周溝墓を検出した。SD10の東側から供献用と思われる小型甕を立てて並べたような状態で出土し、西側上面から大量の土器が出土している。SD16上面からは蛤刃の磨製石斧が出土した。SK07は墓の主体部と考えられる。遺物は確認できなかったが、近辺から管玉が出土している。SK06の底面からは合口の壺が出土し、土器棺と思われる。

西調査区 SD30を検出した。後期前半の土器がまとまって出土している。円形に巡り、溝内側のピットから礎板が出土していることから建物の周溝の可能性が高い。

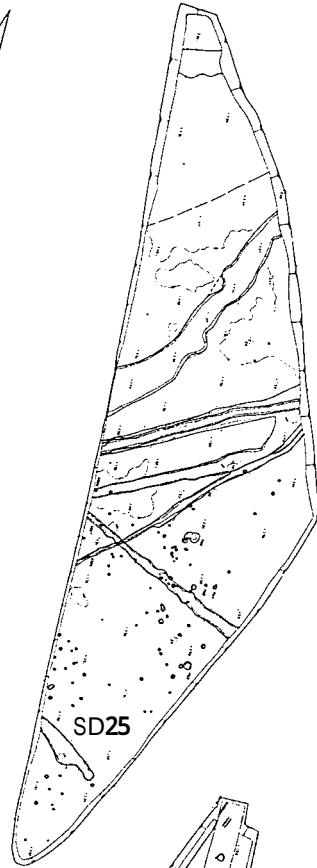
まとめ 主に弥生中期中葉～後期前半の時期幅が確認できた。中期の居住域や墓域が調査区外側の南方面に展開され、後期には居住域が中期より拡大し、調査区や東西方向に展開されていたことが想定される。中期の方形周溝墓は県内でも例が少なく、今回の調査の重要な成果の1つである。(谷内)



北調査区 完掘状況（南から）



西調査区 完掘状況（南から）



北調査区

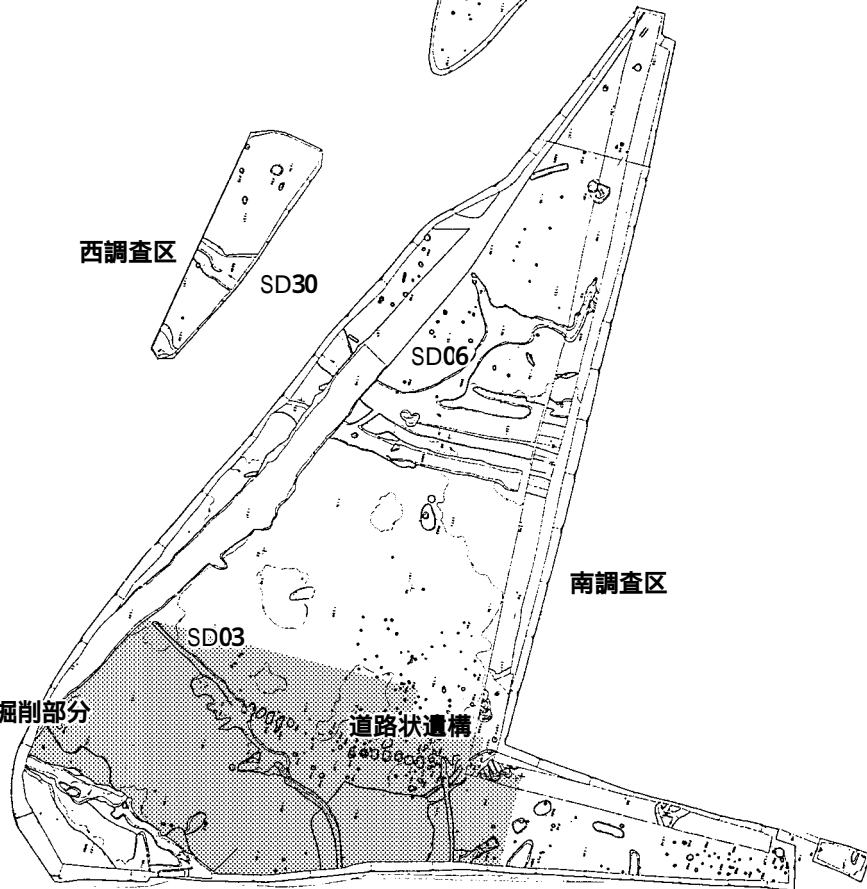
SD29

SD25



西調査区

SD30



南調査区

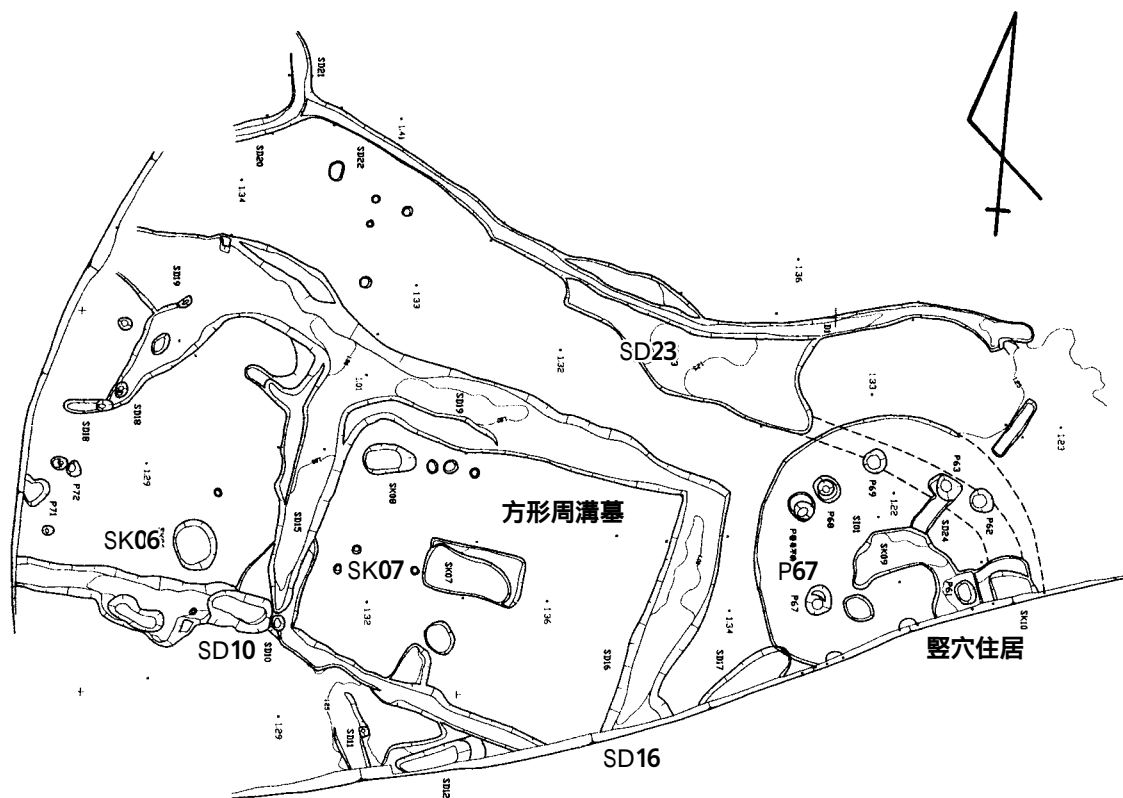
SD03

SD06

下層掘削部分

道路状遺構

調査区全体図 ( S = 1 / 500 )



下層平面図 ( S = 1 / 200 )



方形周溝墓 (西から)



SD25土器出土状況（西から）



竪穴住居（北から）



P67礎板出土状況（東から）



SD06完掘状況（南から）



道路状遺構（東から）



SD10土器出土状況（北から）



SD10土器出土状況（西から）



SK06土器出土状況（西から）



## 平成13(2001)年度上半期の遺物整理作業

### 企画部整理課

1班 松任市橋爪B遺跡(2000年度調査)、小松市八幡遺跡(1992~94年度調査)、金沢市梅田B遺跡(1996年度調査)の整理を行った。橋爪B遺跡は、古代と中世が主体で、2週間という短い期間に、記名から遺構図トレースまで一連の作業を行った。八幡遺跡は、江戸時代末期19世紀頃の瓦や、染付の実測・トレースを行った。梅田B遺跡は、前年度積み残し分の土器トレースと、新たに弥生から古墳時代の、木製品・石製品・金属製品の実測・トレースを行った。(正木直子)

2班 山岸古墳群(ヤマントン)(2000年度調査)は、古墳出土の土器や刀子・直刀等金属製品の整理を行った。片山津玉造遺跡(2000年度調査)では、少ない遺物量だったが、管玉、玉未製品の整理を行った。次ぎに直下遺跡(ソソリ)(1999年度調査)で土器・木製品、珍しいものでは、土師器製の獣脚の実測も行った。上半期最後にてがけたのは、四柳白山下遺跡(1995年度調査)の整理で、縄文土器、土師器、須恵器、石製品、製塩土器と様々な種類の遺物に遭遇した。(池田くみ子)

3班 加賀市弓波遺跡(1999年度調査)、加賀市柴山出村遺跡(1997~1999年度調査)・柴山貝塚(1999・2000年度調査)そして、金沢市金沢城跡鶴ノ丸1次(1999年度調査)の記名・分類・接合及び実測・トレース、五十間長屋(1998年度調査)の記名・分類・接合・実測作業を行った。鶴ノ丸1次では、近世の陶磁器、灯明皿、火鉢や大量の瓦の他、辰巳用水管も出土しており、木樋に何重にも粘質土を巻き付け水漏れを防ぐなどの当時の高度な加工技術に触れることができた。(明田奈々)

4班 一針B・C遺跡(2000年度調査)、豊穂遺跡(1999・2000年度調査)の整理作業と戸水B遺跡(1997・1998年度調査)の記名・分類・接合を行いました。一針B・C遺跡からは青銅器を製作の土製鋳型が、豊穂遺跡からは墨書や墨痕の残った須恵器が出土していて、それぞれに特徴のある遺跡でした。分類作業になると小片を目を凝らして捜さねばならず、大変でした。戸水B遺跡の接合を始めた時は文様や調整痕が見事に残った大きな破片に、班員全員心が踊りました。(北康子)

5班 昨年度に引き続き、河北郡宇ノ気町指江B遺跡(1998・1999年度調査)の出土品整理を行った。作業は土器の記名・分類・接合及び石製品・木製品・金属製品の実測・トレースを行った。遺物は古墳時代後期と奈良・平安時代の物が多く出土しており、中でも河道からは、膨大な須恵器・土師器がの出土があり、特殊器種の出土が目立っていた。また、白玉、ガラス玉といった多量の玉類も出土していた。以上の事から祭祀色の強い遺跡である事を窺い知ることができた。(加藤博美)

6班 今年度前半は、3つの遺跡の整理に携わった。先ず田鶴浜町三引遺跡(1998・1999年度調査)の縄文土器を始め骨角器・球状耳飾・垂飾等の実測・トレースを行った。次に金沢市畝田・寺中遺跡(1999年度調査)の木製品の実測・トレースを行った。最後に、鹿西町徳丸遺跡(1999・2000年度調査)の記名・分類・接合を行った。2000年度分では、大量の縄文土器(中期後半)が見られた。複雑な文様のパターンが読めず、接合に苦労しつつも興味深い遺跡だった。(北香織)

7班 松任市橋爪ガンノアナ遺跡(1999年度調査)にはじまり、小松市大長野A遺跡(1999年度調査)、続いて江沼郡山中町九谷A遺跡(1996~99年度調査)まで3遺跡についての出土遺物の整理作業を行った。橋爪ガンノアナ遺跡では中世の土師器皿・椀・須恵器が中心で、緑釉・灰釉陶器も多く含んでいた。大長野A遺跡は弥生・中世の遺物が主体。九谷A遺跡は中・近世にあたり、特に陶磁器については日用品から窯道具、中国産の皿や茶道具まで様々なものが見られた。(海野美香子)

8班 畝田・無量寺遺跡(1999・2000年度調査)、99年度分は、木製品・石製品実測・トレース、00年度分は、記名・分類・接合と土器・木製品実測・トレース、遺構図トレース。無量寺C遺跡(1999

年度調査)は土器・木製品・金属製品の実測・トレース、遺構図トレース。畝田C遺跡(1999・2000年度調査)、畝田B遺跡(1999・2000年度調査)は記名・分類・接合、土器・木製品・石製品の実測・トレース、遺構図トレース。畝田・寺中遺跡(1999年度調査)は須恵器実測中です。(松田智恵子)

洗浄班 前年度は10人体制で洗浄をしたが、今年度上半期は職員2人だけで行った。そんな中7月12日、男子中学生6名の職場体験が行われた。土器の洗浄、収蔵庫でのパンケースの移動、洗浄後のかたづけ、猛暑の中での泥捨て作業など、汗をかきながらも頑張ってくれた。私たちの方も畝田・寺中遺跡、畝田ナベタ遺跡、四柳ミッコ遺跡、小松城跡、鷯島遺跡、四柳ミッコ遺跡(2001年度)金丸宮地遺跡、箱総数270箱を洗浄した。下半期は人数も増えて忙しくなる予定だ。(末富しげ子)

復元班 4回目の春を迎えたセンターで、約十数遺跡をジグソーパズルの様に連日作業している。縄文土器が出てくる徳丸遺跡、「火鉢」「大甕」等、出土した九谷A遺跡、「把手付甑」が目立った畝田・寺中遺跡等。それぞれ色々な表情のある土器も修復している。四柳白山下遺跡出土の「横瓶」の須恵器に、黒部スイカ(ラグビーボールの形に似たもの)を脳裏に浮かべながら、この暑い夏に作業していく日々である。(小間博文)

平成13年度上半期の出土品整理作業

班	遺跡名	担当者	4月	5月	6月	7月	8月	9月
1班	八幡遺跡	浜 崎	_____					
	加茂遺跡	沢 辺					_____	
	梅田B遺跡	柿 田				_____		
	橋爪新B遺跡	大 西	_____					
2班	山岸古墳群	大 西	_____					
	四柳白山下遺跡	川畑・白田		_____				
	片山津玉造遺跡	岩 瀬	-					
	直下遺跡	松浦・菅野	_____					
3班	弓波遺跡	立 原	_____					
	金沢城跡	熊谷・湯川・湊屋				_____		
	柴山出村遺跡他	安・立原		_____				
4班	一針B遺跡他	久田・荒木					_____	
	戸水B遺跡	岩 瀬						_____
	豊穂遺跡	岩瀬・松浦					_____	
5班	指江遺跡他	大 西	_____					
	近岡遺跡他	菅野・安						_____
6班	畝田・寺中遺跡他	和田・西田					_____	
	三引遺跡他	金山・湊屋			_____			
	徳丸遺跡	安中・加藤			_____			_____
7班	九谷A遺跡	垣 内				_____		
	大長野A遺跡	立 原		_____				
	畝田・寺中遺跡他	浜 崎						_____
	橋爪ガンアナ遺跡	西 田	_____					
8班	畝田・寺中遺跡他	和田・西田						
班外	永町遺跡	湯尻・田村						



徳丸遺跡の分類・接合



近岡遺跡建築部材実測風景

# 畝田ナベタ遺跡出土の帯金具について

熊谷 葉月 小嶋 芳孝

金沢西部第二土地区画整理事業に係る畝田ナベタ遺跡の発掘調査は平成11年度より行われている。今年度の調査では、9世紀中ごろの建物に付属する溝から、文様を浮き彫りにした帯金具が出土した。本文では、この資料に関して、現段階での調査状況を報告する。(巻頭カラー写真1 参照)

## 遺跡の概要

畝田ナベタ遺跡は金沢市北部の沖積平野に位置し、約1km北には、古代から外港であったとされる金沢港が日本海に臨む。古代における当遺跡は、8世紀後半から10世紀まで存続するが、9世紀前半に遺構と遺物が集中する傾向が見られ、この時期に最も繁栄していたものと考えられる。現在、建替えを含めて60棟以上の掘立柱建物跡、20基以上の井戸跡などが確認されているが、大半がこの時期に属している。調査区西端を南北に貫流する河川跡は水上交通にも利用されたものと思われ、墨書を含む多量の土器、付札木簡、獣骨・斎串などの祭祀遺物などが出土している。

文献：「金沢西部第2土地区画整理事業に係る発掘調査」『石川県埋蔵文化財情報 第6号』 2001

## 出土状況

帯金具は、幅約50cm、深さ約20cm、南北方向に軸をとる浅い溝(SD444)の上層から出土した。この溝の西側には同じ方向軸をもつ梁行2間×桁行3間の掘立柱建物跡が検出されている。溝はこの建物に付属した可能性が考えられる。共伴する土器は、遺跡のピークと同じく、9世紀前半に属するものである。

この地区は、南北方向に軸を持つ建物が数棟、50mにわたり軒を連ねる状況が検出されたエリアである。建物は建替えが2、3回行われているようであるが、前半から中頃を中心とする9世紀代に収まるものと考えられる。この遺跡の中でも重要な地点のひとつであり、帯金具出土の溝を伴う建物は、このエリアの南端にあたる。

## 1 帯金具の概要

帯金具の形状(第1図)

方形で垂孔をもつ「巡方」で、縦18mm、横19mm、厚さ2mm、重さ2.3gである。左右上下隅が欠損し、とくに右端は全体に削られたような損傷が見られるものの、ほぼ原形をとどめている。実測図断面に示した通り、板状を呈している。裏面の縁も少し腐食しているために断定しかねるが、箱状ではないものと考えられる。裏面には、革帯に装着するための鋳の痕跡が四隅に存在し、鋳痕の周囲にも革帯の漆が付着した痕跡が残る。革帯をはさむ座金は残っていなかった。

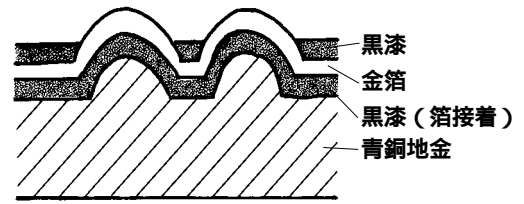
製作技法

鑄造により、文様が浮き彫りにされた青銅の地金に黒漆を接着剤として金箔を貼っている。(第2図) 箔を文様に圧着させたあと、窪み部分に黒漆をのせ、文様が箔の金色で浮きたつような効果が工



第1図 帯金具実測図(原寸)

夫されているものと思われる。ルーペなどの拡大鏡による肉眼観察でも製作の際の痕跡をいくつか観察することができ、細かい凹凸に箔を圧着させるため、箔の上から押しあてた工具痕や箔のしわが見られた。箔がはがれた箇所からは、金箔の上と金箔と地金の間の漆の2層が確認できた。また文様面の地金が露出している上下の縁どり部分では、細かい刻みや粒状の傷が見られる。箔を接着するための漆がのりやすくするためである可能性が考えられる。



第2図 断面模式図

#### 文様

文様は側面から見た花文を中央に配し、周囲に唐草文を展開させている。限られた小さな空間に配置するため、デフォルメされたものと思われるが、中国・唐代に流行し、日本でも奈良・平安時代を中心とした美術品や寺院の装飾に多く採り入れられた、宝相華唐草文に類するものと考えられる。数種の美術史事典などを調べた結果、宝相華は想像上の花、あるいは様々な花を組み合わせて象徴的に創造された文様であり、現存するものに特定できないとあった。この資料の花文は一見、三葉文やパルメット文を連想させ、左右対称の形状のようであるが、よく観察すると右側の花卉が左側の上に重なっている。また、垂孔の幅の中心より、花文の中心が若干左側にずれていることがわかる。唐草文の巻き方向は左右対称であるが、トレースを反転して重ねてみるとやはり若干のズレが見られる。

また、想定復元図は、唐草文の欠損部分を補うために左右対称なものとして復元したので、幅が実寸よりも若干小さくなっている。(第3図)

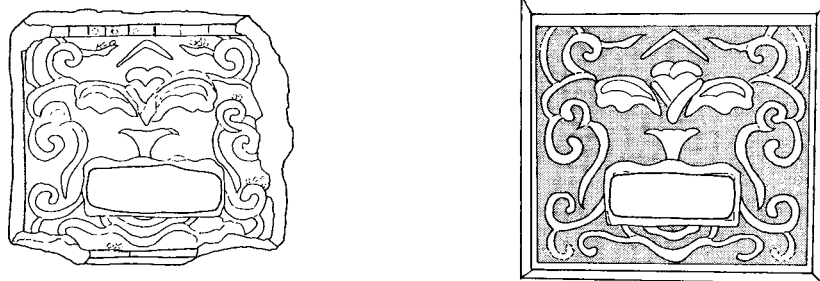
#### 地金の自然科学分析

奈良文化財研究所に資料を持ち込み、蛍光X線分析を行った結果、地金は銅と錫の合金であることがわかった。銅の軟性を高め、細工をしやすくするための物質として、当時の日本製の青銅製品に多く含まれている砒素やアンチモンがほとんど含まれておらず、かわりに錫が多く含有されていることから、国内製ではない可能性が高いというコメントを頂いた。

金箔の成分分析の結果は金と微量の銀の合金であった。

漆、金箔、地金とも破壊を伴う分析は行っておらず、成分比率、産出地などは未解明である。

(熊谷葉月)



第3図 帯金具実測図(2倍)と想定復元図(網かけは黒漆部分)

## 2 帯金具の系譜について

畝田ナベタ遺跡で出土した帯金具を最初に見た時は、文様が女真の金具に多い生命樹と似ている印象を持った。しかし、クリーニングが進んで文様が鮮明になると共に、花文の左右に唐草文を配した文様であることが明らかになった。この種の文様を持つ帯金具を手元の資料で調べたところ、唐代の金帯や銀帯には類似した文様をもつ帯金具が出土していないことが判ってきた。一方で、中国の内モン自治区や吉林省、ロシア沿海地方の8～9世紀代の遺跡から、花文の左右に唐草文を配した模様をもつ帯金具の出土していることが判った。

検討の結果、畝田ナベタ遺跡の帯金具と共通の文様を北中国やロシア沿海地方の渤海から遼代の帯金具に見ることができ、また、日本製帯金具には少量しか含まれない錫成分が多く含まれていることなどから、畝田ナベタ遺跡の帯金具は中国北部で製作された可能性が高いと判断して記者発表に臨んだ。本稿は、記者発表に備えて検討した資料と、その後に入手できた新たな資料を交えて、現段階での問題点を整理するものである。

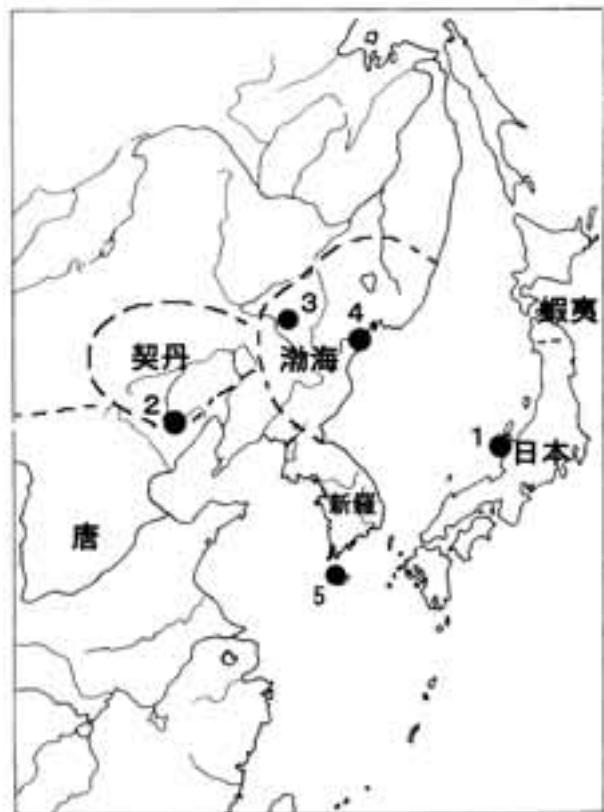
### (1) 資料の検討

**製作技術** 畝田ナベタ遺跡出土帯金具は、銅地金に漆で金箔を張り、文様の窪みに黒漆を置いている。このような技法で製作された帯金具は、現時点で日本はもとより中国、韓国、北朝鮮、ロシアで類例を検出することはできなかった。

**成分** 帯金具が畝田ナベタ遺跡から出土して、当センターの保存処理室で蛍光X線分析により定性分析をおこなった。その結果、地金の成分に銅と錫が含まれていることが判り、青銅であることが明らかになった。その後、奈良文化財研究所にお願いした非破壊定性分析の結果でも、銅と錫の合金というデータが出ている。8・9世紀の国産青銅器は錫の含有量が低く、錫の代用にアンチモンやヒ素などを使用していたことが最近の研究で判明している。畝田ナベタ遺跡の帯金具はアンチモンが含まれず錫の含有量が高いことから、外国産の帯金具である可能性が高いとの判断に達した。

**文様** 畝田ナベタ遺跡出土帯金具の文様は、中央花文の両脇に唐草文を置いている。

国産の帯金具は無文を原則としており、花文や唐草文をもつ事例は未検出である。このような構成の文様は、中国東北地方とロシア沿海地方、韓国済州島で類例がある。



第4図 帯金具の出土遺跡と9世紀の北東アジア

- |           |                |
|-----------|----------------|
| 1 畝田ナベタ遺跡 | 2 李家営子遺跡・沙子沟遼墓 |
| 3 査里巴遺跡   | 4 クラスノキ土城      |
| 5 龍潭洞遺跡   |                |

査里巴遺跡（中国吉林省永吉県）

第二松花江右岸の微高地にある遺跡で、42基の土槨木槨墓と3基の石室墓が調査されている。M19号墓から鍍金した帯金具が出土しており、その表面に花文と唐草文が置かれている。埋葬施設は木槨土槨墓で、小型の黒色壺（第5左図8）が共伴している。査里巴遺跡では7世紀後半から9世紀にかけて墓地が造営されており、M19の所属年代は出土した土器をもとに8世紀後半から9世紀初頭と考えている。

文献：吉林省文物考古研究所「吉林省査里巴靺鞨墓地」『文物』1995年9期

李家営子遺跡（中国内蒙古自治区敖漢旗）

1975年、水路工事中に二箇所で金器を含む多量の遺物が出土。人骨が出土しており、二箇所の墓地遺構と推定されている。また、石材が出土していないことから、埋葬施設は土槨墓の可能性が高いと報告されている。

1号墓からは銀壺2点、銀盤、銀杯、銀勺が各1点など、銀製品を主体として出土している。2号墓からは、金帯飾99点、銅金属1点、小銀環1点、瑪瑙玉2点、鍍金銅盤1点などが出土している。報告では、多量の帯金具から代表的な資料を選んで一枚の写真に撮って掲載されているだけで、全体の様子をうかがうことはできない。写真には、鉸具3点・飾金具8点・鉈尾2点が掲載されており、このうち飾金具と鉈尾に花文と唐草文を組み合わせた文様がある。写真を主とした簡単な報告のため詳細を知ることはできないが、金帯飾という記載から金製品と思われる。報告では、1号墓から出土した銀壺の形状が何家村遺跡（中国陝西省西安市）出土例と類似していることを根拠に、李家営子遺跡の年代を9世紀代に推定している。

文献：敖漢旗博物館「敖漢旗李家営子出土の金銀器」『考古』1978年2期

沙子溝遼墓（中国内蒙古自治区敖漢旗）

沙子溝1号墓から、鍍金した帯金具が出土している。埋葬施設は磚積みの横穴式墓室で、多量の帯金具と馬具、銅鏡、土器が出土している。帯金具は鍍金した物が多く、第6図に掲載した帯金具11には唐草文が置かれている。11は3.6×3.2cmの小型巡方で、幅3.2cmの布を挟んでいる。表面は鍍金され、上板と下板の両面に方形透かしと花文の左右に唐草文がある。この帯金具は、小型品であることと上下の板表面に文様があることから、主帯から垂下する下げ帯の末端につけられた金具の可能性はある。

副葬品に白磁の玉縁碗や輪花皿があり、碗の体部下半が露胎であることや輪高台などから日本の編年観ではこれらの白磁を11世紀前半に比定でき、埋葬の時期を考える手懸りとなる。

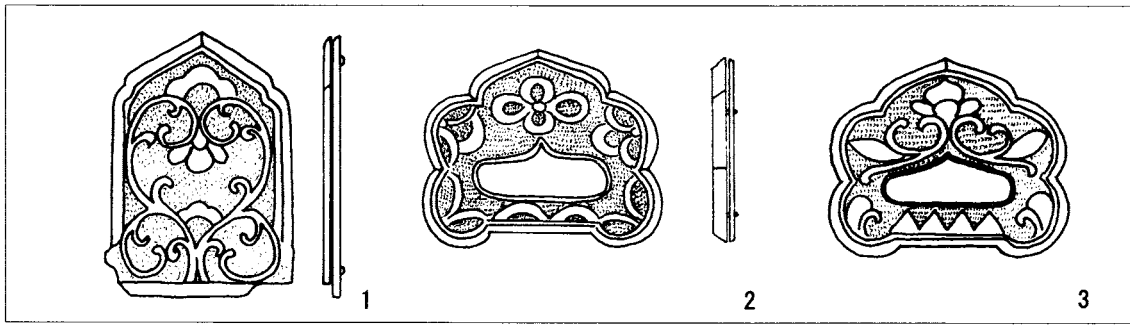
文献：敖漢旗文物管理所「内蒙古敖漢旗沙子溝、大横溝遼墓」『考古』1987年10期

クラスキノ土城（ロシア沿海地方ハサン区クラスキノ村）

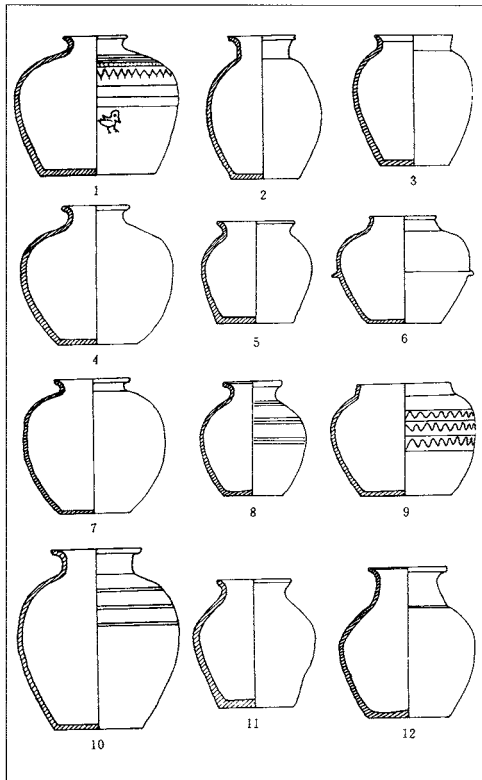
中朝国境を流れる図們江から約20Km東にある。エクスペディツイン湾の奥に広がる低湿地に造営されており、一辺が約300mの略四辺形に城壁がめぐっている。この遺跡の上層から、花文と唐草文を伴う丸柄と鉈尾が各一点出土している。クラスキノ土城の上層は9世紀から10世紀初頭に比定されており、この帯金具は10世紀初頭前後の可能性はある。本資料は未公表であるが、ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所のボルディン氏ほかの配慮により、実際に観察することができた。文献：V.I. ボルディン「クラスキンスコイエ土城をめぐる発掘調査史」『「日本道」関連渤海遺跡の考古学的調査』青山学院大学文学部史学科田村晃一研究室2001年

龍潭洞遺跡（韓国済州市）

遺跡は済州島の北海岸中央部にある済州市の海岸段丘上に位置する。発掘調査では明瞭な遺構が検

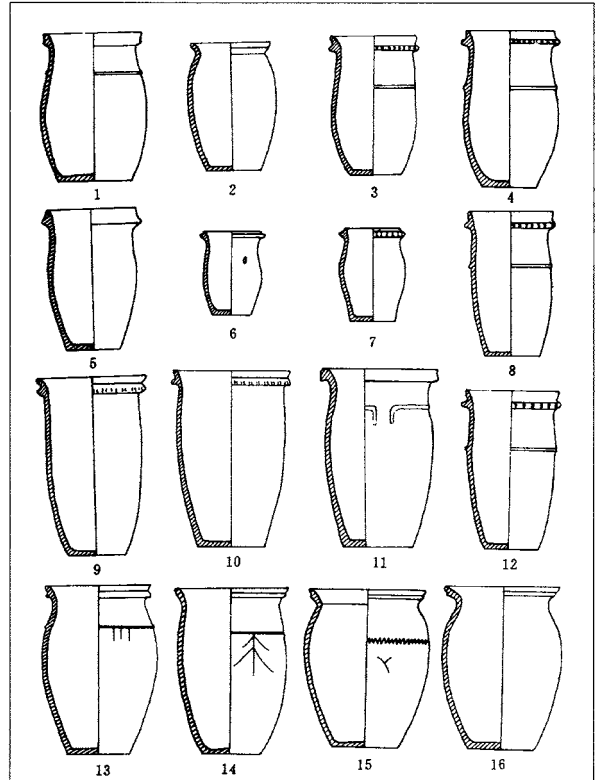


带金具 (M19)



▲ 图一八 陶鼓腹罐、壶

1. 4. I型鼓腹罐 (M10:1, M23:1) 2. II型鼓腹罐 (M3:1) 3. V型鼓腹罐 (M5:3)  
 5. 11. VI型鼓腹罐 (M11:1, M45:2)  
 6. I型壶 (M5:1) 7. 10. I型鼓腹罐 (M3:15, M10:2) 8. IV型鼓腹罐 (M19:1) 9. VII型鼓腹罐 (M9:1) 12. I型壶 (M13:1) (均为1/8)



▲ 图二〇 陶筒形罐

1. I型 (M3:14) 2. I型 (M3:2) 3. 4. 13. V型 (M31:2, 3, 采:5) 5. IV型 (M36:6) 6. 7. VII型 (采:6, M28:1) 8~10. 12. V型 (M13:9, M11:2, M14:13, M23:1) 11. II型 (采:4) 14~16. VII型 (采:11, M14:1, M24:1) (6, 7为1/8, 余均为1/6)

第5图 查李巴遗址



2号墓出土鍍金帯金具（金帯飾99点、銀鐏1点、小銀環1点、瑪瑙玉2点、鍍金銅盤1点など）



銀壺



銀壺



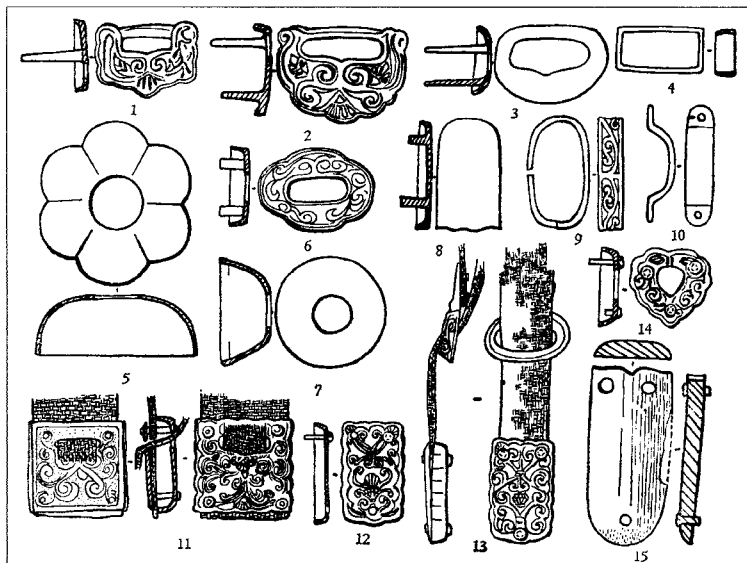
鍍金銀盤



銀杯

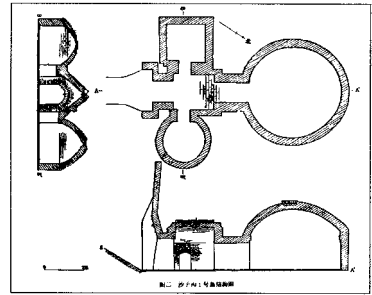
1号墓出土金銀器（銀壺2点、銀盤、銀杯、銀勺各1点）



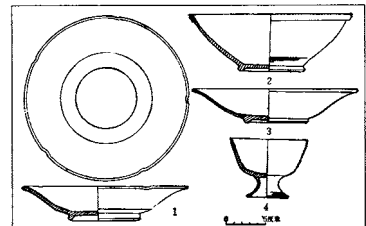


图一四 沙 M1 出土的鍍金銅、銀帶飾和骨飾  
 1. 五边形銅帶飾(沙 M1:235) 2. 扁桃形帶飾(沙 M1:293) 3. 素面銅帶飾(沙 M1:244) 4. 长方套环(沙 M1:264) 5. 銅玲草(沙 M1:294) 6. 四瓣花形扁孔飾(沙 M1:251) 7. 玲形飾(沙 M1:263) 8. 素面圭形飾(沙 M1:253) 9. 卷草紋套环(沙 M1:271) 10. 桥状飾(沙 M1:261) 11-14. 卷草紋銀帶飾(沙 M1:272, 267, 277, 278) 15. 骨飾(沙 M1:282) (約 1/2)

帶金具

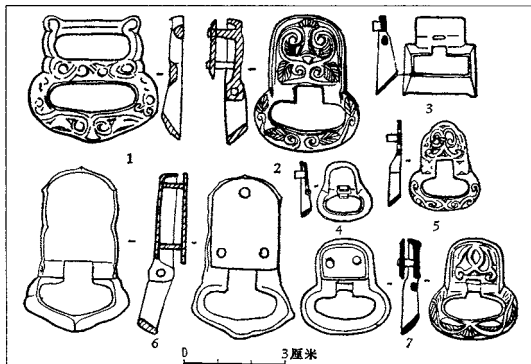


墓室



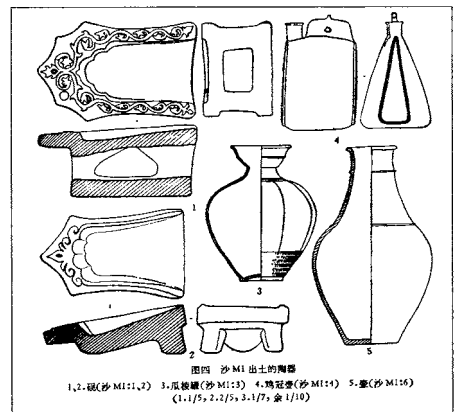
图五 沙 M1 出土的瓷器  
 1, 3. 盘(沙 M1:7, 8) 2. 碗(沙 M1:14)  
 4. 高足杯(沙 M1:15)

白磁



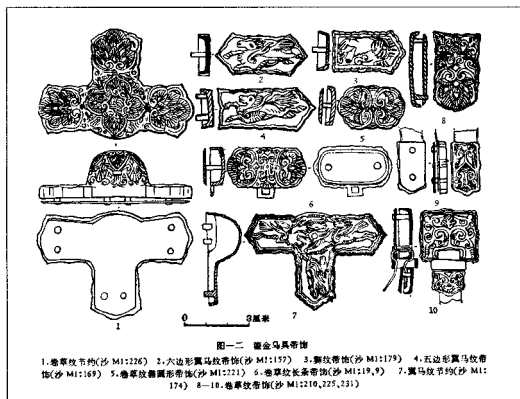
图一 沙 M1 出土的鍍金銅帶扣  
 1. 椭圆形帶扣(沙 M1:143) 2, 5, 7. 卷草紋帶扣(沙 M1:150, 144, 151) 3. 方形帶扣(沙 M1:153)  
 4. 小帶扣(沙 M1:156) 6. 扁桃形帶扣(沙 M1:152)

鍍金銅帶扣



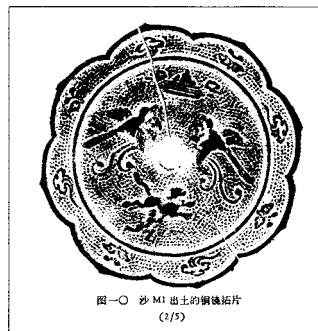
图四 沙 M1 出土的陶器  
 1, 2. 碗(沙 M1:1, 2) 3. 瓜棱罐(沙 M1:3) 4. 鸭冠尊(沙 M1:4) 5. 壺(沙 M1:5)  
 (1, 1/5, 2, 2/5, 3, 1/7, 金 1/10)

風字硯七土器



图一三 鍍金馬具帶飾  
 1. 卷草紋帶飾(沙 M1:226) 2. 六边形翼馬鞍帶飾(沙 M1:197) 3. 翼狀帶飾(沙 M1:193) 4. 五边形翼馬鞍帶飾(沙 M1:169) 5. 卷草紋翼馬鞍帶飾(沙 M1:212) 6. 卷草紋翼馬鞍帶飾(沙 M1:19, 8) 7. 翼馬鞍帶飾(沙 M1:174) 8-10. 卷草紋帶飾(沙 M1:220, 225, 231)

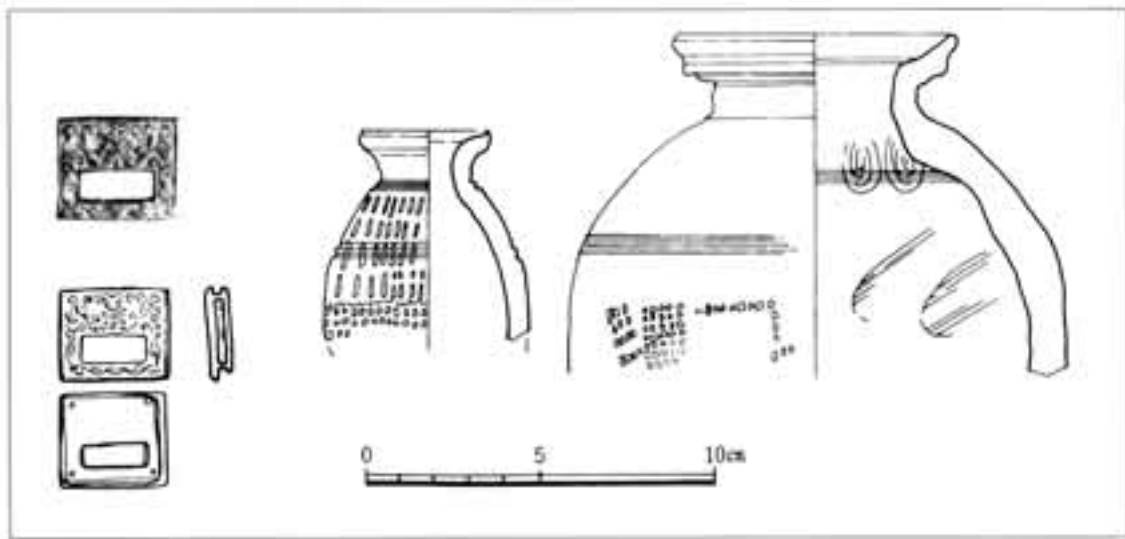
馬具



图一〇 沙 M1 出土的銅鏡拓片  
 (2/5)

鏡

第 6 图 敖漢旗沙子沟遼墓



第7図 龍漂洞遺跡出土の帯金具と土器

出されず、多量の土器と鉄鏃、釘などの鉄器、ガラス玉、佐波理製匙等と共に金銅製帯金具、鉄製帯金具が出土している。報告書に掲載されている写真と実測図によると、金銅製帯金具は2.8×3.4cmの大きさで、表面には花文と唐草文が配されている。この帯金具の座金にも方形透し穴が空いている。宋基豪ソウル大学校教授からは、この資料がアマルガム法により鍍金されており、漆による金箔張りではないとのご教示を得ている。この遺跡は、9世紀頃（統一新羅）の祭祀遺跡と報告されている。本資料の存在は、韓国国立全州博物館の金在弘氏のご教示により知ることができた。

文献：済州大学校博物館調査報告『済州市龍潭洞遺蹟』済州大学校博物館・済州市1993年

## （2）帯金具の製作地について

成分 先に日本列島古代の錫について考古資料や文献資料をもとに検討したが、8・9世紀代の畿内では錫が希少金属でアンチモンやヒ素を代用金属として使用していたことが明らかになった。畝田ナベタ遺跡から出土した帯金具の地金成分に錫が多く含まれ、アンチモンが含まれていないことは、これまでの検討結果を基に考えると国外で製作された可能性が高いと考えられる。

文様 花文の左右に唐草文を配した文様を持つ帯金具は、西安など中原では類例を見いだすことができなかった。一方、内蒙古自治区や吉林省では8世紀代の墳墓から類似した文様の帯金具が出土している。また、ロシア沿海地方南部のクラスキノ土城からも9～10世紀初頭と思われる同系譜の文様を持つ帯金具が出土している。この文様を持つ帯金具の類例が増加するのは、10～12世紀の遼代である。

以上の傾向から、畝田ナベタ遺跡と共通する文様を持つ帯金具は8世紀代の渤海ないし契丹で製作が始まり、926年に渤海が滅亡した後には遼で盛行したようである。済州島龍潭洞遺跡の帯金具は、以上に検討した帯金具の分布地域から離れた存在であり、今後検討を要する資料である。ちなみに、統一新羅の帯金具で文様を持つ資料は龍潭洞遺跡が管見に入った唯一の事例である。宋基豪氏の教示によると、高麗にはいると文様を持つ帯金具が増加するようである。

畝田ナベタ遺跡の帯金具と共通する文様が、内蒙古敖漢旗（契丹・遼の領域）や吉林省永吉県（渤海の領域）で8世紀代に出土していることから、この種の文様を持つ帯金具の製作に契丹もしくは渤海がかかわっていたものと思われる。

帯金具の変遷 7～9世紀の北東アジアでは、日本・新羅・渤海など唐の周辺諸国が律令に代表される唐の諸制度を導入して体制の整備を図っていた。帯金具も律令に基づく身分表示具として周辺諸国が導入しており、日本でも位階に従って大きさや金メッキなど装飾の有無が規定されていた。同様の制度は新羅や渤海でも行われていたと推定でき、基本的には唐とおなじように、官僚は無文で貴族や王族は金銀を素材とした帯金具を身分表示具として装着していた。ちなみに、渤海の遣唐使が王族の場合は、唐の皇帝から位階と共に金銀の帯金具が贈られている。

日本では帯金具の出土例が9世前半頃から減少し、10世紀には素材が石帯へ変化している。中国における帯金具から石帯への変化は、おそらく晩唐から五代にかけてはじまり、遼代に事例が増加して金代に盛行している。日本の石帯も、北東アジア諸国の身分表示具の変化に伴って使用が始まったものと思われる。いずれにしても、唐の周辺地域では8世紀末から9世紀前半には身分表示具としての帯金具の規範が曖昧になり、吉林省查里巴遺跡や内蒙古自治区李家营子遺跡の事例に見るように渤海や契丹では有文鍍金の帯金具が貴族・王族層に限らず使用されるようになったものと思われる。おそらく、地方の部族長やその一族など、地域の有力集団がこの種の鍍金帯金具を装着しはじめたのではないだろうか。10世紀初頭には鍍金を伴わない有文帯金具がクラスキノ土城などで出土しており、この頃には文様が身分表示の要素ではなくなっていたようである。畝田ナベタ遺跡の帯金具は9世紀前半から中頃の土器と共伴しており、渤海や契丹が独自様式の帯金具を製作していた時期の資料となる可能性が高い。

### (3) 今後の課題

花文の両側に唐草文を持つ帯金具の分布から、畝田ナベタ遺跡の帯金具が契丹と渤海を含む中国東北地方で製作された可能性が高いことを論じてきた。しかし、これまでの検討では漆使用の技術系譜については、まったく触れることができなかった。これまで調べた範囲では、銅地金に漆で金箔を貼り文様の窪みに装飾的に黒漆を配した帯金具の類例は見つけることができなかった。渤海の出土品で漆を使った資料は、吉林省永吉県大海猛遺跡出土の帯金具の表面に漆状の付着物があったのを見たくらいで、確実に漆を使用した事例は未確認である。また、契丹や遼における漆の使用例については資料の検討を進めているが、現在のところ未確認である。畝田ナベタ遺跡の帯金具が契丹または渤海で製作されたとする場合、なぜ鍍金ではなく漆で金箔を貼ったのか、また、黒漆を装飾的に用いた技術系譜をどう考えるのかなど、疑問点が山積している。畝田ナベタ遺跡の帯金具の製作技法とその起源を解明するには、中国東北地方だけでなく8～9世紀における北東アジア全域で、漆を金箔で貼り、その上をさらに黒漆で装飾した金属器の事例を集成して検討を進める必要があると考えている。

776(宝亀7)年に越前国加賀郡に渡来した史都蒙を大使とする渤海使節は、朝廷から「黄金小一百両、水銀大一百両、金漆一缶、漆一缶、海石榴油一缶、水精念珠四貫、檳榔樹扇十枚」を贈られている(『続日本紀』)。来日した渤海使節は、絹織物などの繊維製品を得て帰るのが一般的だったが、史都蒙の場合は工芸材料を持ち帰っている。これらの工芸材料は、渤海の宮廷工房で使用されたものと思われる。この記録から、渤海では工芸品の制作のために、漆など自国で産出しない材料を周辺国家や民族との交易で入手していたことが推測できる。

畝田ナベタ遺跡の性格については、発掘した建物群を時期別や主軸別に整理して、建物群の変遷を明らかにする中で考察する必要があるが、これらの作業が未整理の現段階で見通しを述べるのは難しいが、今年度に検出した東西棟を含む大型建物群が集中している地区が遺跡の中核と思われる。これまで遺跡の性格については、平安時代の港湾跡と推定されている戸水C遺跡に近く、多数の建物が計

画的に配置されていることなどから、加賀国府または加賀郡家が管理する物資集散地の可能性がある  
と説明してきた。

契丹や渤海を含む中国東北部で製作された可能性が高い帯金具の出土は、畝田ナベタ遺跡の性格を  
巡る議論に外国使節との応接場所という視点が必要なことを物語っている。畝田ナベタ遺跡は加賀国  
加賀郡に含まれており、この地域は渤海使節が来着する場所だった。渤海は日本へ34回の使節を派遣  
しており、そのうち来着地が判明しているのは29例ある。その内訳は、出羽6回、北陸12回（佐渡1  
回、能登3回、加賀4回、越前3回、若狭1回）、山陰9回（但馬1回、伯耆2回、隠岐3回、出雲  
3回）、長門1回、対馬1回である。859（天安3）年に能登国珠洲郡へ来着した烏孝慎が加賀に安置  
されており、北陸では加賀が主要な来着・安置場所だったことが窺われる。加賀に来着した渤海使節  
は、「便処」に安置されている。「便処」については、外国使節の滞在に供するため郡家関連施設など  
を臨時に便宜的に使用した施設と考えてきた。しかし、『大漢和辞典』などを参照すると休憩場所と  
して「便殿」などの施設名が挙げられており、「便処」にも使節が休憩する場所という意味が付随し  
ていた可能性がある。これまでは、「便処」の便という字義から臨時施設という印象を持っていたが、  
郡家や国府の関連施設などの公的施設に外国使節を安置する「便殿」と理解すべきではないのだろう  
か。畝田ナベタ遺跡の性格については、「便処」の可能性も含めて検討を進める必要がある。

畝田ナベタ遺跡の帯金具は一辺が2 cm に満たない小さな資料だが、その背景には9世紀頃から唐  
を頂点とする国際秩序が崩壊しつつあるなかで自立性を強めつつあった契丹と渤海や、律令体制が終  
焉を迎えつつあった日本など東アジア諸国の歴史が広がっている。冒頭にも述べたように、この小文  
は畝田ナベタ遺跡で出土した帯金具に関する現段階での問題点を整理したものである。これから、報  
告書の作成に向けてさらに検討を進めて行かねばならないが、本文がきっかけとなって多くの先学や  
機関からご教示やご叱正をいただければ幸いである。末尾ではあるが、畝田ナベタ遺跡の帯金具の成  
分分析や検討について独立行政法人奈良文化財研究所のご協力とご指導を得たほか、下記の先生から  
多くのご教示を得たことにたいし心から感謝の意を表して本稿を終わりたい。 （小嶋芳孝）

亀田修一（岡山理科大学） 菅谷文則（滋賀県立大学） 蘇哲（金城大学） 西谷正（九州大学） 金在弘（韓国国立全  
州博物館） 宋基豪（ソウル大学校） 王培新（吉林大学） 蓋立新（黒龍江省文化庁） 谷飛（中国社会科学院考古研  
究所） ボルディン、イヴリエフ、ニキーチン（ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所）



遺跡周辺遠景（北から）



畝田ナベタ遺跡全景（南から）

# グラスコフカ 1 遺跡出土の錫製品について

(ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所)

ユーリ G. ニキーチン

((財)石川県埋蔵文化財センター)

中山 由美 小嶋 芳孝

2002年1月3～9日にかけて、ロシア連邦ウラジオストク市にあるロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所(以下、研究所と略す)を訪ねた。今回の訪問でニキーチン氏が調査した沿海地方ラゾー地区グラスコフカ村にあるグラスコフカ 1 遺跡で錫製品と思われる資料があるのを見つけ、蛍光 X 線分析をおこなったところ、予想どおり錫製品という結果が出た。北日本の7～8世紀の墳墓で出土する環状錫製品が、ロシア沿海地方からの交易品ではないかという仮説を立てているが、グラスコフカ 1 遺跡の錫製品はこの問題を解明する手がかりとなるものである。(小嶋芳孝)

## 1 グラスコフカ 1 遺跡の調査について

グラスコフカ 1 遺跡は、沿海地方ラゾー地区グラスコフカ村で魚介類研究施設の建設工事に伴って1990年10月に実施した考古学的調査で発見した。遺跡はグラスコフカ湾南西にある古代の砂州上に立地しており、現在の海岸線からは約60m 離れている。砂州の北端は今回の工事による破壊が激しく、西側の端は干上がった沼地で区切られている。工事で破壊された砂州の場所から、非ロクロ調整やロクロ調整の土器片を少量採集している。遺跡が残っている部分には、完全に残っていた墓坑が二基と部分的に破壊された墓坑が二基あった。これらの墓坑には、海砂利を積んだ痕跡が残っていた。積石の痕跡は、表土を除去したときに石が密集して出土しているにすぎないものであった。以下は土層の概要である。

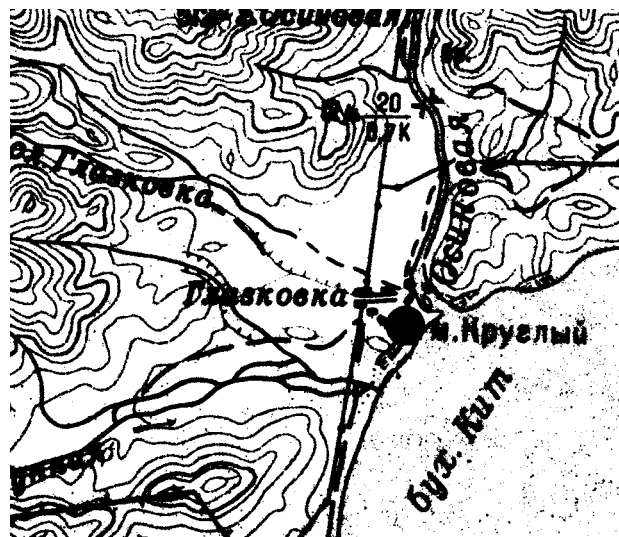


Fig. 1 グラスコフカ 1 遺跡の位置 ( 印、20万分 1 )  
(map of the Glazkovka-1 site)

- 1層：12～16cm 暗茶色砂質土で、有機物と新しいゴミを多数含む
- 2層：18～22cm 海砂利を多数含む茶色砂層
- 3層：1～3cm 薄い暗茶色の砂層で旧表土
- 4層：斑鉄がまだらにある黄色の自然砂層

地表から20～25cm の深さまで茶色砂層を除去したところで、墓坑の覆土を検出した。

(1) 1号墓 長方形の掘り形を持ち、長軸を東西方向(方位角87度)にもっている。墓坑の底部は2.2×1.2m、検出面の規模は3.4×2.1m、深さは25～30cmである。墓坑内を調査しているときに、木槨を構成する焼けた多数の木片が墓底の縁に沿って集中しているのを検出した。それらの中には、木槨を固定するための小さな鉄製錠が残っていた。墓坑の南西隅では、腐った木材片を含んだ暗灰色

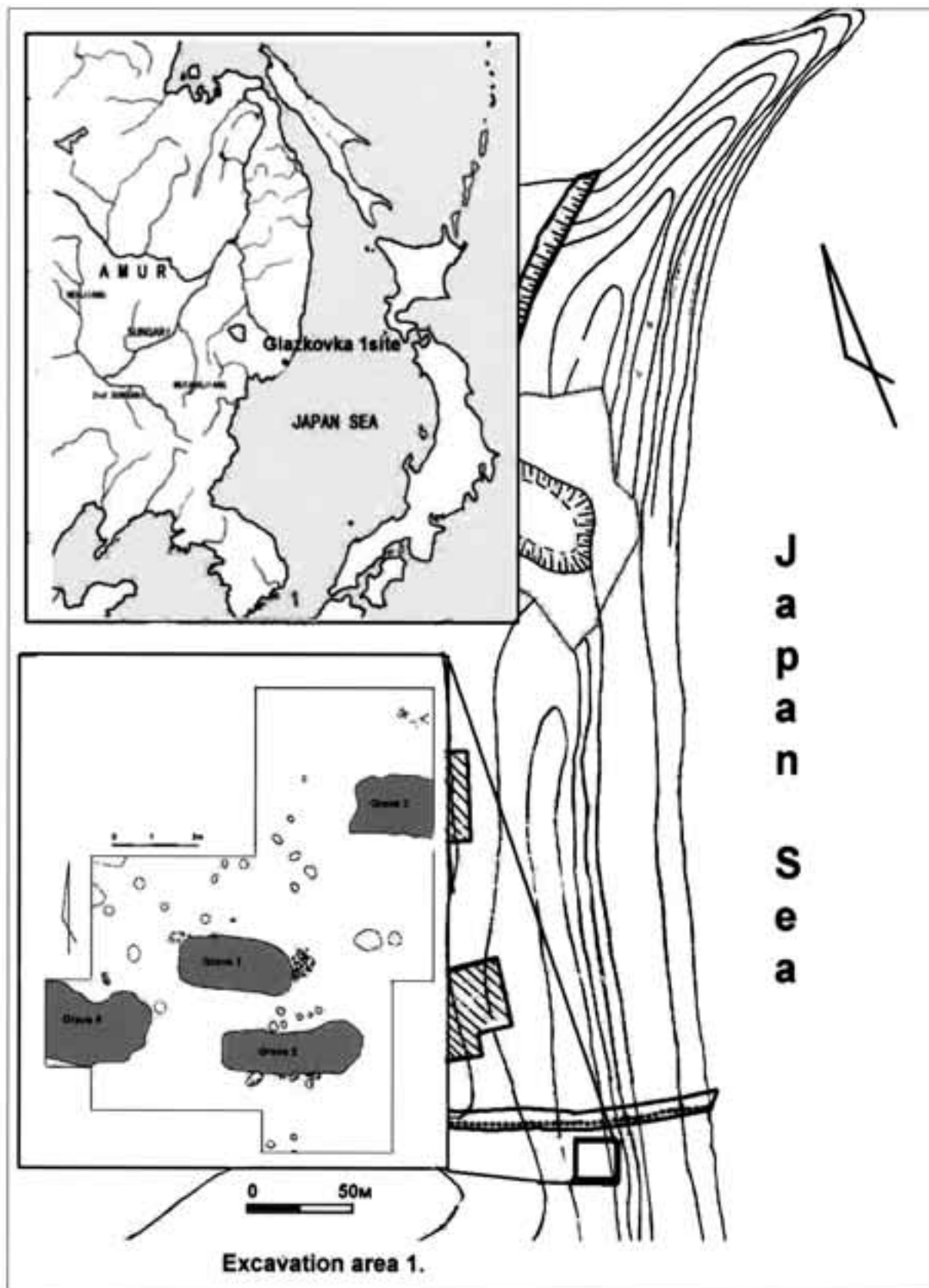
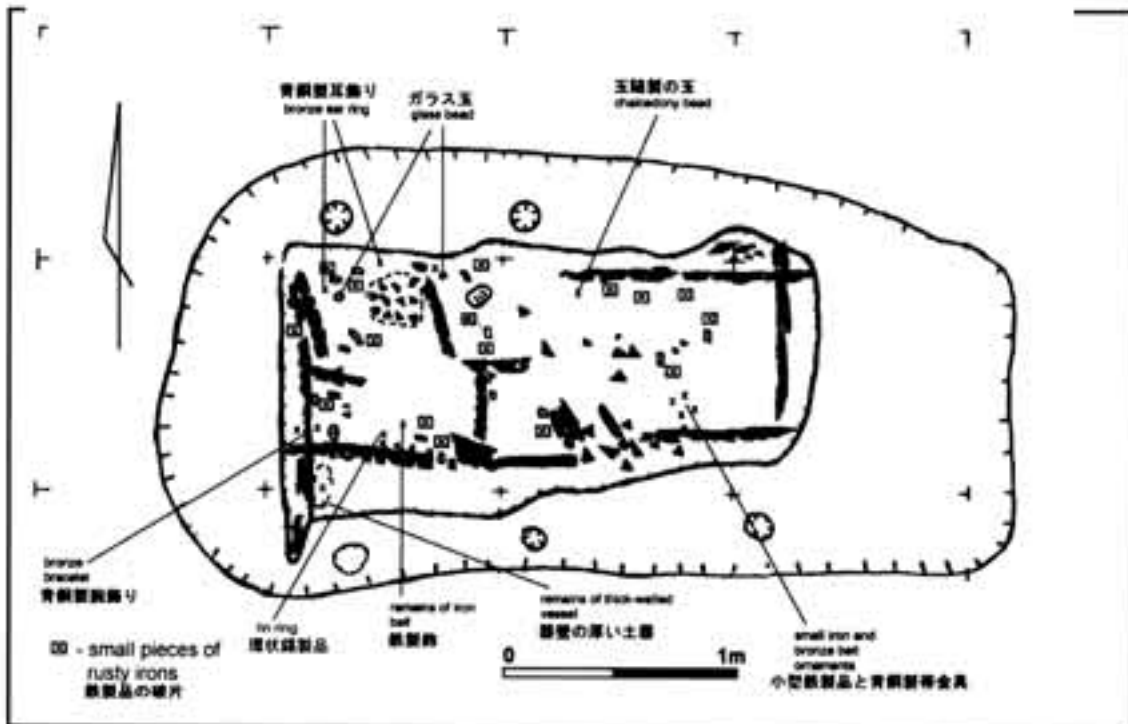
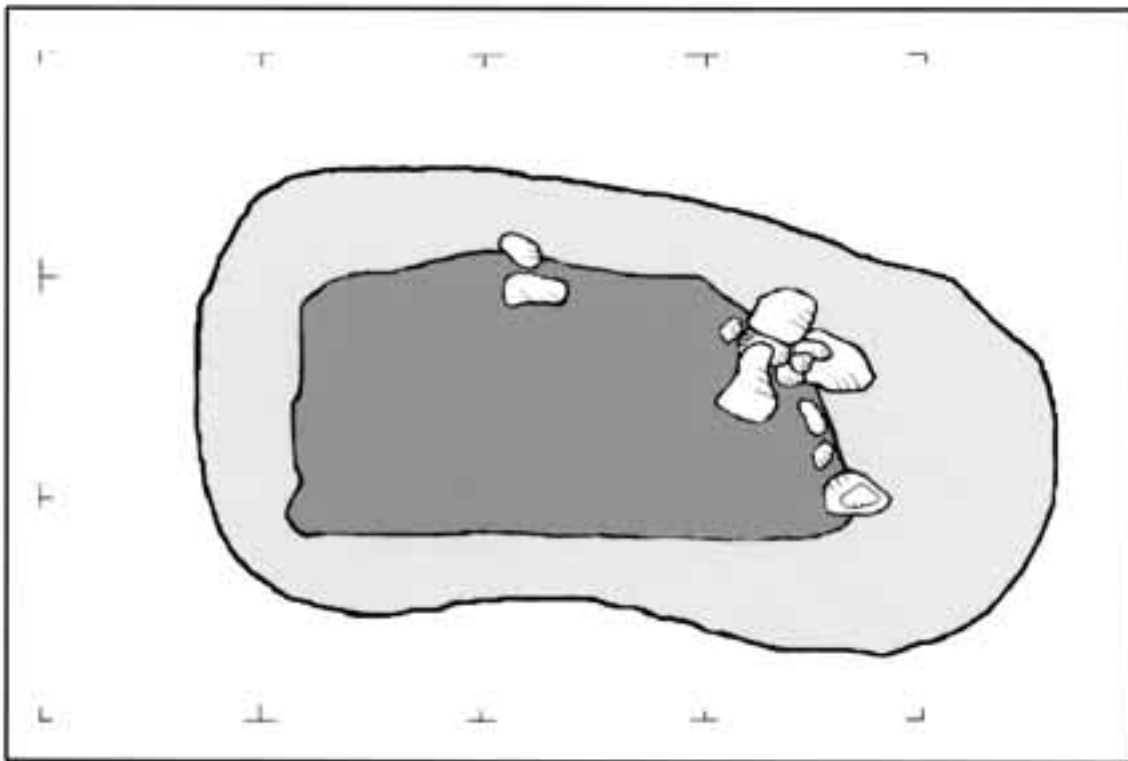


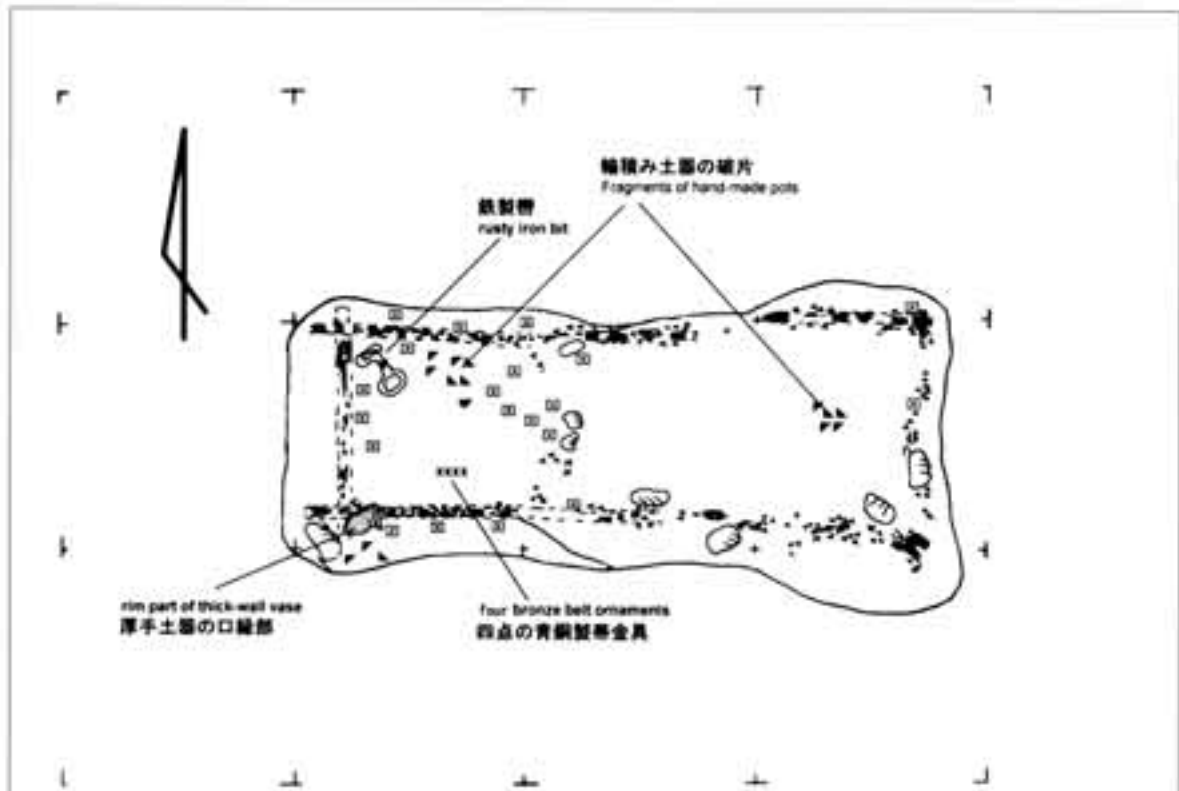
Fig. 2 グラズコフカ 1 遺跡測量図 (Map of the Glazkovka-1 site)



The map of level 1 and 5 of the Grave 1.

Fig. 3 1号墓実測図 (Grave-1)





The map of 4 and 5 levels of the Grave 2

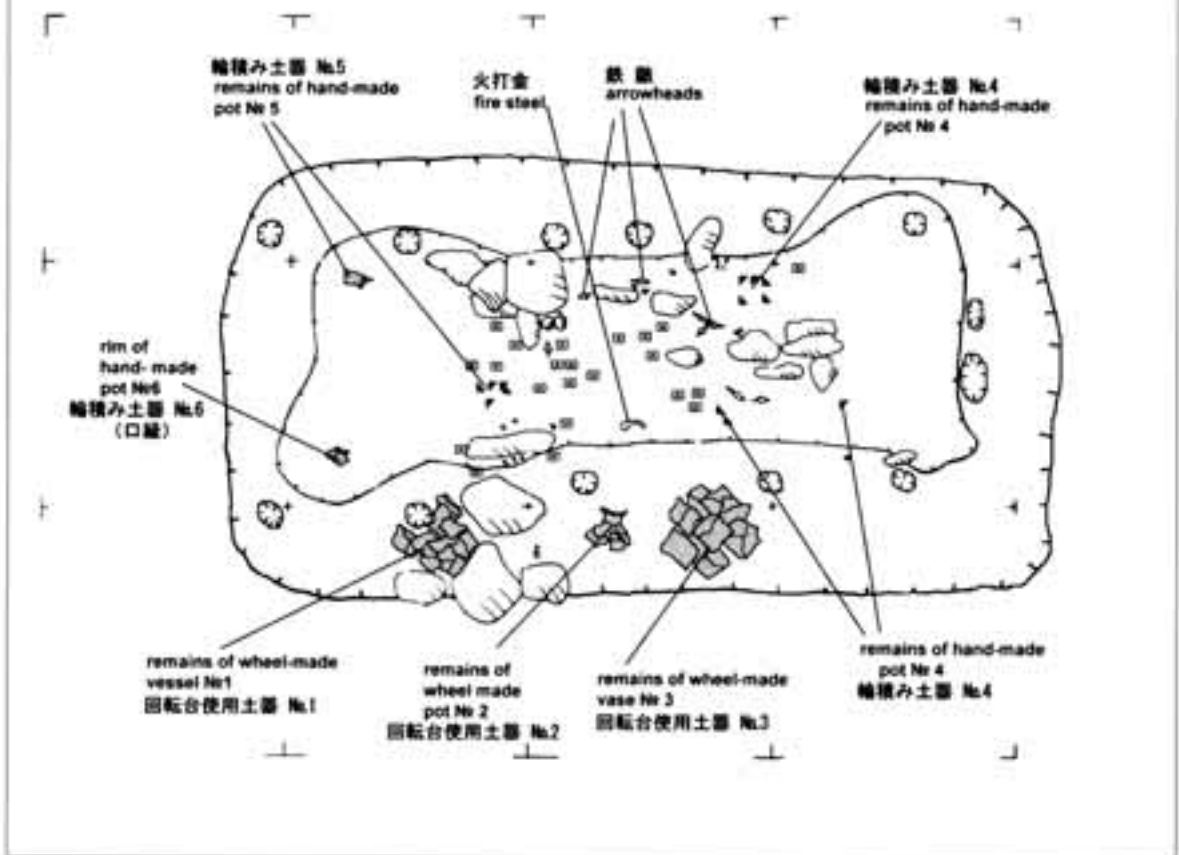


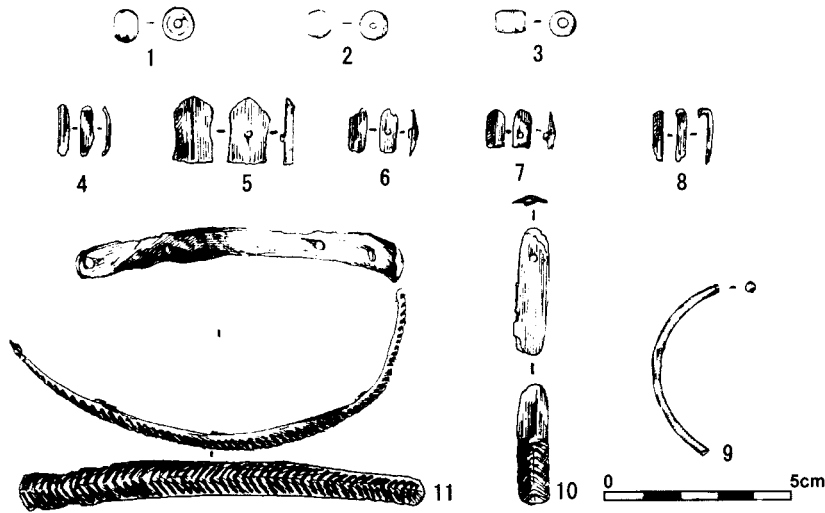
Fig. 4 2号墓実測図 (Grave-2)



環状錫製品出土状態 (the digging of Tin ring)



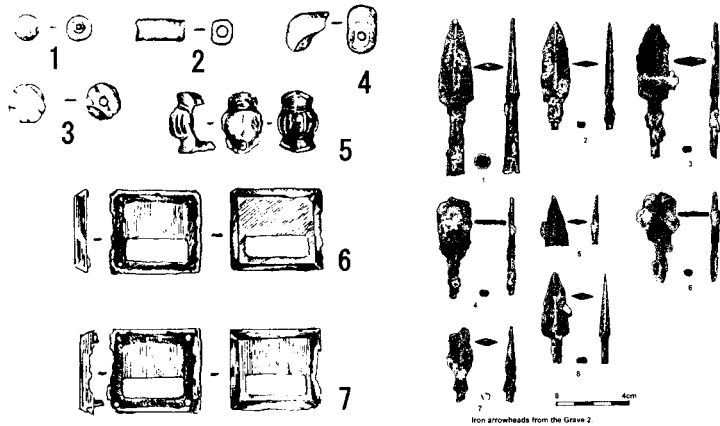
環状錫製品 (Tin ring)



出土遺物 (relics)

- 1 ガラス玉 (乳白色)
- 2 紅玉隨の玉
- 3 紅玉隨の玉
- 4 ~ 8 青銅器片
- 9 青銅鐙 (耳飾り?)
- 10・11 青銅腕飾り

1 号墓  
Grave-1



鉄鏃 (arrowheads)

2 号墓  
Grave-2

玉類・カンザシと帯金具 (beads, hairpin and belt ornaments)

- 1 ガラス玉 (白色) 2 玉隨の管玉
- 3 ガラス玉 (青色) 4 玉隨の玉
- 5 カンザシ 6・7 帯金具 (巡方) 8・9 帯金具 (丸鞘)



Fig .5 1号墓(上段)・2号墓(下段)の出土遺物 (relics from Grave-1, 2)

の砂を剥ぐと木材を井桁に組み合わせた痕跡が現れていた。

遅い回転で作られた三個体の壺上半部の破片が、墓坑の上層から下層まで無秩序に出土している。厚手の器壁を持つ甕の破片が、墓坑南部の木槨と墓坑掘り形の縁の間から出土している。甕の胎土は混和剤を多く含んで非常に質が悪く、高速の回転で製作されている。また、比較的低い温度で焼成されている。小さな鋳を伴い表面に刻文が施された青銅の腕飾りと、内面に皮革を残した断片が墓坑の南東隅で検出されている。二個の青銅製耳飾りは、玉随製丸玉の近くで検出した。その他、錆がひどくて性格が不明の鉄製品の破片多数や、小さな鉄鈴、錫製の耳飾りなどを墓坑から検出している。

(2) 2号墓 第三層の海砂利を含む層と茶色砂層を除去したところで、長方形の墓坑埋土を検出した。墓坑埋土の上面でロクロ使用土器の破片がいくつか出土しており、また、墓坑上面の南から北西隅に沿って木炭が集中していた。2号墓は1号墓と同じように、3.6×2mの大きさで墓坑が掘られている。墓坑底部は、2.8×1.3mで深さは58cmの規模で、長軸が東西方向(方位角90度)に向いている。墓坑底では木槨の焼け落ちた炭化材を多数検出している。墓坑側壁の西半分は粘土が貼られていた。木槨の材に沿って、木に残された錆の痕跡から、多数の鉄製鋸を破片や完形で検出している。

青銅製帯金具、いちじるしく錆びた鉄製カンザシ、鉄鏃10点、そのほか錆がはなはだしい鉄製品多数が墓坑から出土している。装飾を持つ青銅製簪が、墓坑の南東隅の付近で出土している。ゆっくりした回転で作られた甕の口縁の大きな破片が二個、墓坑の西部にある木槨材近くから出土している。埋葬の時に木槨の周囲に木柱をたてた穴が、いくつか墓坑から検出されている。実際に、これらの柱穴の周囲では多数の海砂利や非常に大きな厚手土器の破片が埋められていた。

(3) 調査結果 出土品の分析から、埋葬が行われた時期が9世紀後半で、渤海時代の墓地であると判断できる。埋葬時の儀式を明確にすることは困難だが、そのいくぶんかの特色は復元できる。

- ・おそらく、すべての埋葬施設で埋葬に必要な広さと高さを持った木棺や木槨の中で、二次的な着火儀礼が執行されたものと思われる。
- ・全ての埋葬施設で、人骨の破片がまったく検出されなかった。
- ・すべての墓坑は、特別に掘られた幅の広い掘り形を持っている。
- ・全ての掘り形の内側から、埋葬時の構築材(?)が発見されている。

(ユーリ G.ニキーチン・翻訳 小嶋)

Yury G. Nikitin

#### Medieval burial ground in Glazkovka bay.

Medieval burial ground Glazkovka 1 was found out in October 1990 at realization of archeological researches in a zone of construction of Experimental Base of Seafood nearby of Glazkovka village of Lazo District in Primorye. The site is located on an ancient coastal bar in a southwest part of Glazkovka bay in 60 m from a coastal line. Northern part of a bar is strongly destroyed by new construction work, from the west it is limited to a small drying out bog. There was picked up the small collection of sherds of handmade and wheel made pottery on the destroyed part of a coastal bar. Two whole and two in part destroyed burials on the kept part of a coastal bar, which had small sea pebble barrows in an antiquity, probably. Traces of them were kept only as a congestion of those stones revealed right after of removal of a sod.

There was a stratigraphical picture as following :

- 1 .Sod-the dark brown sandy loam sated organic material and modern dust, capacity 12-16 cm.
- 2 .The layer of brown sand with large sea pebbles, capacity from 18 up to 22 cm.

3 .The thin layer of slightly dark brown sand, thickness of 1-3 cm(ancient turf).

4 .Nature sand of yellow color, with spots of marsh rust.

Sepulchral stains were found out after removal of a layer of brown sand on the depth of 20-25 cm from a modern surface.

#### Burial 1.

The sepulchral hole of almost correct rectangular form was oriented by the long side from the east to the west(an azimuth 87 °).The tomb in the size 2,2 × 1,2 m was constructed at the bottom part of the sepulchral foundation ditch in the size 3,4 × 2,1 m on depth 25-30 cm from it's edge. There were found out the rests of a wooden frame as the small burned down wooden pieces concentrated along boards of a tomb during clearing the burial. Some of them were kept small iron cramps-fastening details of a wooden frame. Several traces of angular connections wooden frame as strips of dark grey sand mixed with a wood decay were revealed in a southwest corner of the tomb.

Many fragments of three pots, which were made on a slow circle, were found out during excavation of a tomb : disorders of the top parts of the pots inverted by rims to a bottom of the grave. Disorder remains of big thick-walled vessel were found out in a southern board of a grave (between the rests of a wooden frame and edge territory of a foundation ditch).The vessel was made on a fast circle of the test of very bad quality, with a plenty of large impurity and is burnt at rather low temperature. The bronze bracelet with a goffered face with small bronze tacks and the rests of leather on internal surface were found out at the bottom of a southeast corner of a tomb. The rests of two earrings as thin bronze rings with round chalcedony beads found out near to it. Besides many small fragments of strongly rusty iron artifacts of the uncertain form, small iron and bronze belt ornaments, the rests of small iron bell and fragments of tin ear ring were found out into the grave.

#### Burial 2.

The sepulchral stain of almost rectangular form has come to light after disassembly of three layers large sea pebble and removals of a layer of brown sand. There were revealed some fragments of wheel made ceramics on a surface of a sepulchral stain and a congestion of the fine charcoal concentrated along a southern board of a tomb and in a northwest corner. Burial 2(as well as previous)was constructed in specially dug foundation ditch in the size 3,6 × 2 m. The tomb, the size 2,8 × 1,3 m and depth of 58 cm, was oriented by the long side strictly from the east to the west(an azimuth 90 °). There were revealed the numerous rests of the burned down wooden frame scattered on the bottom part of the grave. Lateral walls of the western half of tomb were covered with a layer of clay. Many fragments and the whole iron cramps with traces of wood on the rusty surfaces were found along boards of the wooden frame.

Four bronze metal plates, a strong rusty iron bit, ten iron arrowheads and a many fragments of strongly rusty iron products were found out in the grave. One decorated bronze hairpin was revealed in a southeast corner of the burial besides. The big fragments of rims from two vessels, which were made on a slow circle, were found in the western part of a tomb, almost at the board. Several postholes from the wooden columns of a funeral construction located around a sepulchral frame were revealed in a bottom part of the foundation ditch of a tomb. Practically, all the space around of these holes was filled with large sea pebbles and several fragments of very big thick-walled vessel were found out between them.

The analysis of the collection allows dating burials by second half of 9th centuries, and to connect the graveyard to epoch of the Bohai State. The certain difficulties are caused with identification of a funeral ceremony ; however it's some features can be restored :

- Perhaps, all burials are executed on a ceremony of burning of the secondary remains in a wooden coffin or in a wooden frame, enough spacious for burial to a full height.
- In all burials were not found any fragments of human bones.
- All tombs were constructed in specially dug wide foundation ditches.
- The rests of a funeral construction(?)were found out inside all foundation ditches.

## 2 グラスコフカ 1 遺跡出土金属製品の分析について

本資料の材質調査にはエネルギー分散型蛍光X線分析を用いて、非破壊で行った。分析装置および測定条件は以下のとおりである。

分析装置 堀場製作所製 MESA - 500

測定条件 X線管球：ロジウム 管電圧：15kv、50kv 測定時間：500秒

資料室雰囲気：真空

本装置ではファンダメンタル・パラメータ法を用いて定量分析を行うことが出来るが、今回は資料の劣化状態から考えて、主成分の定性分析を目的とした。

分析の結果、本資料は錫を主成分としたものであると考えられる。

(中山由美)

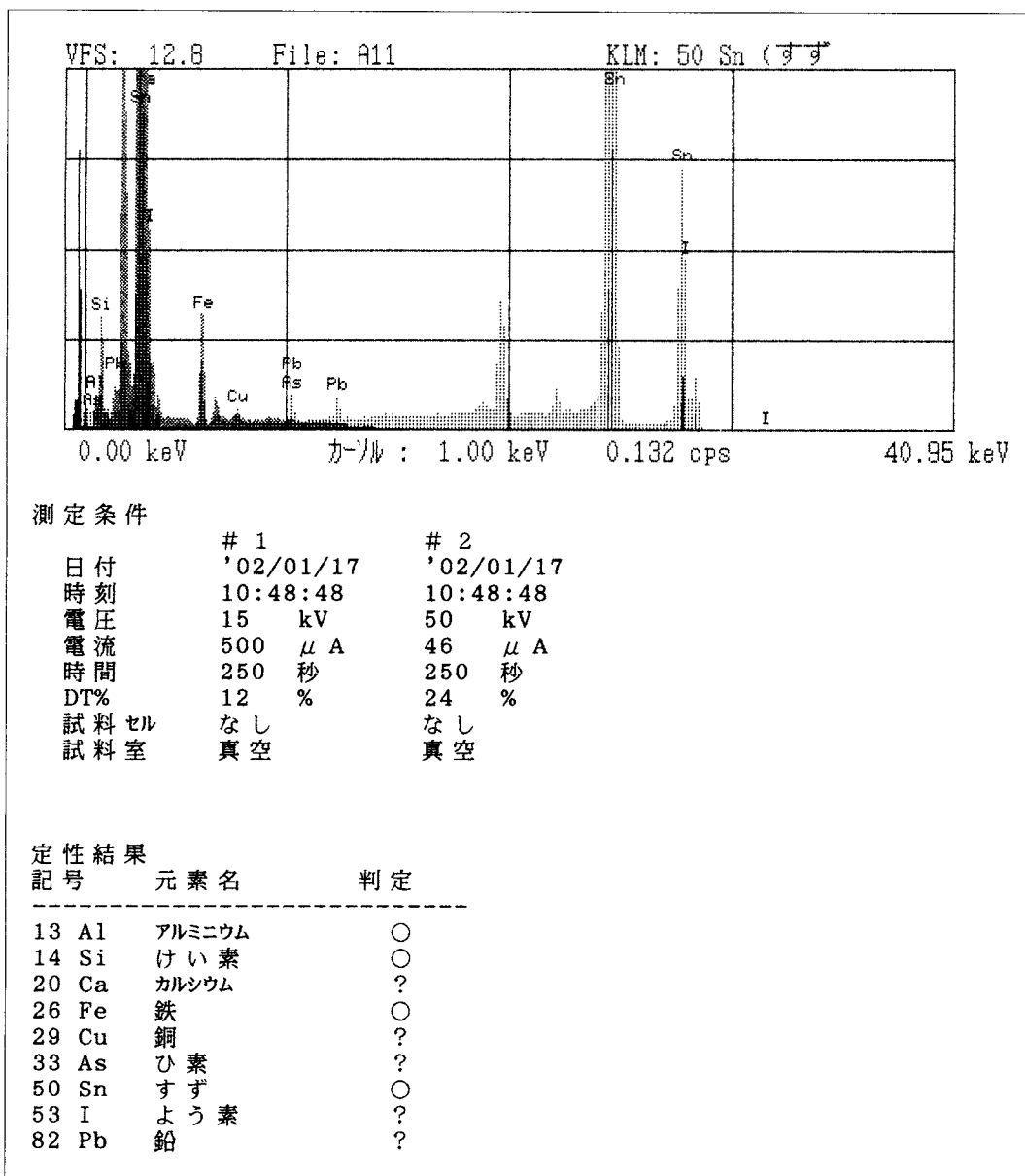


Fig. 6 グラスコフカ 1 遺跡出土環状錫製品分析表 (analysis of the Tin ring)

### 3 ロシア沿海地方の錫製品と北方日本海世界の交流

日本列島の環状錫製品は、北海道や北東北の7～8世紀の墳墓から出土している。1997年に集成した段階では33遺跡から出土している。今までに進めてきた検討<sup>(1)</sup>の要点を以下に紹介する。

- (1) 環状錫製品は北上川流域・八戸市周辺、北海道千歳低地周辺で出土している。
- (2) 7～8世紀の墳墓から出土している。
- (3) 北日本には錫鉱脈が存在しない。
- (4) 奈良時代の畿内や西日本では錫が貴重品で、和銅開珎などの青銅器には錫の代用にアンチモンが使用されている。
- (5) 西日本の錫鉱山が開発されるのは、中世以降である。
- (6) 北日本の環状錫製品が畿内や西日本から持ち込まれた可能性は考えられない。
- (7) 北日本に最も近い錫鉱山は、ロシア連邦沿海地方のシホテアリン山脈の日本海側斜面である。
- (8) ロシア沿海地方南部では、青銅器時代の遺跡から錫塊が出土し、また錫産出地に近いシニエスカルイ遺跡では青銅器の鋳型が出土するなど、活発な金属器生産活動が認められる。
- (9) 以上の検討から、北日本の環状錫製品はロシア沿海地方の南部から交易品として持ち込まれたと推定される。

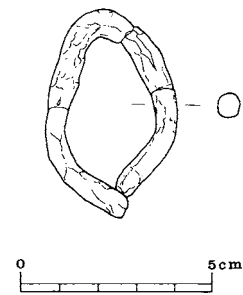


Fig.7 北海道の環状錫製品  
蘭島遺跡 D 地点81 10D 土坑  
(Tin ring Ranshima site  
Hokkaido)

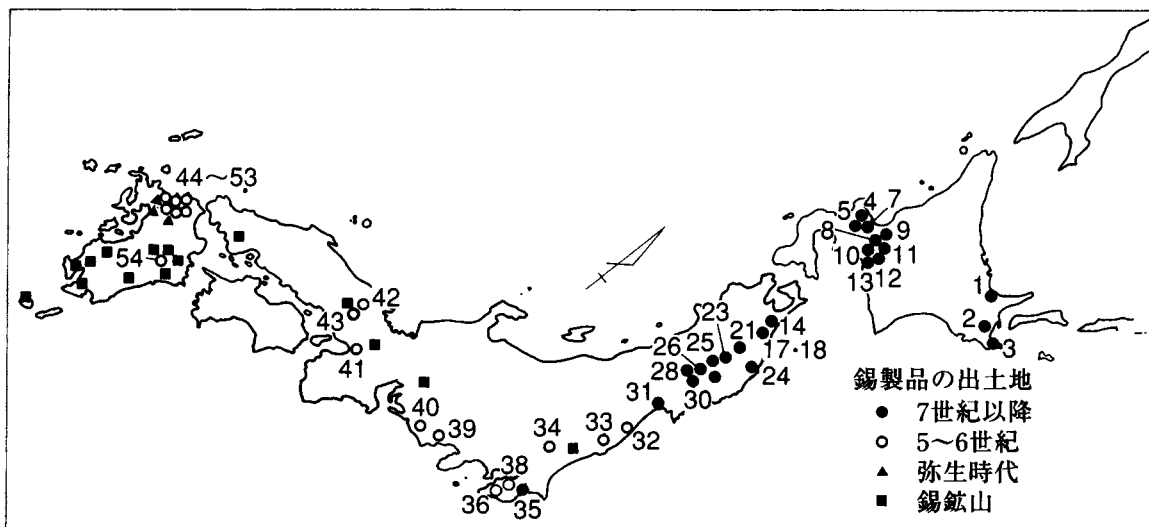


Fig.8 日本列島の錫製品出土地と錫鉱分布図

グラスコフカ1遺跡で出土した環状錫製品は、断面径3.5mmの錫棒を直径5cm前後の環状に曲げたものである。小樽市蘭島遺跡D地点<sup>(2)</sup>で出土した環状錫製品は、断面径が5～8mmの錫棒を直径5cm前後の環状に曲げて作られており、グラスコフカ1遺跡の資料と形状が酷似している。今回の調査により、北日本とロシア沿海地方南部でほぼ同時代に同じ形状の環状錫製品が使用されていたことを明らかにできた。上述のように、錫資源の産出しない北日本にロシア沿海地方から環状錫製品が持ち込まれた可能性を考えてきたが、グラスコフカ1遺跡の環状錫製品はこの仮説を実証する大きな手懸りとなるものである。

ニキーチン氏の検討によるとグラスコフカ1遺跡は9世紀後半に比定されており、7世紀の蘭島遺跡D地点の資料との間には100年以上の開きがある。しかし、遺跡から出土する環状錫製品は茶灰色

の錆色を呈していて、鉄製品と混同されている可能性がある。グラスコフカ1遺跡の資料を錫製品の標本として検討することにより、ロシア沿海地方でさらに古い時期の環状錫製品が検出されることを期待している。

ロシア沿海地方のナホトカ市から北では急峻な山が海岸に迫っていて、湾や河口周辺に小さな平野が点々と存在する地形である。ニキーチン氏によると、地形が険しく、道路事情も良くないために発掘調査が進んでいないが、このような海岸小平野にも遺跡が多数見つかったとのことである。

西暦3世紀頃の沿海地方南部に住んでいた民族は、沃沮や挹婁と呼ばれていた。『魏書』『挹婁伝』には「其の国、乗船を便くして寇盗す」とあり、また『通典』『東沃沮伝』には「挹婁は喜びて船に乗り寇抄す」とあるなど、挹婁が活発な海上活動を行っていたことを知ることができる。酒寄雅志氏<sup>(3)</sup>も述べているように、『通典』『東沃沮伝』には「国の人、常に船に乗り、魚を捕る。

風に遭い、吹かれること数十日。東の一島に至り上がる。人有り、言語相曉せず。」とあり、挹婁や沃沮が日本海を越えて異文化と接触していたことが窺われる。7世紀代には、挹婁や沃沮と呼ばれた人々の子孫が靺鞨と呼ばれているが、海上活動の伝統は引き継いでいて、錫製品を携えて北海道南部へ交易に訪れていたのではないだろうか。ちなみに、660年に越国守の阿倍比羅夫が渡嶋で肅慎と交易に失敗して戦いになったことが『日本書紀』『斉明紀』に書かれているが、靺鞨が将来する錫製品の入手も阿倍比羅夫の渡航目的の一つだった可能性がある。

グラスコフカ1遺跡で出土した環状錫製品は、日本海世界北部の交流史を考える上で重要な資料であり、今後の調査で資料が増加して実体の解明できる日が来ることを期待したい。今回の報告にあたり、ユーリG.ニキーチン氏に無理をお願いして、短時間でグラスコフカ1遺跡の調査概要について原稿を執筆していただいた。ニキーチン氏をはじめ、ウラジオストクの研究所の諸先生には多大なご配慮とご協力をいただき、心から感謝している。この小文が、環日本海交流史を解明する一助になれば幸いである。

(小嶋芳孝)

## 註

- (1) 小嶋芳孝「蝦夷とユーラシア大陸の交流」『古代蝦夷の世界と交流』名著出版1996年  
小嶋芳孝「日本海の島々と靺鞨・渤海の交流」『境界の日本史』山川出版1997年
- (2) 『蘭島遺跡D地点』北海道小樽市教育委員会1991年
- (3) 酒寄雅志「日本と渤海・靺鞨の交流」『境界の日本史』山川出版1997年

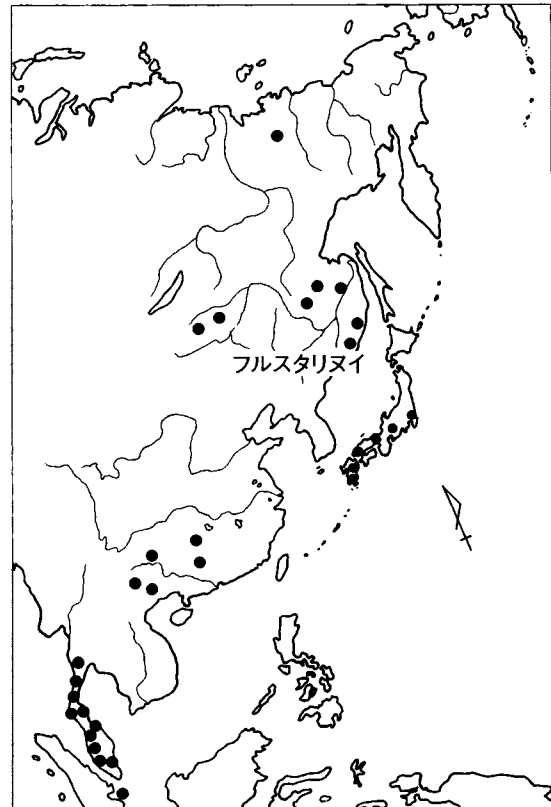


Fig.9 東アジアの錫鉱山分布図

# 志賀町末吉館畑遺跡の発掘調査

加藤 克郎

## はじめに

末吉館畑遺跡は、羽咋郡志賀町末吉地内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。当該地区内において石川県農林水産部農地整備課が県営ほ場整備事業（末吉地区）を行うことになった。そこで石川県教育委員会と石川県羽咋農林総合事務所との間で協議が行われ、石川県教育委員会文化財課が平成12（2000）年10月・11月に約14haを対象に試掘調査を実施し、事業区域内に約4,300㎡広がることが判明した。これを受けて石川県教育委員会は、羽咋農林総合事務所と協議の上、工事着手前に発掘調査を実施することになった。この発掘調査は石川県教育委員会から財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託され、調査に係る費用は石川県農林水産部農地整備課と、石川県教育委員会が文化庁の補助を受けて負担した。

発掘調査は財団法人石川県埋蔵文化財センター調査部調査第2課主事宮川勝次と同課主事加藤克郎が担当し、平成13（2001）年5月8日から5月29日にかけて実施した。調査面積は180㎡である。調査の結果、A区B区ともに遺構・遺物は希薄であった。調査期間中は天候にも恵まれ現地調査は予定通り終了した。

さて、本報告における挿図中の方位は磁北で、水平基準は海拔高である。また調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

なお本報告をもって発掘調査報告書に代えるものとする。

## 遺跡の位置と環境

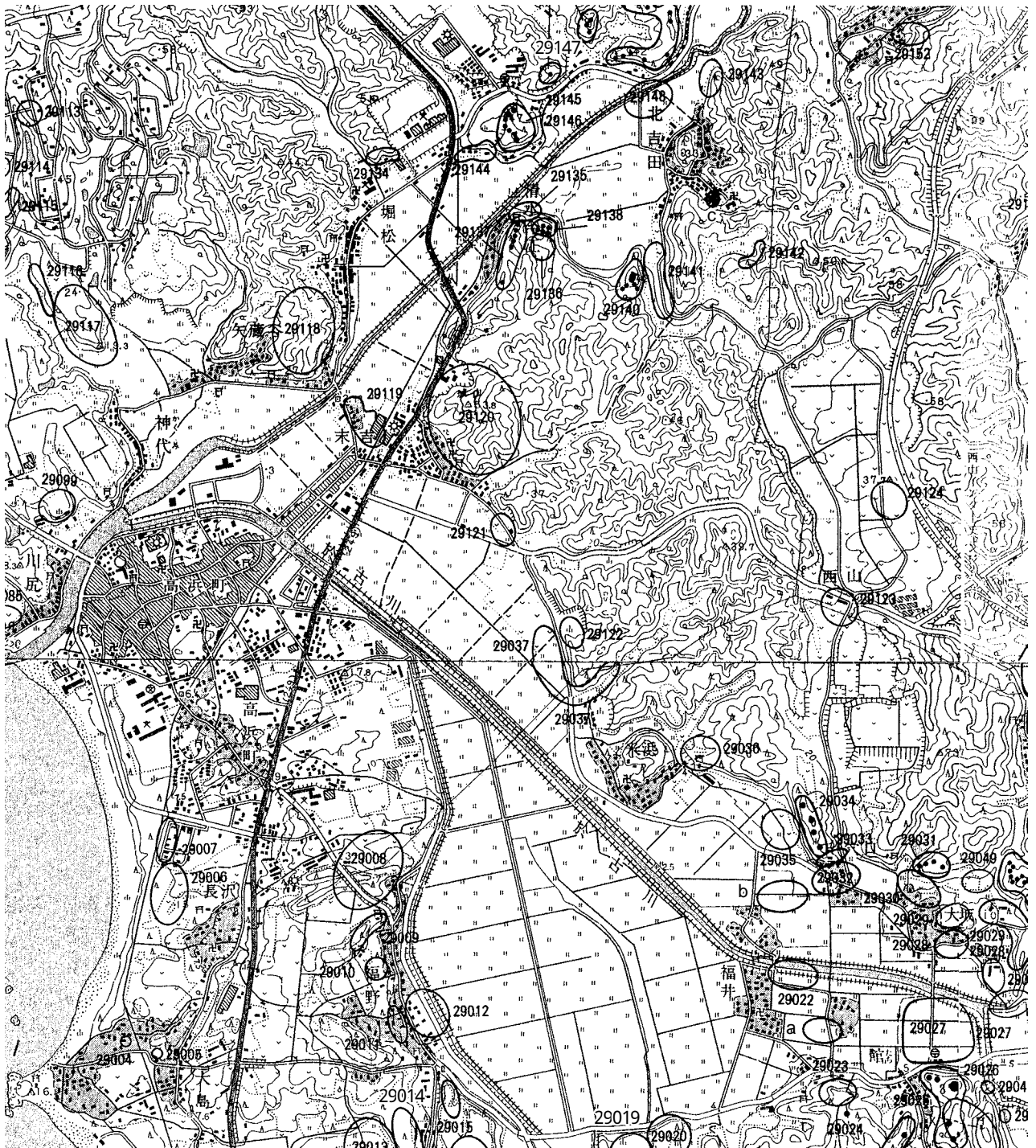
**遺跡の位置** 遺跡の所在する羽咋郡志賀町は、日本海に突出した能登半島の中央西部に位置する、東西約10km、南北約20kmの総面積約122km<sup>2</sup>の町である。町域の西部は日本海に面し、町域の東部から南部にかけては眉丈山系に連なる低丘陵地帯である。これら丘陵地帯に囲まれた平野部は、町の北東の富来町奥刈越峠を源とする米町川と、南東の眉丈山系を源とする於古川により形成され、この2河川が神代で合流して神代川となり、町のほぼ中央部で日本海に注ぐ。海岸線は神代川河口を境として様相は一変し、北側は輝石安山岩質の集塊岩の岩石海岸で、対して南側は海岸砂丘地である。

さて於古川の貫流する低地一体は旧福野潟が広がっていたところで、かつては東西約2km、南北約4km、周囲は10km以上の広がりを持っていたと推定されており、この旧福野潟の推定汀線に面して福野、宿女、福井、上柵、矢駄、穴口、米浜、末吉の各集落が点在する。旧福野潟は、縄文時代早期末から前期のいわゆる縄文海進時に形成された入江に由来し、その入江が砂丘の形成により次第に湾口が塞がれ、以後於古川や米町川の水流失砂の堆積作用と、近世以来の干拓により次第に陸化したものである。



第1図 遺跡の位置

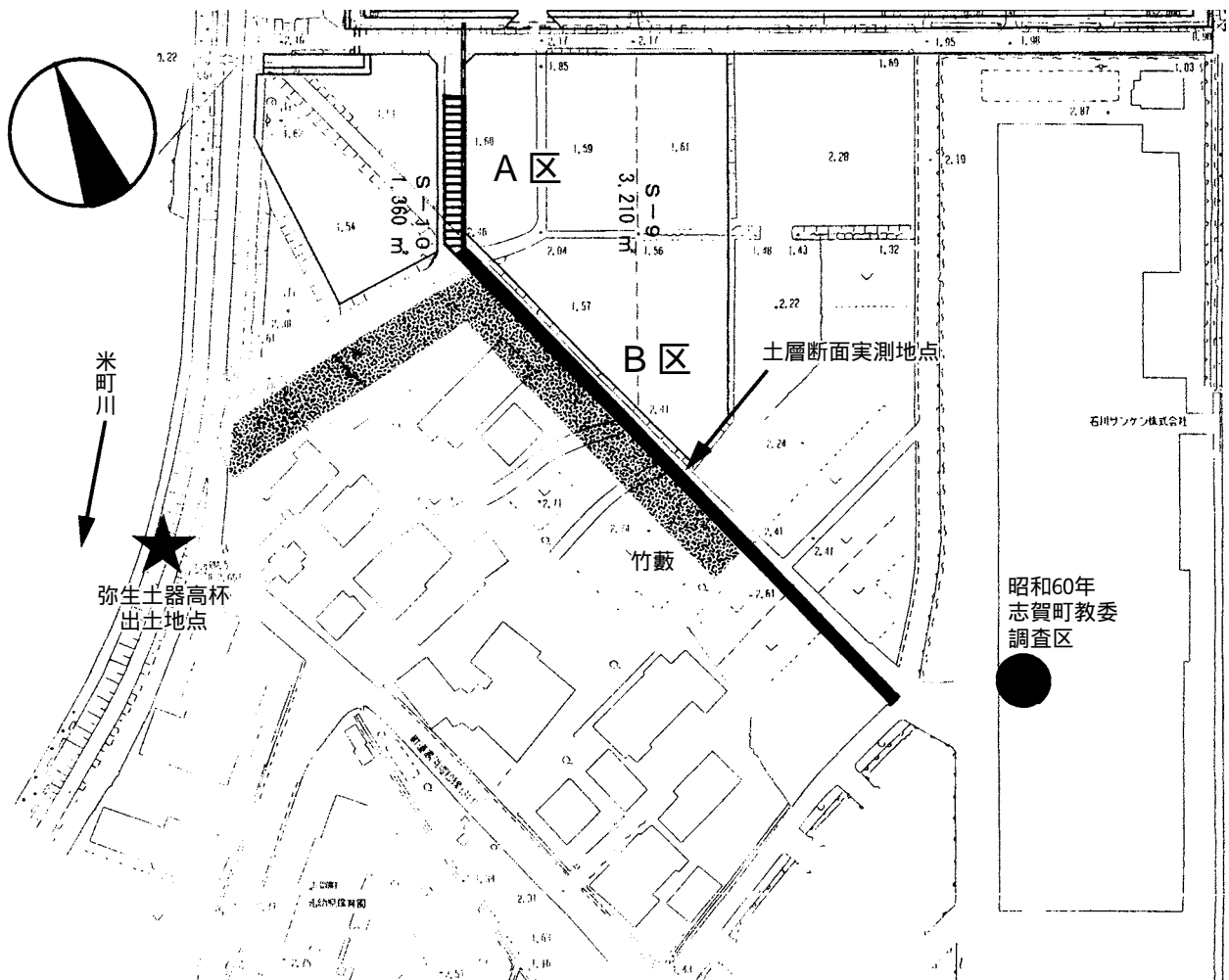




第2図 周辺の遺跡 (S = 1 / 25,000)

- |                       |                       |                     |
|-----------------------|-----------------------|---------------------|
| 29004大島氏館跡 (平安)       | 29005大島たたら遺跡 (不詳)     | 29006長沢中世遺跡 (中世)    |
| 29007長沢ハマナス遺跡 (中世)    | 29008大念寺跡 (中世)        | 29009福野横穴群 (古墳)     |
| 29010福野上野遺跡 (不詳)      | 29011福野高野坂遺跡 (縄文~古墳)  | 29012福野前川遺跡 (弥生~中世) |
| 29013大島神主山遺跡 (古墳~平安)  | 29014長沢堂ヶ谷内遺跡 (縄文)    | 29015福野経塚中世墳墓 (中世)  |
| 29019福井まんだら B 遺跡 (中世) | 29020福井まんだら A 遺跡 (縄文) | 29022館泉田遺跡 (不詳)     |
| 29023館遺跡 (不詳)         | 29024おお干場古墳 (古墳)      | 29026二所宮山古墳群 (古墳)   |

- |                   |                      |                         |
|-------------------|----------------------|-------------------------|
| 29027大坂舟の町遺跡(不詳)  | 29028大坂坊の下遺跡(不詳)     | 29029大坂坊の上遺跡(古墳)        |
| 29030大坂遺跡(縄文)     | 29031大坂オバタケ古墳群(古墳)   | 29032穴口貝塚(縄文)           |
| 29033穴口宮の下遺跡(不詳)  | 29034穴口古墳群(古墳)       | 29035米浜藤の森遺跡(平安)        |
| 29036米浜はげの下遺跡(古墳) | 29037米浜遺跡(縄文)        | 29045二所宮日詰用水遺跡(平安)      |
| 29049大坂寺畑遺跡(古墳)   | 29099川尻ナベタカ遺跡(縄文・弥生) | 29113志賀の郷遺跡(縄文)         |
| 29114志賀の郷B遺跡(縄文)  | 29115志賀の郷A遺跡(縄文)     | 29116神代窯跡群(平安)          |
| 29117神代貝塚(縄文)     | 29118堀松貝塚(縄文)        | 29119末吉館畑遺跡(弥生・平安~中世)   |
| 29120末吉城跡(中世)     | 29121末吉瓦畠遺跡(不詳)      | 29122米浜クルマダシ遺跡(奈良・平安)   |
| 29123矢駄おはい山遺跡(縄文) | 29124安津見西山遺跡(縄文)     | 29134堀松横穴群(古墳)          |
| 29135清水宮の下遺跡(不詳)  | 29136清水今江遺跡(不詳)      | 29137清水古墳群(古墳)          |
| 29138北吉田フルワ遺跡(弥生) | 29140北吉田ノノメ古墳群(古墳)   | 29141北吉田南遺跡(不詳)         |
| 29142北吉田横穴(不詳)    | 29143北吉田遺跡(縄文)       | 29144清水今江ニシャグチ遺跡(古墳~中世) |
| 29145堀松遺跡(弥生)     | 29146堀松古墳群(古墳)       | 29147北吉田古墳群(古墳)         |
| 29148北吉田ゆ場遺跡(縄文)  | 29152出雲堂坂遺跡(中世)      |                         |
- a 館郷堂遺跡(中世)   b 穴口遺跡(弥生)   c 北吉田埋蔵銭遺跡(中世)   (a~cは新規の遺跡)



第3図 調査区 位置図 (S = 1 / 1 500)

周辺の遺跡 本遺跡の周辺では、旧福野潟低湿地帯を取り囲む丘陵や微高地に、比較的多くの遺跡が展開している。縄文時代では、前期の川尻ナベンタカ遺跡、中期には堀松・神代・穴口の3貝塚が存在する。中期前葉～後・晩期の大坂遺跡、中期中葉～後葉の長沢堂ヶ谷遺跡、晩期の米浜遺跡がある。

弥生時代については北吉田米町川遺跡から中期初頭の柴山出村式土器が出土している。これに後続する中期小松式土器は福野前川遺跡、後期の遺跡として大坂坊の下遺跡・穴口遺跡の他、高地性集落として著名な北吉田フルワ遺跡がある。

古墳時代では、米浜はげの下遺跡などの集落遺跡の他、前・中期の大坂城ヶ墓古墳群、中期の堀松古墳群・清水古墳群、後期の北吉田古墳群などが知られている。

古代律令制下では本遺跡周辺は能登国羽咋郡に属し、『和名類聚抄』に記される都知郷の範疇であったと考えられている。周辺の古代遺跡では、米浜遺跡で6～9世紀の製塩土器が出土しており、また大坂舟の町遺跡にて丸木舟・櫂や浮き出土しており注目される。これらのことからこの時期には旧福野潟は海水の流入する潟湖で、製塩や漁撈を行っていたことがうかがわれる。

中世では長沢中世遺跡、大念寺跡、福野経塚中世墳墓、福井マンダラ寺B遺跡、北吉田埋蔵銭遺跡の他、本遺跡の東約400mの地点に在地領主手筒氏・河野氏の山城との伝承がある末吉城跡がある。また旧福野潟周辺は石動山周辺と並んで県内有数の板碑集中地区で、時期は鎌倉時代後期から室町時代中期にわたる。特に福井所在の正応4(1291)年銘を有する大日板碑は、県内で2番目に古い紀年銘を有する板碑である。また本遺跡の所在する末吉地区には室町期の五輪塔所刻板碑がある。当地域は中世の信仰形態を考察する上でも重要な地域である。

## 調査結果

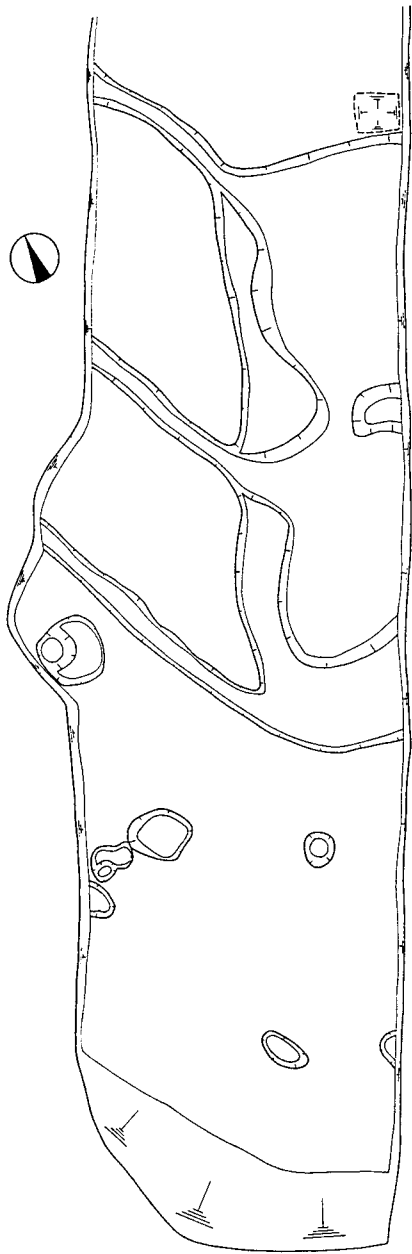
### 1 遺構(第4図、写真4・6)

今回の調査では、北東側の幅2m、長さ30m、現況が水田である調査区をA区とし、またその南側の幅1m、長さ120m、現況が農道である調査区をB区とした。

A区 A区では現況水田面より約20cm下(海拔1.4m)で褐灰色粗砂の遺構面が確認された。そして田面から約1.8m下まで掘削すると暗青灰色粘土の湧水層に達した。A区の北側では遺構は検出されなかったが、南側では規模が2.4m×0.5m、深さ2～13cmの浅い落ち込みと、その落ち込みの西側に接する、幅20cm、深さ4cmの3条の溝が検出され、他にピットを7つ検出している(内2つは現代の架穴)。これら遺構の周辺からは須恵器坏小片1点と古瀬戸の天目茶碗小片1点出土しているだけなので、これら遺構の年代を特定するには至っていない。またその性格についても不明である。ちなみに今回A区とした水田の通称はタチバタケ(館畑)ではなくサンガデン(地元では三月田と宛字している)である。

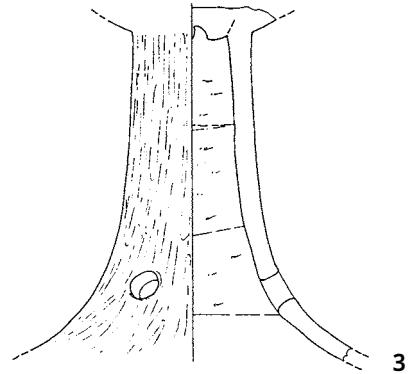
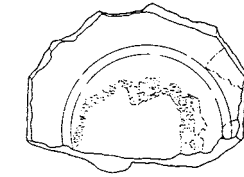
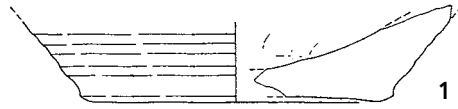
B区 今回B区とした調査区の西側に広がる80m×70mの竹藪に囲まれた区画を地元では館跡とする伝承があり、館跡伝承地及びその東側一帯をタチバタケ(館畑)と通称している。B区南端の東側約10m、現在石川サンケン株式会社本社社屋が建っている地点で、昭和60(1985)年に志賀町教育委員会により発掘調査が行われている。その際には表土から約1m下で平安時代の遺構面が確認され、溝、ピットを検出している(未報告)。遺物としては須恵器・土師器の他、青銅鏡片1点出土している。

しかし志賀町教委調査区に隣接するB区南端では遺構面は確認できなかった。現地表面下約0.3m(海拔2.2m)で、昭和40年代の耕地整理前に利用されていた用水のU字溝の上端を検出、また地表面下約1m(海拔1.5m)でU字溝の底面を検出、そして地表面下約1.3m(海拔1.2m)で耕地整理



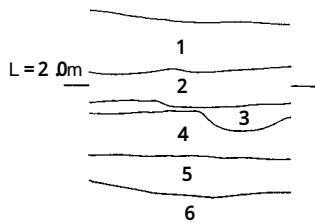
0 2m

第4図 A区南側遺構平面図 (S = 1 / 60)



0 10cm

第5図 出土土器実測図 (S = 1 / 3)



0 2m

第6図 B区土層断面図 (S = 1 / 60)

- 1 明黄褐色砂 (農道造成時の盛土)
- 2 暗茶褐色砂 (旧表土)
- 3 暗茶褐色砂 (淡茶白灰砂が多量に混入)
- 4 淡茶白灰砂
- 5 暗赤褐色砂 (鉄分が多い)
- 6 暗青灰色砂 (粘性あり / A区北端では海拔 0.2m 付近で検出)

の際埋設されたパイプラインの上端が確認された。このB区に埋設されているパイプラインは、調査当時供用中であったため破損することはできなかった。そのためB区全体にわたって旧用水のU字溝上端までは重機により表土を除去することはできたが、U字溝より下に関しては、重機により掘削するとパイプラインを破損するおそれがあったため、複数箇所人力掘削によりパイプラインの埋設深度を確認するにとどめた。以上のようにB区ではパイプライン埋設による攪乱のため遺構面を検出することはできなかったが、中・近世の遺物数点を採集している。

## 2 遺物（第5図、写真8）

遺物としてはB区において珠洲焼片、唐津焼片各1点を採取している。1はB区層序確認トレンチ掘削時に出土した珠洲焼甕の底部である。素地の色調は灰黄色を呈しており、内面には指による縦方向のナデが見られる。14～15世紀の所産であろう。2は1と同じくB区層序確認トレンチ掘削時に出土した唐津焼皿である。素地の色調はにぶい橙色を呈し、内面から外面上部にかけて灰釉がかかっている（高台は無釉）。内面には重ね焼きの砂目跡が巡っている。17世紀前葉のものであろう。3は今回の発掘調査で出土したものではなく、平成9（1997）年2月の米町川河川工事立会いに際して採取された遺物である。その出土地点は、今回の調査区の南西約100mにかつて存在した旧淵端橋の南詰である（現在の淵端橋は河川改修工事の際、約100m下流に新たに架けられたものである）。これは弥生土器高杯脚部で、胎土には粗砂が多く含み、色調は灰白色に近い浅黄橙色である。調整としては、外面はやや摩耗しているが縦方向のミガキが確認でき、内面はナデと螺旋状のケズリが見られる。時期は弥生時代後期後半（法仏式）と見られる。

## まとめ

今回の調査で出土した遺物は小破片かつ少量であるため、本遺跡の年代を考えるには十分ではないが、隣接する昭和60年の志賀町教委調査区の成果をあわせて勘案すると、弥生時代、古代～中・近世に至る遺跡があったものと推定される。さてB区の西側には館跡と伝承される区域があることは先述したが、調査当時B区南西側には幅約1m、高さ約0.5mの土塁状の盛上がりがあり、その上に竹藪が繁茂している状況であった。この盛上がりが伝承のように館に伴うものなのか、それともB区にかつてあった用水浚渫時の排土を盛上げた結果であるものなのかについては、盛土が民地内であったため確認調査をすることができなかった。そのため館跡伝承地については検討課題として残ることになった。今後の調査に期待したい。

## 参考文献

- 『能登志徴』 石川県図書館協会 1937
- 『石川県羽咋郡旧福野瀧周辺総合調査報告書』 石川考古学研究会 1955
- 『志賀町史』資料編第1巻 志賀町役場 1974
- 『志賀町史』沿革編第5巻 志賀町役場 1975
- 『石川县城館跡分布調査報告書』 石川考古学研究会 1988



1 2

3

- 1 末吉城跡遠景（北東から）
- 2 調査区遠景（北から、竹藪が館伝承地）
- 3 A区遺構掘削作業風景



4 A区完掘状況（南から）

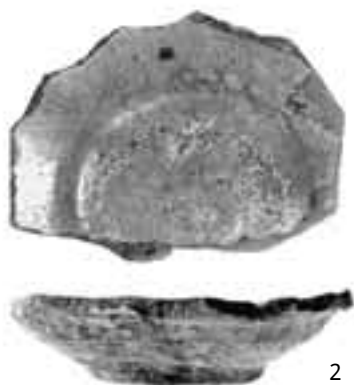


5 6

5 B区作業風景  
6 B区完掘状況(北から)  
7 B区土層断面(第6図に対応)



1



2



3

8 出土遺物(S = 1 / 2)

---

---

## 石川県埋蔵文化財情報

### 第7号

発行日 2002(平成14)年3月29日

発行者 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920 1336 石川県金沢市中戸町18番地 1

TEL 076 229 4477 FAX 076 229 3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

E-mail address [mail@ishikawa-maibun.or.jp](mailto:mail@ishikawa-maibun.or.jp)

印刷 株式会社 橋本礎文堂



